

第五章

集落の構造と景観

1 伊庭集落の敷地内利用

(1) 生業・水路からみた敷地

かつての伊庭集落では、宅地の9割以上が水路に面した土地となっていた(第4章参照)。このような宅地内、もしくは近場の水路には「カワト」が設けられ、カワトを介して田舟を使った水路利用がなされた。水路は内湖につながり、そして水田へと結ばれていたのであり、自動車交通の発達以前の伊庭地区では、このような水運による農耕が盛んであった。その意味で、カワトは生業の場である水田や内湖と、生活の場である宅地とを結ぶ接点に位置していた。

敷地は、主屋のほかに、庭（前庭）、小屋、屋敷畠（裏畠）などから構成されることが多かった。もちろん、水路が隣接している場合はカワトもその重要な構成要素となる。このうち屋敷畠とは、敷地内で自家消費用の野菜等が栽培される場所であるが、水田で収穫した糀を干す場、内湖で採取した藻土を乾燥させる場、練炭を製造する場といったように、水田や内湖から運び込んだものを利用し手作業を行う作業場として広く活用された。そのため、水路・カワトに接した敷地を持つ農家の場合、それらに近い場所に屋敷畠を配置することで、作業の効率性が図られる場合があった。また、聞き取り調査の中では、以前の伊庭集落での一般的な敷地内配置は、北側に家屋（主屋）を置き、日当たりのよい南側に屋敷畠があることが多かったという。これは、栽培する植物の生育環境の確保や、乾燥場としての利用条件の向上が考慮された配置であると考えられる。

よって、運搬条件、日射条件の2つが屋敷畠の位置に大きく関わる要因であるといえる。もちろん、水路の位置などによってこれらが両立する土地は限られたものとなるが、伊庭の集落内の景観を検討する際に重要であることは間違いない。屋敷畠は「裏畠」とも呼ばれるが、これらの呼称は敷地内において屋敷畠は「従」的な位置づけにあることを強くうかがわせるものである。生活という側面からみれば、確かに居住スペースである主屋が重要であることは間違いない。しかし、生業という側面からみれば、屋敷畠は、単に家屋の裏という消極的な理由で配置されたのではなく、生業の利便性や環境が十分に配慮された上の積極的な配置がなされていたことがうかがえる。

また、屋内作業場であり、収穫物や諸道具の保管場として利用されたのが「コヤ」（小屋）である。一般的には1丈4尺の二階建（ツシニ階）で、ツシに藁を干したり、農具や筵などを織る機械を置いていた。田畠での収穫物についても、その一時保管は小屋で行った。そのため、水路・カワトや道路との動線が確保されていた。

このように、伝統的な敷地内の諸要素の配置は、家屋（主屋）よりも屋敷畠や小屋の生業上の利便性が考えられていた可能性がある。また、コヤも家屋の裏、すなわち屋敷畠の近くにあること多かった。

(2) 交通手段の変化に伴う敷地の変化

生業と密接に関わる屋敷畠であったが、生業の変化とともに、その利用機会が減少しつつある。例えば化学肥料の導入によって内湖の藻土の採取を行わなくなった結果、藻土を屋敷畠の隅に積んで乾燥させておく光景は見られなくなった。また糞の乾燥についても、機械化の中で屋敷畠に筵を敷いて広げることがなくなった。そして一番の変化はなんといっても田舟から軽トラなど陸上交通への変化であり、カワトが生業の場と生活の場を結ぶ役割を果たさなくなった。水路から屋敷畠に藻土や糞・藁を運び込んだり、コヤの中に置いている農具を水路に運び出したりすることがなくなり、道路を通じた出し入れへと変わっていったのである。

水路のあった場所に自動車通行可能な道路が敷設される場合もあったが、水路は維持されたまま別の場所に道路が敷設される場合も多く、その場合は道路へのアクセスが以前よりも不便になるケースが生じた。また、農業用機械の大型化という流れの中で、道路からの出し入れが可能な場所にコヤが求められる傾向も生じた。このように、生業の場に向かう交通路との関係性の変化は、屋敷畠やコヤの敷地内における好適地の変化（ないし屋敷畠の存在意義の減少）につながっていった。

このような中で、主屋の更新がなされると、敷地内の空間利用が道路を意識した建物配置へと変更されて

いく。屋敷畠の空閑地は生業上、必要不可欠な場所に位置していないため、そこに主屋が新たに建てられるといった空間利用の逆転現象もみられる。写真47、48は集落の南部の一角について、1946年3月27日撮影分と、1982年10月27日撮影分のおよそ同じ場所を示したものである。写真の中央部を横に流れる水路が埋



写真47 空中写真(1946年3月27日米軍撮影)



写真48 空中写真(1982年10月27日撮影)

め立てられて道路となっていること、それに応じるように水路沿いには屋敷畠とみられる空閑地が確認できていたが、道路になった1982年段階には道路沿いに家屋が並んでいる様子を見て取ることができる。写真の右側にある縦の水路の道路への変化と土地利用の変化の関係についても、同じような点を指摘できるだろう。

もう少し個別的な事例として写真49を挙げておく。ここには、伊庭集落によくみられる構成要素から成り立つ風景が写っている。水路が通り、水路をまたぐように敷地に入るための橋が架けられている。主屋は水路にほぼ面する形に建てられている。しかし、以前、橋の架かっていた場所付近は屋敷畠であった。その面影を残すのは、敷地隅から水路上にもたげかかっているカキの木である。このように、屋敷畠の周囲に植えられていた樹木の一部、特に有用と思われた樹木については、敷地内空間利用の逆転が起こった際に、そのままの位置に残される場合がある。カキをはじめとした有用樹木については後述するが、有用樹が敷地内のどこに植えられているかを確認することが、その敷地の履歴を理解する1つの手段になることを教えてくれる。

いずれにしても、このような敷地内の配置の逆転現象は、農業の方法の変化（道具・運搬方法・肥料）や集落内の交通網の変遷（水路から道路へ）と密接に結びついたものであり、交通体系や土木技術、農業技術といった伊庭集落のスケールをはるかに超えた日本全体の中でおきた変化に対して、伊庭集落の各家庭がとった対応ということができる。逆に言えば、敷地内の配置の履歴に関する記録は、内湖岸地域の独特的な生業とその変化の歴史を紐解く際の有益な一助となる。



写真49 謹節館付近(上杉和央撮影)

(3) 敷地(屋敷畠)の特徴的な木

伊庭集落内の現地踏査を行った結果、屋敷畠や敷地内の周囲に多様な樹木が植えられていることがわかった。それは防風林などの役目は果たさず、また薪炭用というほどの量はない。しかし、多種多様な樹木が植えられており、一部は観賞用であったり、個人の趣味であったりもするが、食用となる果樹のほかに、生活・生業に利用されてきたと思われる有用樹が植えられてもいた。

このような多数の樹木のある敷地からなる集落景観は都市的というよりも、まさに農村的であり、伊庭集落が大規模でありながら「マチ」的ではなく「ムラ」的であったことを景観的に物語る一要素となっている。また、上記のように、有用樹の敷地内での栽培位置は、その敷地の履歴を理解する一助となりうる情報ともなる。

伊庭集落内を歩いたときに、最も目につくのはカキである（写真50、51）。カキは甘柿と渋柿のどちらも植えられており、聞き取りによれば、食用のほか、シブを柿渋に利用することがあったとのことである。

また、シュロも多くみられる樹木の1つである。シュロは幹の周りに生じる纖維を利用してシュロ繩を編む。



写真50 カキ



写真51 カキ



写真52 シュロ

さらに注目すべき樹木にサンショウがある（写真53）。サンショウは葉や実が強い香気を放ち、その香気を利用して食用へと加工されることで知られる。樹高数メートル規模の大きなサンショウが集落内のあるところで確認された。聞き取り調査によれば、これらのサンショウは内湖で捕れた魚を料理する際に、各家庭で利用したのだという。伊庭集落内には料理屋を営んでいた家があるが、そこにも確かにサンショウは確認され、伊庭地区らしい生活の一端として、このサンショウは捉えることが可能である。

また、「イバモモ」という伊庭の名前を冠したモモが集落内に存在していた（写真54）。集落内の現地調査において確認できた本数は3本に過ぎなかったが、聞き取り調査によれば、以前は集落内の様々な場所に生えていたという。イバモモの実の形は橢円計で長径6～8cm程度、短径4～5cm程度であろうか。普通のモモとは異なり、種から果肉がきれいにはがれるのが特徴である。味は極めて美味である。ただ、ヤニが出やすく、ムシが付きやすいという欠点があり、そのため、多様な果樹を購入できるようになった現在では、自家栽培をやめ、木を伐採してしまった家が増えたという。その結果、現在の伊庭集落では、景観上、あまり見かけない樹木となってしまった。しかし、その名称からしても伊庭

と深く結びついて地元住民に親しまれてきたことは明らかであり、数は少ないながらも、今なお伊庭集落の景観の重要な一翼を担っていることは間違いない。



写真53 サンショウ

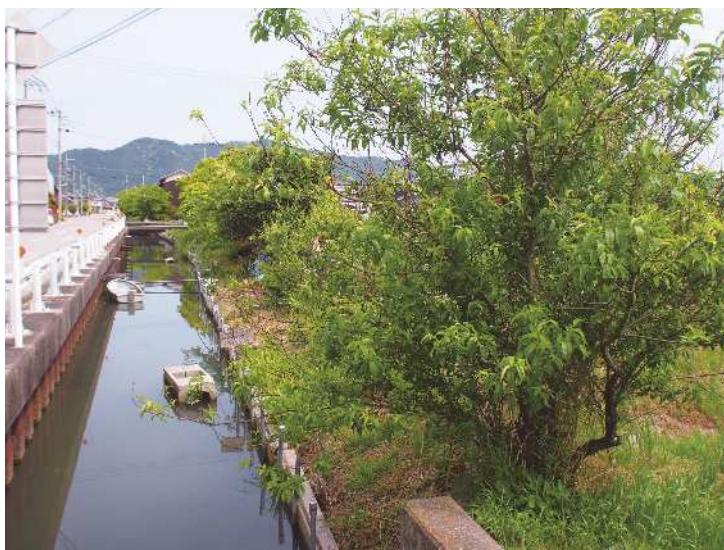


写真54 イバモモ

このような現地踏査の成果を踏まえ、伊庭集落内の全戸を対象としたアンケート調査の中で、敷地内に植えている木についての調査を実施した。回収されたアンケートは267枚であり、回収率は90.5%である（表18）。伊庭集落内のほとんどの家が調査に協力した結果となり、得られた結果は伊庭集落の傾向のみならず、全容をほぼ示すようなものとなる。

表18 代表的な樹木とそれらを屋敷地内で栽培する戸数

樹種	甘柿	渋柿	イバモモ	シュロ	サンショウ	梅	柑橘類
戸数	109	36	7	16	66	50	70
(%)	(41)	(13)	(3)	(6)	(25)	(19)	(26)

割合の母数は267

現地踏査で得られた成果を裏づけるように、甘柿ないし渋柿を敷地内に植えている家は多く、甘柿の場合、全体の41%にあたる家が植えている。ちなみに渋柿を植えている戸数のうち32戸は甘柿も植えている。渋柿のシブの生活・生業面への利用という点からみると、もう少し多くの家で植えられているという予想を持っていたが、実際は13%にとどまる。過去にはもう少し多かったものが、シブ利用の減少などから伐採された可能性もあるが、いずれにしても過去に関する十分なデータは入手困難であり、これ以上の検討は難しい。

逆に予想よりも少なかったのがシュロである。シュロは目立つ木であり、現地踏査においても、比較的探すのが容易である。そのため、多いと感じたのであろうか。ただ、6%（16戸）という数値が他の集落と比較してどのように位置づけられるのかについては、他の集落調査の結果がないために判然とせず、その意味において、本数の多少に関する議論は、あくまでも現地踏査からの予想との差というものでしかない。

サンショウは25%、66戸が育てていた。これも他集落との比較が困難なため、25%というのがどのような意味を持つのかを論じることは難しい。しかし、執筆者の他地域における文化的景観調査経験に照らしてみたとき、4軒に1軒にサンショウがある、というのは、やはり少ない数字ではないと思われる。

イバモモについては、現地踏査では3本しか確認できなかったが、アンケートによれば、7軒の敷地内にいまだ残されていることが判明した。アンケートでは敷地内の本数も尋ねていたが、7軒のうち2軒は「3本」と回答を寄せており、総数では11本ということになる。ただ、いずれにしてもその数が少ないとことには変わりはない。

イバモモについては、どのような品種であるのか、植物学的な調査がなされたことはないという。また、果実の成分についても、他の食用モモとどのように違うのかといった点は未調査である。また、ヤニの発生メカニズムやその防止策といった点についても、他のモモの知識が応用されているにすぎず、イバモモに適したものであるかについての検討は

なされていない。「イバモモ」という地域名を冠して呼ばれてきた独特的の植物について、理解を深めていくことが保護と活用につながると思われる。

(4) 敷地利用からみた伊庭らしさ

内湖や伊庭川、そして水路を利用した交通網が主流であった時代、敷地ないしその周辺に設置されたカワトはあらゆる物資の移動に重要な拠点となっていた。敷地には、主屋のほか、屋敷畠や小屋がみられるが、日照条件のほか、カワトや道路との動線が意識される形で敷地内の配置がなされていた可能性が高い。屋敷畠や小屋は水田耕作等の生業に関連して利用される空間でもあり、搬出入のしやすい場所としてカワト近くに置かれることがあった。

その後、交通体系の変化によって水路やカワトの利用がなされなくなるにつれ、道路が意識される敷地内利用へと転換した敷地もある。そこには、農作業具や肥料の変化も関わる。

このように、敷地内の諸要素の配置からは、伊庭の生活・生業の歴史的変遷を理解することが可能である。

また、敷地の転換を知るうえで、また伊庭の生活・生業を知るうえで重要な景観構成要素になっているのが、カキ・シュロ・サンショウといった敷地内の樹木である。これらが生えている場所は敷地の履歴を考える重要な資料となる。また、内湖での漁や生活用品の製作に利用できる柿渋や棕櫚繩をとるために、淡水魚の臭み消しに利用されるサンショウをとるために栽培されていることから、伊庭地区の生活・生業の理解を深めるために重要な景観構成要素であると言える。

また、集落内にはイバモモという「伊庭」の名前が冠されたモモが植えられている。地域固有の樹木として重要であるとともに、カキとともに身近な果物として、伊庭集落の生活に密接に関わってきた。現在、本数が少なくなってきたが、伊庭の景観に不可欠な要素であり、保存・活用すべきである。

2 伊庭の民俗からみる文化的景観

(1) 伊庭祭りと景観

1) 伊庭祭り

伊庭祭りは滋賀県無形民俗文化財にも選択された伊庭のみならず能登川地区でも最も著名な祭礼であり、「伊庭の坂下し」の名で広く知られている。この名は、大きな3基の神輿を繖山の中腹にある繖峰三神社から急坂を引き下ろすことに由来するが、伊庭祭りは坂下しを含む多くの儀礼から構成される大規模な祭りで、近江を代表する郷祭りの1つである。本節ではこの伊庭祭りの中で象徴的に表出する様々な景観について述べることしたい。

2) 伊庭祭りの現在の組織

伊庭祭りは現在、伊庭と安楽寺の2集落によって行われているが、かつては北須田・能登川も加入していた。また大濱神社・望湖神社・繖峰三神社の三つの神社の春祭りであり、繖峰三神社には二ノ宮・三ノ宮・八王子の3社が祀られているため、祭りでは計5基の神輿が出される。

最初に伊庭祭りの組織について簡単に述べておきたい。各神社にはかつてそれぞれ氏子・宮座の組織があり、それは現在も伝承されているが、これらについては次節以降で述べることとし、ここでは現在の組織について述べることとする。

祭りの主役となるのは神の代行とされる正位童である。幼稚園年長から小学1年生までの男子を、伊庭から4名、安楽寺から1名選び正位童とする。安楽寺の正位童は八王子の神輿につくが、残り4社については12月20日前後の神役定のときに決める。神役定以降は、正位童をはじめ家族全員が、動物や鳥の肉、卵などを食べない精進潔斎の生活に入る。正位童は祭礼時に地面に足をつけてはいけないといわれ、父親に抱かれたり車で移動したりする。正位童を出す家は稚児宿やトウヤと呼ばれ、かつては大きな経済的負担を伴った。また太鼓叩きはかつて稚児宿で適当な年齢の子どもを探したが、現在では小学校6年生の男子5名を選び神輿につくかたちとなっている。前髪は若連中入りするまでの少年を指していたが、現在では小学校3年生から中学2年生までである。中学3年生から35歳までの男性からなる若連中は坂下しの実働部隊である。若連中は伊庭、安楽寺両地区にあり、伊庭では8つの町単位に組織されている。若連中の最高齢者から取締（トリシメ）が選ばれ指揮を執る。若連中をあがった36歳から45歳までの男性は中老と呼ばれ、若連中の補助をする。神社の運営全般に関わる氏子総代は伊庭から9名、安楽寺から2名、50歳前後の人の中から選挙で選ばれ、伊庭では得票の一番多い人が大濱神社、2番が望湖神社、3番が繖峰三神社の担当となる。また伊庭祭りの花形である神輿に関わる役を保

護役といい、46歳の男性から12名選ばれる。保護役は坂下しの道の整備や綱による神輿の保護などを担当する。

このように現在の伊庭祭りは伊庭と安楽寺の集落が全体として執行する形となっており、若い衆などは町単位に組織されている。全体としては年齢階梯的な組織が主体となっている。この年齢による組織の構成については平成になってからでも変化しており、これは、水野華織によって図33のように整理されている。

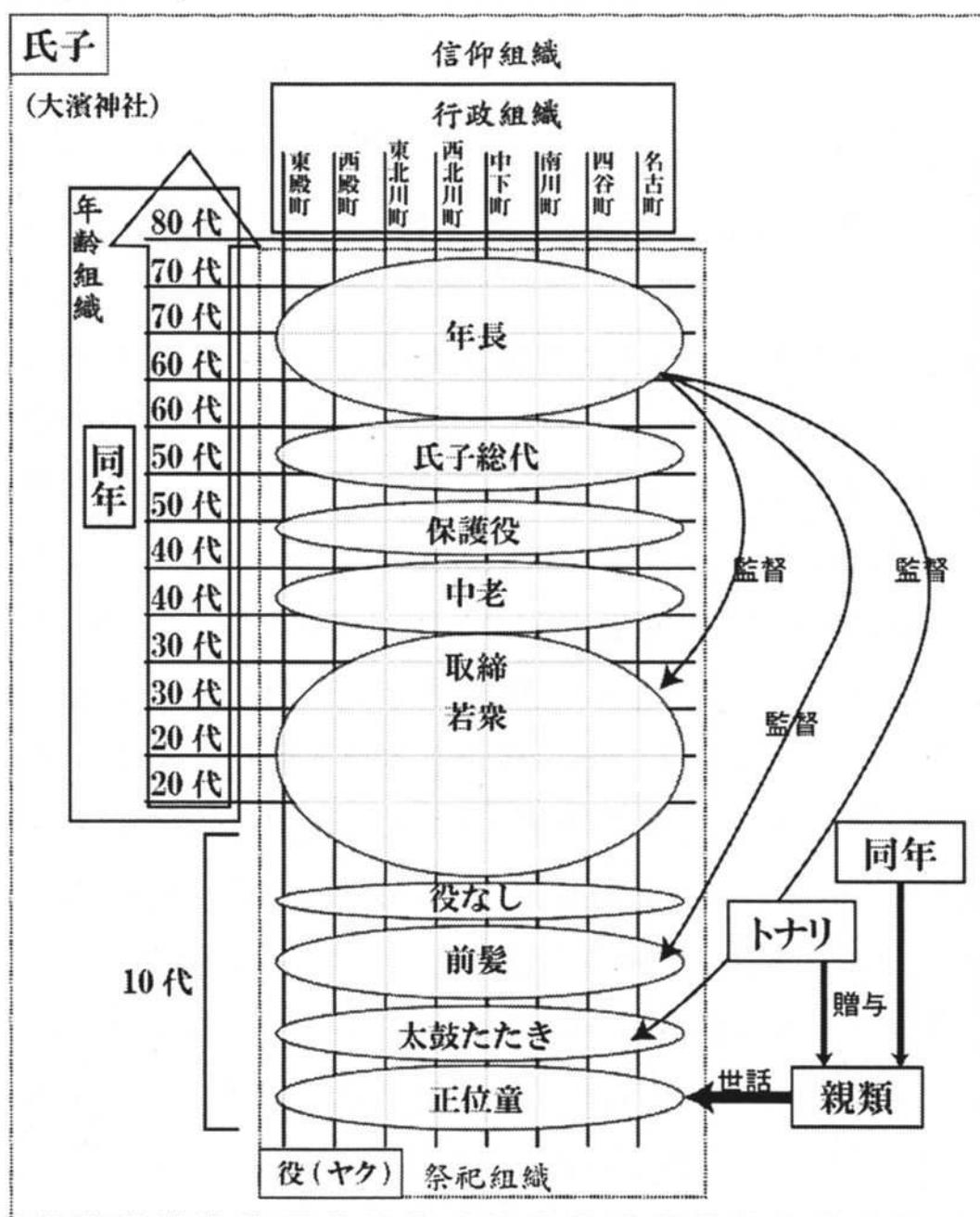


図33 伊庭祭り組織の構成

水野華織修士論文『『つきあい』をもととした伊庭ムラのつきあいネットワークの変遷に関する研究』所収図3-5

【5月3日の行事】

次に伊庭祭りの流れを時系列に沿って説明していきたい。前年度の12月に神役定が行われ、正位童などが定められる。4月後半の坂つくりは保護役が神輿の下りる道を掃除したり障害物を取り除いたりする作業である。同じ日の夜には大濱神社の社務所で区長や氏子総代・保護役などが集まり、神輿のくじ引きが行われる。伊庭は後述するように西殿・東殿・中下・南川・四ツ谷・東北川・西北川・名古の8つの町に分れており、これに安楽寺を加えた地区がどの神輿を担ぐかを決定する。

5月3日には「剣またぎ」と「御輿上げ」が行われる。剣またぎとは大濱神社境内にある仁王堂で行われる行事である。巫女が神樂を舞うが、その途中、氏子総代が里芋を巫女に渡しそれを手にもって舞う。巫女はそのあと洗米を正位童の前にまく。それが終わると巫女は氏子総代から脇差を渡され、それを注連縄の下から上に3回くぐらせてから氏子総代に返す。氏子総代が床の上に固定した刀を正位童がまたいで往復する。この動作を5名の正位童がそれぞれ行う。そのあと神事が行われ、参加者による直会が行われる。

御輿上げは繖山の中腹にある繖峰三神社に3基の神輿を上げる行事である。朝8時頃から二ノ宮・八王子・三ノ宮の順で神輿を山の上にあげる。道中は急な坂で大きな岩も随所にあるが、綱を引きながら神輿をあげていく。途中二本松という崖の下まで来ると周辺に生えている花を神輿の屋根にくくりつける。二本松にはかつてその名のとおり2本の松が植わっていたが、現在ではステンレス製の支柱に替わっている。保護役はその間に注連縄を張り御幣をつける。3基の神輿が境内に着くと神事があり、玉串奉奠が行われた後、直会になる。神事などの間正位童は本殿の縁側にいるが、直会のときには氏子総代などに抱きかかえられて拝殿前まで移動する。直会が終わると翌日の準備をする保護役を残して一同は下山する。

【5月4日の行事】

翌5月4日の朝9時過ぎから伊庭集落の中央にある謹節館に参加者が集まる。建物の中では若連中、中老が町ごとに集まって酒を酌み交わす。やがて区長、社務主任、保護総務が若連中、中老らに挨拶をする。祭りのときには謹節館の隣にある区事務所が仮社務所になるが、10時にその座敷で楽人の奏でる合囃で出立の神事が行われる。神事が終了すると、氏子総代、年長、太鼓、正位童らは外に出て行列を調える。行列は社務主任、伊庭区長（2名）、安楽寺区長、年長、楽人、神職、巫女、舞姫の順で、それに正位童の行列が続く。これは氏子総代、太鼓叩き、太鼓叩きの父親、正位童の父親、正位童の順である。正位童は専用の稚児車に乗り、親戚や区の評議員などがそれを曳く。正位童は5人いるのでこの隊列は5つ続くこととなる。行列が大濱神社の西隣の広場である芝原の御旅所にさしかかると、行列の先頭の一団と大濱神社・二ノ宮・八王子の正位童の一団は御旅所に入り、三ノ宮・望湖神社の一団はそのまま行列を続ける。大濱神社では本殿から神輿に神遷り、

しが行われ、それが終わると神輿を加えた行列が出発する。伊庭祭りでは供物としてヨシの葉にまかれたチマキが作られるが、神遷しが終わったときに氏子総代が拝殿から細かく切ったチマキをまき、これを合団に神輿が出発する。望湖神社でも同様に神遷しがあり、望湖神社前で大濱神社から来た一行と合流し、坂の下の遥拝所へと向かう。ここに大濱神社・望湖神社の神輿はひとまず安置され、一同は山を登っていく。

中腹の繖峰三神社に一行が到着すると、神主による神事があり、八王子・二ノ宮・三ノ宮への神遷しが行われる。その後ここでもチマキまきがある。正午からいよいよ坂下しがはじまる。まず三ノ宮が出発し、八王子・二ノ宮の神輿がそれに続く。急な斜面が連続するため、神輿はゆっくりと前に進む。特に二本松は最大の難所であり神輿はほぼ垂直の斜面を下される。その年に若連中に加入した青年は「初山」と呼ばれるが、初山はこの二本松では神輿の上に乗ることとなっている。神輿が麓に到着するには3時間以上の時間を要する。その頃になると麓は見物客でいっぱいである。下りてきた神輿は遥拝所の所定の台に置かれ、保護のために巻かれていた綱をはずし、担ぎの横棒や飾り金具などを付けられる。5時30分頃再び行列が出発し大濱神社横の芝原御旅所へと向かう。御旅所に着いた神輿はそれぞれ仁王堂内に置かれ、その前には饗が出され御供上げの準備が進められる。

饗とは桶に藁を巻き上部に蛇腹という藁束をつけ、その上に炊いた米を載せた供物である。饗には「飾り饗」と「競り饗」があり、飾り饗3つは大濱神社・八王子・望湖神社の神輿の前に置かれる。上部の飾り方が異なった競り饗の2つは二ノ宮、三ノ宮の前に置かれる。後述するように各家がどの神社の氏子であるのかは定まっており、2つの饗の周りにはそれぞれ二ノ宮・三ノ宮の氏子が集まる。この2つの競り饗をどちらが早く仁王堂の中に上げるかを競うのが競饗で、違いに相手の饗を邪魔しながら自らの饗を堂の中に上げようとする。勝った饗は八王子と並んで中央に配置され、負けた方は三ノ宮の前に供えられる。この行事は御供上げと呼ばれている。

引き続き、御着きの儀と宵宮祭が催行される。大濱神社・望湖神社の神主がそれぞれの神輿の前で祝詞を奏上し、楽人の奏楽と巫女の神楽も行われる。次いで夜に入ってから行われるのが五社参りである。正位童と太鼓叩きはそれぞれの神輿の前に着座し、その前で舞姫や巫女が神楽を舞う。地区の人々も参拝に訪れる。これが終わると大濱神社社務所と老人憩いの家で若連中の宵宮渡りが行われる。

【5月5日の行事】

朝10時半から仁王堂前で献湯祭が行われる。神輿の前には正位童が着座し、堂の前に5つの釜が置かれ、湯が涌かされる。巫女は中央から順に5つの釜の前で湯立神楽を舞う。

12時半頃からは卯の時祭の準備がはじまる。卯の時祭は神輿が集落内をまわる儀式で、その準備のため5基の神輿に担ぎの横棒が取り付けられる。午後1時に神主による祝詞奏上、舞姫の神楽などが行われると、望湖神社・三ノ宮・八王子・二ノ宮・大濱神社の順で一行は郷頭野の御旅所に向けて出発する。郷頭野は伊庭内湖に面した広場で、かつては集落の中の水路に舟を浮かべ神輿を乗せて郷頭野まで運んだという。郷頭野に到着すると神輿を置きその前で舞姫が神楽を舞い、神主が祝詞を奏上する。一連の神事が終わると一行はまた芝原の御旅所へと出発する。その途中、神輿を担ぐ若連中は、正位童の家に行って酒や肴をいただく。これを「庭祝い」と呼んでいる。芝原の御旅所には大濱神社・二ノ宮・八王子・三ノ宮・望湖神社の順に到着し、仁王堂前に神輿が置かれる。ここまでが卯の時祭で以前は別の日に行われていた。

仁王堂前でも祝詞奏上と舞姫の神楽が行われたのち、一行は安楽寺にある神の座の御旅所へと向かう。この渡御を本祭渡御と呼んでいる。神の座は安楽寺集落の山側にある広場で、隣接して安楽寺で祀っている六社神社や愛宕神社がある。所定の場所に神輿や正位童の稚児車を置き、神主による祝詞奏上、楽人の奏楽、舞姫の神楽が行われる。そののち少し休憩をおいて神遷しが行われる。神靈は剣先に遷され、儀礼の終了後各神社の氏子総代は、繖峰三神社、望湖神社、大濱神社へと向かう。また神輿や正位童などは望湖神社、芝原の御旅所へと向かう。望湖神社では正位童が幣殿に上がり神事が行われる。その後正位童らは芝原の御旅所に至り境内にある遙拝所の前に氏子総代とともに並び、神主が祝詞奏上を行う。若連中らが台車に乗せて運ぶ神輿も續々と御旅所に着き、仁王堂の前に並べられる。

伊庭祭りの主要な行事は以上であるが、本当の意味での伊庭祭りは午祭りまで続く。午祭りの日はもともと6月3日であったが現在ではそれに近い日曜日に行われている。これは5社の神靈を剣先に遷し、それらを安楽寺の神の座へと運びその前で神事を行うものである。5社の剣先には柳のほかに、大幣・鏡・ショウブ・ヨモギが付けられる。かつてはこの日まで正位童とその家人の精進が続けられたという。



図34 伊庭祭りの巡行路 黄線:3日のルート 赤:4日のルート 青:5日のルート

3) 伊庭祭りの変化

以上は現在の伊庭祭りの姿であるが、伊庭祭りは歴史の中で大きく変化を遂げてきていている。『伊庭の坂下し祭』などを参照しながら、変化の大きな点について簡単に述べておきたい。

まず祭祀組織であるが、先にも述べたように伊庭祭りはもともと伊庭・安楽寺のほか、北須田・能登川が参加していたが、北須田・能登川は昭和に入ってから脱退しており、それが後に述べる巡幸のコースなどにも大きな影響を与えている。また祭祀組織としてはかつて森村座・浜村座・中村座・新村座の4つの祭祀組織が存在していたが、明治23年(1890)に改正があり、これらの組織から選挙によって役員を選んで祭りを行う形に変化している(「明治三十二年神事規約編成理由書」『伊庭の坂下し祭』所収)。森村座は望湖神社・浜村座は大濱神社、中村座は二ノ宮、新村座は三ノ宮に所属する組織であり、中村座などは伊庭よりも能登川・北須田の家が多かったという。現在ではこれらの座については地元ではほとんど伝承されていないが、饗競べなどのときの氏子などはその名残といえる。これらの座については史料が少なく、全体像は把握しがたいが、ともに座のメンバーを時代幅をもって記載した「元治二年新村右座人別帳」(伊庭町共有文書)と「明治十一年森村右座帳」(大濱神社文書)によると、森村、新村とともに左右の2座があり、森村右座は約60戸、新村右座は62戸あったことがわかる。明治18年(1879)の戸数は能登川村が234戸、北須田村92戸、安楽寺を含む伊庭村が517戸で合計843戸であり、これらの座の戸数から考えると全体の約半数ほどの家がいずれかの座に所属していたと考えられる。

また日程について、かつて干支の卯の日から酉の日まで7日間をかけて祭りが行われて

いたのを現在では3日に短縮する形で行われているのも大きな変化である。ことに神輿を郷頭野の御旅所に移動させる卯の時祭は坂下しよりも4日後に行われ、そのあとで本祭還御が行われていたが、現在では両方とも坂下しの翌日の行事となっている。

また巡幸のコースも大きく変化している。かつて北須田・能登川が分離する前に北須田のイヌボウという場所にも御旅所があり、また能登川の愛宕神社前の広場でも神事があつたが分離後はなくなっている。また卯の時祭の時には伊庭の集落内から舟を使って神輿を運び、伊庭内湖の湖上も神輿が巡行したが、これも現在では陸上を担いで渡御している。郷頭野の御旅所の位置も内湖の埋め立てや道路の敷設の結果移動している。

4)郷祭りの歴史性

伊庭祭りは多くの儀礼によって構成される、非常に複雑な祭りであり、時代的にも幾度も変遷しており、その祭りとしての全体的な意味を読み解くことは困難である。『伊庭の坂下し祭』には「古来よりこの社（繖峰三神社）は、比叡山坂本の日吉大社の神と同体で、その坂下し神事も、日吉の坂下しを写したものと言われて来た」と述べられており、現在でも地元ではそのような伝承を聞くことができる。坂本の日吉大社の背後には牛尾山（八王子山）という神体山があり、4月の祭りのときにはその山から神輿を担ぎ下ろす神事が行われている。さらに琵琶湖にも舟に神輿を乗せて巡行し、湖上で粟津の御供という神事がある。山から神をおろし、麓の里を巡幸し、湖をめぐることで、神が守護する領域を祝祭してまわる儀礼であるといえる。現在、繖峰三神社に祀られている二ノ宮・八王子・三ノ宮はいずれも日吉大社に含まれる神々である。中世にこの地に存在した伊庭庄は六勝寺の1つである成勝寺や九条家の荘園であり、伊庭の地と日吉大社あるいは延暦寺との関係は必ずしも明らかではないが、その祭りの空間構成から考えても伊庭祭りと日吉大社の山王祭が深い関係にあることは間違いない。かつて伊庭祭りを行っていた4村はいずれも近世の伊庭村のうちであり、その範囲が中世の伊庭庄にほぼ一致すると考えられる。そこに日吉大社から神々を勧請した際に、日吉の祭式を導入したものと思われる。

5)伊庭祭りの空間構成

延暦寺の荘園などに日吉大社を勧請したときに、その祭式も導入することはほかにも多くの事例がある。しかしながら勧請された神社やそれが鎮座する村落の立地環境は必ずしも一様ではなく、祭式はその土地の環境に適合した形で定着してゆくこととなる。伊庭祭りはここにこの土地の自然環境とその利用形態が色濃く反映された祭りである。繖峰三神社が立地する繖山は現在も寺社地などのほかは伊庭・安楽寺・北須田・能登川などの共有山やそれらの集落が使用権をもつ国有林になっており、かつては山が少ない伊庭周辺の村々にとって貴重な燃料・肥料などの供給地となっていた。これらの村落はかつて伊庭祭りに参加していた村落であった。また伊庭川から引いた用水路である伊庭井もこれらの村

によって利用されていた。かつて伊庭祭りに参加した村々は、山や水といった資源を共同利用する村々でもあった。伊庭祭りはこの山から神輿を引き下ろし、集落を通って内湖にある御旅所へ巡幸することを基本とする。かつては集落内を流れる水路に舟を浮かべ、この内湖にまで神輿を運んだという。内湖では漁業はもとよりそれに接した水田ではその水をかきあげて利用することが行われており、内湖は伊庭周辺の人々にとって山や水田同様に重要な生業の場であった。伊庭祭りはヤマ・ムラ・ウミを神々がめぐる儀礼であり、農耕が開始される直前に山から神をおろし、生活や生産の舞台を神がめぐることによって一年の収穫を祈願する祭りであったといえるだろう。

6) 伊庭祭りにみられる景観構成要素

日常の生活ではそれほど意識されなくても、祭りに際してその存在が顕在化する景観構成要素がある。祭りには先述のように日常的な生活を象徴する機能があり、伊庭の文化的景観の構成を考えるときにも代表的な祭礼である伊庭祭りに際して時限的に表象される空間構成要素についても注目しておく必要がある。

現在の伊庭祭りでは、大濱神社・望湖神社・繖峰三神社などの神社が主たる舞台となる。このほかにも数か所の御旅所や出発点となる謹節館、巡回ルートとなる伊庭山の山中や集落内なども重要な景観構成要素である。以下、これらのうち特筆すべき場所の祭礼時の様相について簡単に触れることとしたい。

7) 大濱神社と芝原御旅所

大濱神社はいうまでもなく伊庭住民にとって重要な神社であるが、伊庭祭りに際してはそれに西接する仁王堂並びに芝原の御旅所が重要な機能を果たす。仁王堂は鎌倉時代に建設された、3面に壁をもたない柱だけの建物であるが、北面のみに壁があり、それを利用して5基の神輿が納められ、いわば神輿庫の機能を果たしている。また天井部分には絵馬や奉納額が多数かけられており絵馬堂としての性格もあるが、額の大半は同年という男性の同齡組織によって奉納されたものである。

仁王堂は祭り以外では参拝の対象になるわけではないが、伊庭祭りでは仁王堂に祭りの役付表が貼られるほか、5月3日の剣またぎの場ともなる。5月4日には坂下しのあと仁王堂前に神輿が並べられ、夕方には飾り饗が神輿の前に供えられ、また競り饗も仁王堂に先に入れることを競うなど祭りの象徴的な役割を果たす。この日の夜には五社参りの神事並びに参拝も、仁王堂に並べられた神輿を対象として行われる。

また仁王堂前の広場は、芝原の御旅所と呼ばれるが、ここも日常的にはほとんど利用されない場所である。祭りに際しては芝原の御旅所から50mほど西の栄橋の東詰に提灯が立てられ、橋を渡れば聖なる空間であることを表示している。御旅所の広場には砂で小さな山が作られ、4日の坂下しのあとにはそれを目印にして神輿が置かれる。そのあとで行

われる競り饗では、御旅所の広場は若い衆の激しい競争の場となり、その周辺は多くの見物客であふれかえる。また5日の朝にはこの広場で湯立て神楽が行われる。これらは年に一度祭りのときにだけ現出する祝祭的な景観である。

この芝原の仁王堂、御旅所の歴史については多くを知ることができない。仁王堂がなぜそのように呼ばれるのか、元来から神輿庫としての機能を持っていたのか、などは今後の研究をまたなければならない。また芝原の御旅所についても、現在の景観は御旅所というよりも大濱神社の境内というべきであるのに、なぜ御旅所と呼ばれるのかなどは明確にしがたい。ただ今回の調査の一環として実施した大濱神社境内の石造物調査によって、この空間の性格の一端が明らかとなったので紹介しておきたい。表19・図31は大濱神社周辺の石造物の分布とその内容を年代順に示したものである。図35によると大濱神社の石造物のうち近世中期以前に遡るものはほぼ本殿周辺に限定され、段階的に外周部へと広がっていることがわかる。ことに芝原の御旅所周辺については、明治・大正期のものが中心であり、近世のものとしては天保11年(1840)の一対の石灯籠(1・3)を見るだけである。この石灯籠の竿部分には「五社」と刻まれており、大濱神社というよりも伊庭祭りの5基の神輿を対象化したものであり、芝原の御旅所のために設けられたものと考えられる。石造物の中で注目すべきものに「神庭整理」と記された一対の石柱がある。これはともに大正7年(1918)1月に建立されたもので、広場の両端に建てられている。この年に御旅所広場は大濱神社の境内に繰り入れられたと考えられる。昭和14年に建立された大濱神社宮司山脇右一氏の顕彰碑(39)にも、長年宮司を務めた同氏が「神域ヲ拡張」したことが記されている。これらのことから、芝原の御旅所はもともと大濱神社の境内ではなく、それに隣接はするものの別に区画された空間であったことが想像できる。仁王堂についても同様の性格を持っていた可能性がある。

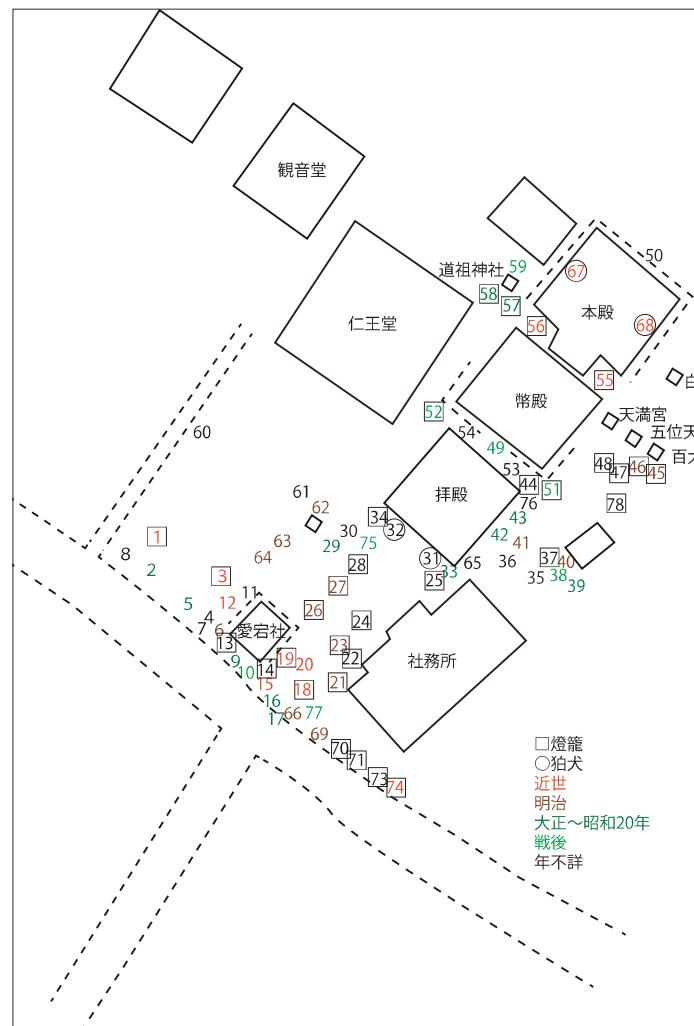


図35 大濱神社境内の石造物の分布

表19 大濱神社境内の石造物

番号	種別	年代	刻字
67	狛犬	寛文3年正月	(正面・脚)于時寛文三年正月吉日 (裏・脚)奉奇進小馬犬取願成就之所 / (裏・胴)江州神崎郡伊庭庄村田太兵衛尉敬白
68	狛犬	寛文3年正月	(正面・脚)奉奇進小馬犬取願成就之所 (正面・胴)江州神崎郡伊庭庄村田太兵衛尉敬白 (裏・脚)于時寛文三年正月吉日
55	石灯籠	寛文12年8月	(正面)八月吉祥日/牛頭天王/寛文十二 壬子 年
12	手水石	享保4年11月	(正面)御賽前/享保四刻曆/十一月吉/塚本氏/源光
74	石灯籠	天保3年1月	(正面)大神宮 (裏)天保三壬辰年正月 (基礎・裏)産子中
1	石灯籠	天保11年9月	(正面)五社/常夜燈 (右)天保十一庚子年九月 (左)祈宿/石見
3	石灯籠	天保11年9月	(正面)五社/常夜燈 (右)祈宿/石見 (左)天保十一年庚子年九月
18	石灯籠	文久2年5月	(正面)永代/常夜燈 (右)于時文久二壬戌年/五月吉日 (左)祈主 山脇丹後 (裏)願主/中村孫十郎・片山嘉兵衛
19	石灯籠	文久2年5月	(正面)永代/常夜燈 (右)祈主 山脇丹後 (左)于時文久二壬戌年/五月吉日 (裏)願主/中村孫十郎・片山嘉兵衛
20	鳥居	元治元年3月	(右脚部裏)願主/國領氏 (左脚部裏)元治元甲子年三月吉日
45	石灯籠	明治17年4月	(正面)御神燈 (右)百代講 (裏)明治十七年四月吉日建之
46	石灯籠	明治17年4月	(正面)御神燈 (右)百代講 (裏)明治十七年四月吉日建之
41	辞世歌碑	明治33年8月	(正面)辞世/なき阿(あ)とのわ可(か)真(ま)こゝ路(ろ)越(を)人とハヽ/春(す)へら久(く)ぬちの魂とこたへよ/山脇丹波正藤原清次/明治三十二年八月建之/発起者 織西音楽会
63	遥拝所碑	明治34年	(正面)遥拝所 (裏)明治三十四年/丑歳生同人
21	石灯籠	明治36年5月	(正面)献燈 (右)社掌山脇右一 (左)献主/奥村氏・村田氏・川原崎氏・谷野氏 (裏)明治三拾六年卯五月建之/文久二戌生四十二才記念
27	石灯籠	明治36年5月	(正面)献燈 (右)献主/岡田氏・川原氏・徳永氏・村田氏 (左)社掌山脇右一 (裏)明治三拾六年卯五月建之/文久二生中四十二才記
69	方位標	明治37年11月	(正面)西/*郷守護之神祠 (右)南 ※(大半が読めず「村」「警」のみ) (左)北※(文字があるが読めず) (裏) 東 明治三十七年仲冬日建之
26	石灯籠	明治38年3月	(正面)献燈 (裏)明治三十八年/岡田氏
66	社号標	明治38年10月16日	(正面)大濱神社 (裏)明治三十八年十月十六日/滋賀縣知事正五位勲四等 鈴木定直 (基礎・裏)社掌 山脇右一/同齡会寄附姓名/居原田岩吉・川原崎亀五郎・橋村幸一郎・以下略・人名合計36名)
6	定書建屋	明治39年10月	(札・正面)定/一車馬ヲ乗入ル事/一魚鳥ヲ捕ル事/一竹木ヲ伐ル事/右條々於境内令禁止者也/明治三十九年十月 (札・裏面)奉納/定書建屋改築/午羊会/昭和二十九・三十年生/上田清司・山本芳治・奥村達之・河村春男・浮気清司・中村博・宮川欣也・奥村清・徳永敏行・奥村昭彦・大西政一・大西恵三・田中源太郎・河原崎泰孝・沖茂和・山本常隆・桂田康弘/平成六年三月吉日 (染石裏面)明治三十九年丙午年四十二歳連中・社掌山脇右一
23	石灯籠	明治40年1月	(正面)献燈 (裏)明治四十年一月/村田源兵衛
40	戦利兵器奉納碑	明治40年3月	(正面・銘文)戦利兵器奉納ノ記/是レ明治三十七八年役戦利/品ノ一一シテ我力勇武ナル/軍人ノ熱血ヲ濶キ大捷ヲ得/タル記念物ナリ茲ニ謹テ之ヲ献シ以テ奉賽ノ徵*ヲ表シ尚/皇*ノ隆冒ト国勢ノ發揚徒/テ祈ル/明治四十年三月/陸軍大臣寺内正毅 (裏)社掌山脇右一/大正三年十二月刻之/保護總裁 田中糸蔵/保護長/天 田辺常吉・二 川原崎平吉・八 片山駒吉・三 川原崎口口・大 中村忠治郎
62	石灯籠	明治43年	(正面)献燈 (裏)明治四十三年/四十二歳連中
57	石灯籠	大正3年2月	(正面)御即位紀念/大正三年二月建設/二王堂在地
58	石灯籠	大正3年2月	(正面)御即位紀念/大正三年二月建設/二王堂在地

番号	種別	年代	刻字
16	橋柱	大正4年	(左後裏面)奉納 大正四年 (右後裏面)明治七甲戌年生同齡者
64	時計台	大正4年	(正面)奉獻 (裏)大正四乙卯年/還暦紀念/橋村万治郎
5	幟立	大正5年4月	(正面)奉獻 (右)大正五年五月建之 (左)明治八年亥年同齡者/社掌山脇右一 (裏)宮竹長徳・村田平治郎・辻平治郎・山□□□ (他にも人名あり)
2	石柱	大正7年1月	(正面)奉神庭整理 (右)大正七年壹月献之 (裏)明治廿七年同齡者/春秋会
17	石柱	大正7年1月	(正面)奉神庭整理 (左)大正七年壹月献之 (裏)明治廿七年同齡者/春秋会
15	掲示板	大正8年7月12日	(右脚部右側)奉納大正八年七月十二日/彦根/川原崎龜蔵/四十一歳 (左脚部左側)社掌山脇右一・石工中村与吉
33	石灯籠	昭和10年3月	(正面)奉燈 (裏)昭和十年三月為初老記念献之/川原崎忠三・実村徳松・村田豊治郎・徳永太八/片山卯太郎・村田佐太郎・福井捨吉・川原崎浅吉・今堀卯吉
9	鳥居	昭和12年4月	(右裏面)昭和十二年四月/為初老記念献之 (左裏面)願主明治三十年丁酉年生栄西会
29	提灯立	昭和14年	(正面)庭燎 (裏)奉納/昭和十四年家族百歳紀念/村田氏
39	顕彰碑 (胸像銘)	昭和14年3月	(正面)山脇右一翁略傳/官幣代謝多賀神社宮司從五位大和田貞英撰/翁ハ丹後守清次大人ノ三男ニシテ慶応三年十月十日生ル明治十九年家名ヲ嗣キ大演望湖両神社神/職ヲ拝命ス爾後勤続五十有餘年現ニ其名誉神職タリ此間至誠神明ニ奉仕シ或ハ神域ヲ拡張シ或ハ設備ヲ改善シ以テ神威ノ昂揚ト神徳ノ發揮トヨ計ラレ功績顯著タリ昭和十年三月縣神職會為ニ銀盃ヲ贈リ其篤行ヲ表彰セラル加之翁ハ育英ノ任ヲ兼ネ子弟ヲ薰陶スルニ十七年敬々トシテ倦マズ旁ラ日/本赤十字社在郷軍人会武友会等二閥与シ各功アリ翁亦雅樂ノ造詣深ク夙ニ繖西音楽会ヲ組織シテ自ラ其會長トナリ熱誠後身ヲ指導スルコト實ニ五十一年餘ナリト云う可シ這日其子弟等翁力高徳ヲ景仰シ壽像ヲ建設シテ亀齡鶴壽ヲ祝祷シ聊力報恩ノ徵意ヲ表スト云爾/縣社乎加神社々司佐野藤原秀知書 (裏)昭和十四年三月建設/発起 繖西音楽会/賛□伊庭武友会
42	寄進碑	昭和17年3月	(正面)奉納/大東亜戦争国債 明治三十五年同生/金壹阡圓也 晩会 (裏)厄除/記念/昭和十七年三月
43	寄進碑	昭和20年1月	(正面)大演神社御神田永楽会 (裏)奉納/昭和二十年一月建之/初老記念/明治三十八年生/村田壯八・沖庄一・奥村安吉・中村稔三・大西謙一・浮氣直一・備前幹一・徳永清一・宮井源九郎・奥村吉治郎・田邊半三郎
38	古神札納所	昭和29年4月	(正面)奉獻 (裏面・銘板)厄除紀念/大正三年甲寅年生/西川實・徳永健一・岡地栄治郎・奥村芳三・川原崎建三・川原崎房治郎・片山信道・吉田寅蔵・田中寅三・中村基三・村田義蔵・松村正治郎・青木正男・三上米蔵・宮川啓之助/奉納 昭和二十九年四月吉日
75	神馬青銅像 (由来銘文碑)	昭和45年7月	(銘文)青銅神馬の碑 由来誌/この神馬の由来は昭和三年に厄除献納者二十七名/が発起し献納せるものである然るに昭和十九年軍需/用として供出せられ今日に至ったが茲に栄親会/に依って旧台座に再建を企画し復元することを得/本日除幕式を挙行し後毎に残さんとするものである/昭和四十五年七月吉日/厄除献納者栄親会(イロハ順)/将井和男・西川孝雄・徳永多喜男・徳永清和・大西敏雄・大前欽市・川原崎千代弘・川原崎忠雄・吉田耕二・高田日出男・辻俊夫・中村与四雄・中村政男・中村新三・村田松治郎・村田信三・村田末造・浮氣源一・上田清一・山脇□・福井芳松・j小西昭三/鑄造 京都市村田孫太郎
2	堂名標	昭和55年4月	(正面)智恵の文殊堂 (右)授与/家庭和楽の知恵・家業繁栄の智恵・学業進歩の智恵 (左)授与/進学合格の智恵・職場活動の智恵・健康長寿の智恵
52	石灯籠	昭和56年正月	(正面)献燈 (基礎・裏)昭和十六年生/巳智生会・河原崎藤一・中村公武・片山智成・奥村吉一・田辺武男・長谷川肇・村田幸男・河原崎嘉三・奥村政和・浮気正男/昭和五十六年正月吉日

番号	種別	年代	刻字
51	石灯籠	昭和56年3月	(正面) 献燈(基礎・裏)昭和十六年生/巳智生会・奥村吉朗・奥村耕司・原田國親・川原崎彦太郎・河原崎伍一・奥村康男・山路敬英・平野喜一郎・山本正行・今堀誠二/昭和五十六年三月吉日
77	洪水碑	平成9年8月	(正面)浸水位/明治二十九年大洪水碑 (裏) 平成九年八月建之
59	玉垣	平成10年4月	(大・正面)仁王堂在地/平成十年四月吉日 (少・正面)村田真一・中村金壽・中村良夫・中村富男・奥村重義・西川忠夫・川原崎善一・辻康男・村田芳雄・村田克美・西川清治郎・中村三蔵・奥村洋史・辻貴弘・西川誠一・中村徹・中村益崇・中村光伸・村田武次・中村英治・村田恒治郎・中村公哉・西川政次郎・井上定夫・西川政一・西川寛・辻吉弘・奥村耕司・中村三一郎・徳永美代子
49	玉垣	平成22年3月	(左)祥風会・祥風会・奥村和範・中嶋康博・奥村博之・橋村昌純・奥村彰恒・徳永光武・川原崎徹・村田真・山路哲司・夏井啓吾・村田崇・平成二十二年三月吉日
10	社標石	平成25年8月	(正面)愛宕神社 (右)平成二十五年八月吉日 (裏面)昭和二十八年生/奉納還暦記念/河原崎正枝・山路敏江・川原崎順子・田村久義/田中和子・池一夫・西川しづえ・中村三蔵/奥村栄子・徳永佐代子・山田明男・橋村孝一郎/吉田勇義・村田源一
4	提灯立		(正面)庭燎 (左)奉納/村田氏
7	石柱		
8	道標		(正面)觀世音参道
11	玉垣		(正面)奉納
13	石灯籠		
14	石灯籠		
22	石灯籠		(正面)献燈 (裏)明治三十八年生中村氏
24	石灯籠		(正面)献燈 (左)中村□□・川村□藏・田村□□・山本□□ (裏)□□□治□・□□与一郎・中村□□・□村□□・□□□□
25	石灯籠		(正面)献燈 (右)中村彦□・片山岩□・中居平□・沖□十郎・村田兵□ (左)宮川与惣□・片山辰治郎・中村龜治郎・片山□□・中村辰治郎 (裏)明治辰元年生/山脇右一
28	石灯籠		(正面)献燈 (裏)伊庭村/村田源兵衛
30	手水石(舍)		(正面)奉獻
31	狛犬		(台石正面)奉獻 (台石裏)明治十一同年者/□□□吉・田辺□□・□□□□ (台石左)※人名記載の可能性があるが読めず
32	狛犬		(台石正面)奉獻 (台石右)※未調査 (台石裏)※未調査
34	石灯籠		(正面)奉燈 (裏)願主/明治二十八年乙未同年者/浮氣万治郎・山本達藏・川原崎弥三郎・片山□□/中村英一・山本末吉・山路茂太郎・中村弥之助
35	石柱		
36	石柱		
37	石灯籠		(裏)還暦紀念 村田氏
44	石灯籠		
47	石灯籠		(正面)御神燈
48	石灯籠		(正面)御神燈
50	玉垣		
53	狛犬		(上の台石裏)文久四甲子正月吉日(下の台石裏)于時文久二年戌年/奉寄進之
54	狛犬		(上の台石裏)家印・寄進/中村氏(下の台石裏)寄進彦根中村氏

番号	種別	年代	刻字
56	石灯籠		
60	境界石		(正面) 大饗
61	境界石		(正面) 渡米
65	由緒書碑		(正面) 当祠は素戔鳴命を祀る／輿地志に所謂伊庭御/八郷の産土神たり鎌倉時/代佐々木の族伊庭頼/高伊庭城を築くに方り/地主神として氏の社に/推し代々尊崇仕られ織/田氏の安土城よりは鬼/門の守護神として奉斎/せられたり徳川時代に/至り三枝土佐守領主となるや代官所を此の地に置き年々恒例の幣帛/を献し篤く祭祀を修められた (裏) 中村昌平・同直三郎・塚本源治郎・大西万五郎・河原崎市吾・福井七蔵・備前勘治・中村万三・同善治郎・川崎庄治郎
70	石灯籠		(正面) 献燈 (裏) 中村 (他にも名前あるが読めず)
71	石灯籠		(正面) 献燈 (裏) 初老紀念 (基礎・裏) 山脇右一
73	石灯籠		(正面) 献燈 (裏) 川原崎卯口・山路卯口・中村口三/中村口口二・浮気久治郎
76	電灯柱		(正面) 奉納永代常夜電燈
78	石灯籠 (竿部分のみ)		(正面) 記念



写真55 仁王堂の前に置かれた饗と神輿



写真56 芝原の御旅所での競り饗

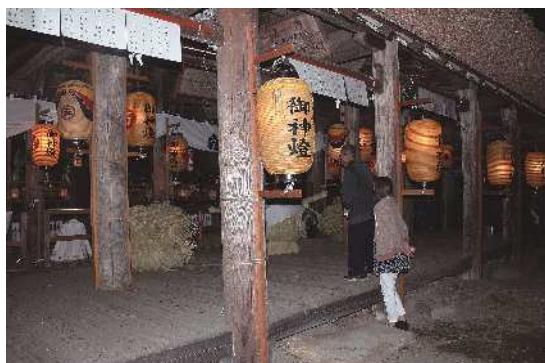


写真57 仁王堂での五社参り



写真58 神庭整理の碑(大正7年)

8) 繖峰三神社と坂下し

繖峰三神社は繖山の中腹、標高約 261 m の場所に鎮座する。標高だけみればそれほど高くないが直線距離で約 350 m 離れた麓の標高が約 90 m であり、そこに行くには直線勾配が 4.9% という大変な急坂を登らねばならない。経路の長さも 471 m であり、こちらの勾配も 36% となる。しかも坂下しのルートには僧衣の岩・吹上岩・屏風岩・台懸岩などの巨岩が続き、特に下りに際してはその巨岩から落とすように神輿を下していく。ことに二本松という長い一枚岩は一番の難所で、かつてはその名のとおり 2 本の松が立ちその間に注連縄をしていたが、現在ではステンレス製の柱の間に注連縄が張られている。この場所では神輿の上にその年に若い衆入りをした初山の男子 2 人を乗せて下すこととなっており、ある種の通過儀礼の場所でもある。繖峰三神社とそこに至るルートも普段は参拝者がほとんど行かない場所であるが、祭りの当日には二本松周辺には多くの見物人が集まり、スリリングな坂下しの風景を楽しむ場となっている。

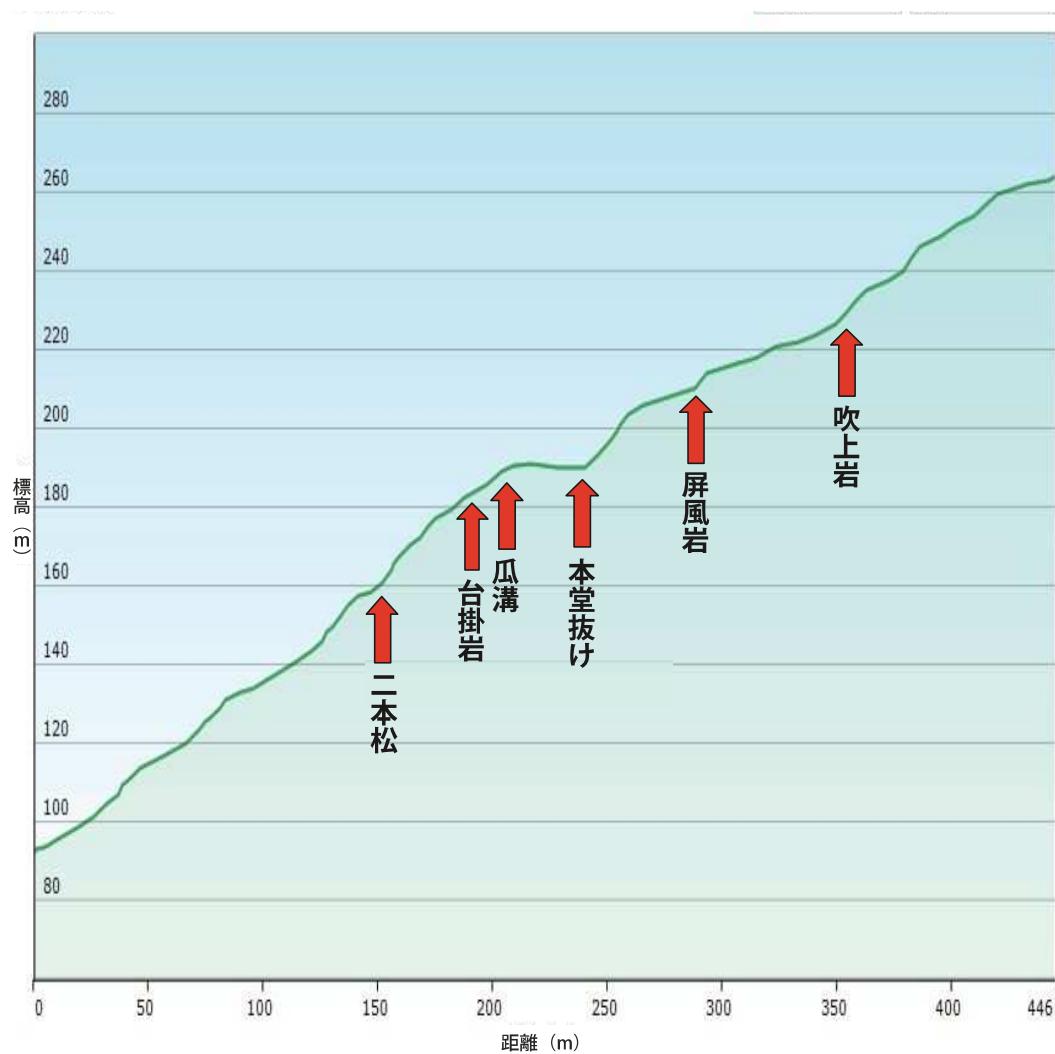


図36 坂下し経路断面図



写真59 繖峰三神社に置かれた神輿



写真60 台懸



写真61 二本松



写真62 坂の下の賑わい

9)坂の下の遙拝所

坂の下の遙拝所は繖峰三神社への上り口の道路よりも山側に所在する。全体の長さは4段、あるいは3段に大きな石段が組まれ、その一番上の段に遙拝所となる空間と拝殿の建物が並んでいる。遙拝所は前面に扉をもち左右は玉垣で、背後は岩で囲まれた空間である。内部には「須佐能雄大神」「天御中主大神」「宇賀御魂大神」の3神の神名を刻んだ自然石の碑が建つが、普段は扉が閉められ参拝する人をみることは少ない。しかし祭りの日には正面には紫の幕が張られ、扉の柱には柿が挿され、その奥の岩に接した場所には案が置かれて3本の御幣が立てられる。また拝殿は瓦葺の一間の建物で、前面の開口部は普段は板戸で閉められて内部は見ることができないが、祭りの際には開け放たれ、3面に屏風が置かれる。坂下しの間、ここには神主や氏子総代、舞姫などが座り祭りの様子を見る場所となっている。しかしながら祭りに際してもこの場所で神事などが行われるわけではなく祭儀の中での空間的な意味合いはよくわからない。

またこの2つの施設の全面にある石段は、幅約30mにも及ぶ大規模なものであり、石段というよりも棧敷のような形態である。また石組などからみて段階的に構築されたことが想像できる。構築された年代は定かではないが、大正3年（1914）に作られたもので

あることが縁石の刻字からわかる。この石段の位置は坂下しの様子を見物するには適しているとは言えずその目的も明確ではない。聞き取りによるとかつては石段の前の道で馬かけが行われていたという伝承があり、それを見物するための棧敷ではなかったかといわれている。その性格についてはさらに考える必要があるが、坂下しの終着点にあるこの石段は遠くからもよく見ることができる特異な景観を呈しており、祭礼時には恰好のランドマークとなっている。また石段の最下段には5基の神輿を安置するための台が設けられ、坂下しを待つ間にはここに大濱神社、望湖神社の神輿が据えられ、やがて繖峰三神社より下ってきた二ノ宮・八王子・三ノ宮の神輿もそこに据えられる。神輿には坂下しに備えて周囲に綱が巻き付けられているが、この場所でそれは解かれ、また坂下しの間は外されていた飾り金具も装着される。そして準備が整うと静かに行列は出発していく。その意味でこの場所は、祭礼の中での動から静への変換点の機能も果たしている。



写真63 坂の下の遥拝所と拝殿



写真64 遥拝所



写真65 拝殿前での神輿の飾りつけ



写真66 縁石に記された大正3年改修

10)郷頭野の御旅所

5月5日に行われる集落内の巡行は卯の時祭と呼ばれ、先述のとおり以前は坂下しの4日後に行われていた。その目的地の1つである郷頭野の御旅所は集落の東端にある金刀羅神社からさらに道路を隔てて東側の内湖に面した場所にある。かつての御旅所は現在の位置よりさらに南にあったが、道路の敷設などを契機に現在の場所に移転している。かつてはこの場所から神輿を乗せた船が内湖へと漕ぎ出したといわれている。この場所も祭礼の時以外にはほとんど人の姿を見ない場所であるが、祭礼時には御旅所の広場に神輿が並び神事が行われる。内湖までも祭祀の領域としていたかつての祭りの様子を現在に伝える場所といえるだろう。

11)安楽寺神の座

5月5日の卯の時祭の終着点は安楽寺集落の山側にある「神の座」といわれる御旅所である。この広場に山に向かって5基の神輿が並べられ最後の神事が行われる。この広場に隣接して安楽寺が祭祀する愛宕神社や五社神社なども鎮座しており、神の座周辺は安楽寺集落の聖地であるが、この場所で神事を行うことによって神は山に帰るという意味を持つものと思われる。また伊庭の大濱神社からスタートした神幸が安楽寺の神の座で終結することには、伊庭と安楽寺の両集落による祭りの執行体制を示すものともいえる。かつては北須田のイヌボウや能登川の愛宕神社前も御旅所であったと伝承されるが、祭りに参加する各集落の聖地を回ることによって、集落間の結束を確認するという意味合いが神幸にはあったと思われる。



写真67 郷頭野御旅所に並べられた神輿(背後は内湖)



写真68 安楽寺「神の座」に並べられた神輿

(2) 伊庭の社会組織と文化的景観

1) 社会組織と文化的景観

近畿地方平野部の村落景観の大きな特色として人家が密集した集村であることがあげられるが、社会面での特色としては講や組といった村落内の内部組織が発達し、村落全体としての結合も強いことがある。東近江はこれらの特色が典型的にみられる地域であるが、伊庭においては、景観はもとより、地縁組織や年齢組織、宗教組織といった社会組織面において顕著な特徴がみられる。それらは伊庭の文化的景観形成の基礎となると同時に、景観そのものにも多くの特徴を与えていている。

社会組織と景観の関連をうかがう上で重要なのは、1つには、宗教組織であればその信仰対象、地縁組織ならばその集会場所といった、結集の核となる場所であろう。またそれらの組織の成員の分布とこのような結集の核の間にも密接な関係があることが推測できる。ここでは結集の核と成員の分布の2点に着目しながら、伊庭の社会組織が景観に与える影響について述べていきたい。

伊庭には様々な社会組織があるが、ここでは大きくそれを地縁組織、年齢組織、宗教組織に分類する。以下、この類型に従いながら各社会組織を概観することとした。

2) 伊庭の地縁組織

居住地ごとのまとまりによって組織されるのが地縁組織であるが、伊庭の場合、当然伊庭集落全体がもっとも大きな地縁組織となる。伊庭集落は8つの町に分かれている。町の中にはさらに隣組などの分節的組織が存在する。また各家を中心としたトナリも大きな機能を果たしている。

【ムラ】

伊庭全体を指す呼称として、当然「伊庭」が使われるが、ムラや区と呼ばれることが多い。組織としては自治会がある。自治会長は任期1年で、副会長を務めた者が翌年昇格する。毎年2月に副会長を選挙で選ぶ。また評議員は後述する8つの町から一人ずつ出ている。大濱神社氏子総代会、教育後援会、農事改良組合、自治消防会、営農組合、環境整備委員会、土地改良区、子ども会、老人会、婦人会などはすべて自治会を単位とした組織である。

自治会の行事として、宗教的なものとして百万遍がある。これは毎年、夏の土用に入つて3日目の土用三郎の日に行われていたが、現在はそのあたりの日曜日に行っている。正慶2年（1333）に伊庭に害虫が発生した際、了念上人が親鸞聖人御真筆の光明本尊を掛けて念仏を唱えたところ、害虫が去り豊作となった。その後、康暦元年（1379）にも同様のことがあった。以来、光明本尊のおかげと毎年虫供養の法要を営んでいると伝承されている。百万遍行事は妙楽寺の本堂で住民がそろって行われる。住職は参加せず後述す



写真69 妙楽寺での百万遍



写真70 伊庭祭りでの謹節館

る年長が光明本尊の掛け軸の前で読経をする点に特色がある。ムラの行事であるため、年長は妙楽寺の門徒とは限らない。また町が交代でこの行事の世話をすると、参加者には白豆を炊いたものが配られる。この豆は水田のミナクチに供えるとよいといわれている。

また7月に行われる集落内のカワ（水路）の掃除（オオカワサラエ）も自治会の行事である。オオカワ（幹線水路）の掃除を午前中に行い、昼からは近隣の地縁組織である隣組がコマイカワ（支線水路）の掃除を行う。伊庭全戸の共同作業としてはこのオオカワサラエが唯一のものであるが、この行事も近世初期に河川の改修を行った徳永法印の恩を忘れないために行うものと伝承されており、伊庭の歴史と関連させる形で行われている。

伊庭の自治会事務所は、「シロ」と呼ばれる場所にある謹節館の隣にある。謹節館は昭和23年（1948）に建設された建物で内部には大広間があり、そこは伊庭祭りや寒念仏などの行事の出発点であり、かつての青年団や婦人会の行事の場でもあった。またその前の広場はかつて相撲大会や盆踊りが行われ、現在でも多くの人々が帰省する絵系図参りの日には、広場の周りに絵の描いた提灯をつり、金魚すくいなどが行われる「絵日記」というイベントの場ともなっている。現在でも撤去された橋の柱を集めて庭園化した場所や、明治29年（1896）の水害の浸水碑などが周囲に建てられており、この場所が住民にとって特別な場所であることがわかる。謹節館の場所にはかつて、小学校や村役場などが設けられ、さらに以前には領主三枝氏の陣屋もあったといわれる伊庭の核ともいべき空間である。現在も広場の周りには石組みの水路がめぐり旧来からの景観をとどめており、伊庭の文化的景観を考えるときに欠かすことができない構成要素である。

また妙楽寺も伊庭全体の結集の核としての意味合いをもっている。もちろん妙楽寺には固有の門徒がいるが、先述のように伊庭全体の行事である百万遍の行事の場ともなり、また住民が盆に先祖の肖像を描いた絵系図を供養してもらう絵系図参りにおいても、それぞれのネガイデラとは別に妙楽寺でも供養をしてもらうなど特別な意味を与えられている。妙楽寺は住民からはオオテラと呼ばれており、ネガイデラとは別に伊庭全体の寺としての意味合いを強くもった寺院である。

【町】

伊庭の内部は東殿町、西殿町、東北川町、西北川町、中下町、南川町、四ツ谷町、名吉町の8つの「町」に区分されている。町はまたアザと呼ばれることもある。町からはそれぞれ評議員が選出され、自治会の運営にあたるとともに町の代表も務めている。町は夜番や回覧板の単位であるほか、若い衆の単位でもあり、年長も町ごとに選ばれ、伊庭全体の行事である百万遍の当番を交代で務めるなど伊庭の社会組織の基礎になる単位である。

町がいつから存在したのかを史料的に確認することはできない。ただ近世の各町にはそれぞれ町会所が存在したことが史料によって確認できる。南川町の寛政8年(1796)の「町会所定書」には、火の用心・博奕の禁止・若者の不行跡の禁止などについて「老分之者共相談合」して決定したことが記されている。博奕をしたときには家を破壊するという大変厳しい掟であった。またこの文書の中には「町会所拾ヶ組相立置」という表現もあり、この時期には町会所、あるいはそれを持つ町が10あったことがわかる。これは能登川や須田を含めた数字である。また南川町の文化7年(1810)「会所道具並ニ町定帳」によると、町会所には梯子・縄・水かごなどの防火用具のほか、用心燈、固弓張などの備品があり、防火、防犯が会所の重要な機能であったことがうかがえる。正月には町を単位に火伏の神である愛宕への参拝が行われており、町場に近い村落である伊庭の各町にとって防火機能はもっとも重要であった。伊庭町共有文書によると明治以降会所は町議所と呼ばれていたが、大正になるとこの表現はなくなり、現在は残されていない。

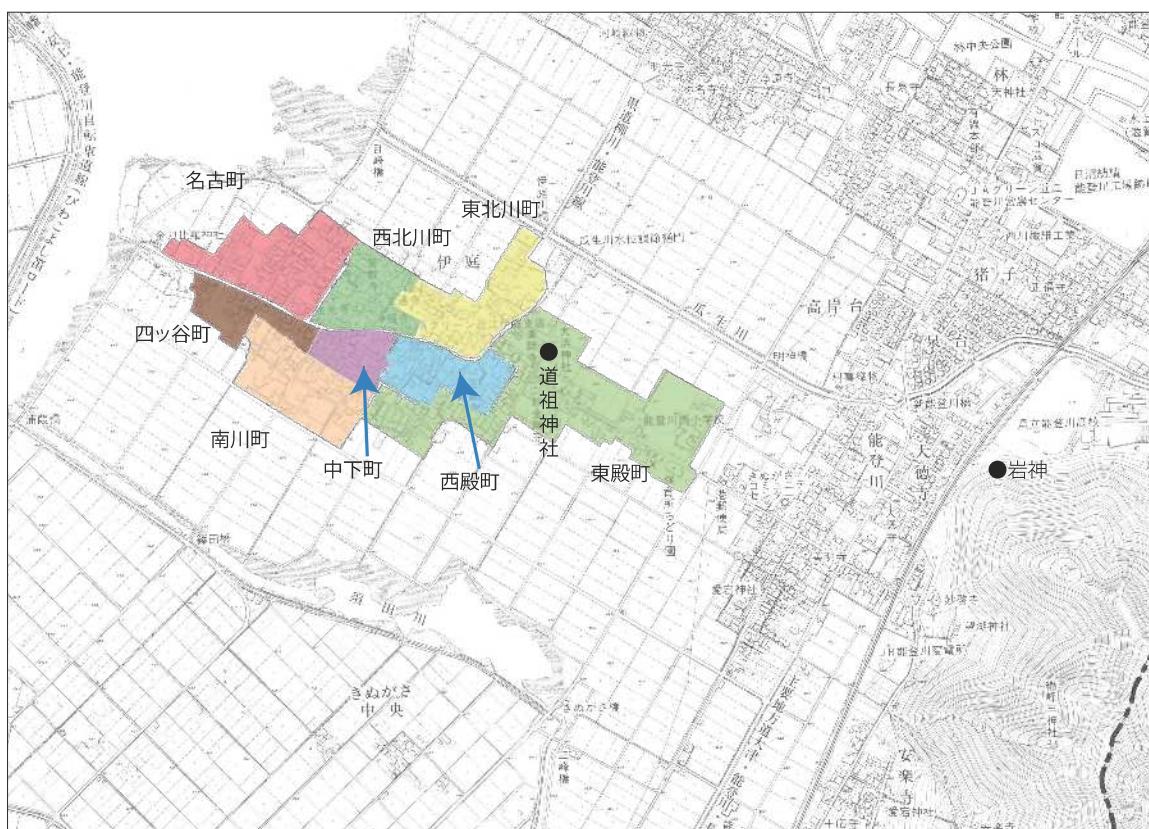


図37 伊庭の町

【隣組】

町の中にはさらに細分化された地名がある場合がある。柳村・奥村・横町・五軒町など地名は近世の史料に登場するが、現在でも聞き取ることができる。また戦時中に組織された隣組があり、5～10軒の家で構成されている。オオカワサラエのときにはコマイカワ（支線水路）の掃除は隣組で行う。隣組で一杯飲みをするところもある。

【トナリ】

隣組以上に伊庭の生活にとって重要なのは、ある家を中心としたトナリと呼ばれる集団である。これはある家からみて隣接する3～5軒程度の家を指すので、そのすべてを図示することはできない。かつての葬式では、繖山の山麓にあった火葬場まで船で遺体を運んだが、これはトナリの仕事だった。明治以後は輿で運ぶようになったがそれをトナリがした。葬式道の辻々にろうそくを立てるのもトナリの仕事だった。火葬は専門の人がしたが、サキビといって菜種のわらにヨシをまいたものを作ってトナリが燃やして煙をあげ、それから火葬を行った。このように特に葬送儀礼においてトナリは重要な役割を果たし「遠い親戚より近いトナリ」という言葉もあった。現在でも転居などでトナリになってもらう時にはトナリイリといってお願いをする。

3)伊庭の年齢組織と同年

伊庭の年齢組織は先に見た図33が示すように伊庭祭りにおいて大きな役割を果たすが、そのうち年長、同年などは祭礼以外の村落生活においても様々な機能を果たしている。

年齢組織の基本となるのは、同じ年に生まれた男子の組織である同年である。かつては干支ごとに組織したが、現在では同級生が単位となっている。それぞれに会の名前をつけ、伊庭祭りなどでは揃いの衣装で参加する。同年は15歳前後で組織され、以後死亡によって最後の一人となるまで交際が続く。毎月交代で宿を設けて、そこでツキヨリと呼ばれる宴会をしたり、積み立てをして年に一度程度旅行をしたりする。成員が結婚するときには婚礼に呼ばれ皆で祝儀をする。かつて家で婚礼をしていたときには、同年は座敷に座り新妻が一人ひとりに酌をしたという。同年の家の葬式でも、トナリに次いで様々な作業を担当した。また同年は還暦には多賀大社や伊勢神宮に参拝をする。

伊庭祭りを構成する各年齢集団もその基礎となるのは同年である。伊庭祭りでは怪我をすることが多いが、祭りで怪我をすると直後のタホリ（田植え前にそれまで植えていたレンゲを田に鋤き込む作業）ができないので同年が手伝ったという。またかつての住居の茅葺きをするときに同年が中心に手伝った。これはお互いだったのでテッタイアイといった。同年はこのように生業面での互助組織でもあった。

4) 同年による寄進

同年は42歳の厄年には、甲賀市の田村神社と大濱神社に詣でた。厄年の同年で村のために橋や神社の石造物などを寄進する。何を寄進したかについては、大濱神社に報告する。また自治会長、氏子総代を呼び直会が行われる。同様のことは還暦に際しても行われることがある。大濱神社をはじめとして伊庭の神社に灯籠などの石造物が非常に多くみられる背景には、この同年の寄進がある。同年の成立を歴史的に考察することはできないが、同年による寄進については、大濱神社、望湖神社境内で実施した石造物調査によってある程度歴史的な経過を知ることができる。

表20は大濱・望湖両神社境内の石造物のうち、明らかに同年によって建立されたものを抜き出し年代順に並べたものである。これによると同年によって建立された石造物は少なくとも26基あり、明治34年に大濱神社境内に建てられた遙拝所の石柱が最も古い。以後、次々と建立されていくが、それ以前は個人あるいは在地などによる寄進が主体であった。先述のとおり伊庭の神社祭祀は近世以来4つの宮座によって運営されていたが、明治23年の改正によって、ムラ全体が担う形へと変化している。それに伴って同年組織が再編成され村落生活の中で重要な機能を担う存在へと変化したことが推測できる。

表20 同年によって建立された石造物

地区	番号	種別	年代	刻字
大濱神社	63	遙拝所碑	明治34年	(正面)遙拝所 (裏)明治三十四年/丑歳生同人
大濱神社	21	石燈籠	明治36年5月	(正面)献燈 (右)社掌山脇右一 (左)献主/奥村氏・村田氏・川原崎氏・谷野氏 (裏)明治三拾六年卯五月建之/文久二戌生四十二才記念
大濱神社	27	石燈籠	明治36年5月	(正面)献燈 (右)献主/岡田氏・川原氏・徳永氏・村田氏 (左)社掌山脇右一 (裏)明治三拾六年卯五月建之/文久二生中四十二才記
大濱神社	66	社号標	明治38年 10月16日	(正面)大濱神社 (裏)明治三十八年十月十六日/滋賀縣知事正五位勲四等鈴木定直 (基礎・裏)社掌 山脇右一/同齡会寄附姓名/居原田岩吉・川原崎龜五郎・橋村幸一郎・(以下略・人名合計36名)
大濱神社	6	定書建屋	明治39年10月	(札・正面)定/一車馬ヲ乗入ル事/一魚鳥ヲ捕ル事/一竹木ヲ伐ル事/右條々於境内令禁止者也/明治三十九年十月 (札・裏面)奉納/定書建屋改築/午羊会/昭和二十九・三十年生/上田清司・山本芳治・奥村達之・河村春男・浮氣清司・中村博・宮川欣也・奥村清・徳永敏行・奥村昭彦・大西政一・大西恵三・田中源太郎・河原崎泰孝・沖茂和・山本常隆・桂田康弘/平成六年三月吉日 (梁石裏面)明治三十九年丙午年四十二歳連中・社掌山脇右一
大濱神社	62	石燈籠	明治43年	(正面)献燈 (裏)明治四十三年/四十二歳連中
大濱神社	16	橋柱	大正4年	(左後裏面)奉納 大正四年 (右後裏面)明治七甲戌年同齡者
大濱神社	64	時計台	大正4年	(正面)奉獻 (裏)大正四乙卯年/還暦紀念/橋村万治郎
大濱神社	5	幟立	大正5年5月	(正面)奉獻 (右)大正五年五月建之 (左)明治八年亥年同齡者/社掌山脇右一 (裏)宮竹長徳・村田平治郎・辻平治郎・山□□□ (他にも人名あり)
大濱神社	2	石柱	大正7年1月	(正面)奉神庭整理 (右)大正七年壹月献之 (裏)明治廿七年同齡者/春秋会
大濱神社	17	石柱	大正7年1月	(正面)奉神庭整理 (左)大正七年壹月献之 (裏)明治廿七年同齡者/春秋会
大濱神社	33	石燈籠	昭和10年3月	(正面)奉燈 (裏)昭和十年三月為初老紀念献之/川原崎忠三・実村徳松・村田豊治郎・徳永太八・片山卯太郎・村田佐太郎・福井捨吉・川原崎浅吉・今堀卯吉

地区	番号	種別	年代	刻字
望湖神社	9	標石	昭和12年	(正面)奉納幣殿新築(裏)昭和十二年還歴紀念 献主明治九年生同年者
大濱神社	9	鳥居	昭和12年4月	(右裏面)昭和十二年四月/為初老記念献之 (左裏面)願主明治三十年丁酉年生榮西会
大濱神社	42	寄進碑	昭和17年3月	(正面)奉納/大東亜戦争国債 明治三十五年同生/金壹阡圓也 晩会 (裏)厄除/記念/昭和十七年三月
大濱神社	43	寄進碑	昭和20年1月	(正面)大濱神社御神田永樂会 (裏)奉納/昭和二十年一月建之/初老記念/明治三十八年生/村田壯八・沖庄一・奥村安吉・中村稔三・大西謙一・浮気直一・備前幹一・徳永清一・宮井源九郎・奥村吉治郎・田邊半三郎
大濱神社	38	古神札納所	昭和29年4月	(正面)奉獻 (裏面・銘板)厄除紀念/大正三年甲寅年生/西川實・徳永健一・岡地栄治郎・奥村芳三・川原崎建三・川原崎房治郎・片山信道・吉田寅蔵・田中寅三・中村基三・村田義蔵・松村正治郎・青木正男・三上米蔵・宮川啓之助/奉納昭和二十九年四月吉日
大濱神社	52	石灯籠	昭和56年正月	(正面)献燈 (基礎・裏)昭和十六年生/巳智生会・河原崎藤一・中村公武・片山智成・奥村吉一・田辺武男・長谷川肇・村田幸男・河原崎嘉三・奥村政和・浮気正男/昭和五十六年正月吉日
大濱神社	51	石灯籠	昭和56年3月	(正面)献燈 (基礎・裏)昭和十六年生/巳智生会・奥村吉朗・奥村耕司・原田國親・川原崎彦太郎・河原崎伍一・奥村康男・山路敬英・平野喜一郎・山本正行・今堀誠二/昭和五十六年三月吉日
望湖神社	25	狛犬	昭和57年3月	(基壇正面)奉獻 (基壇裏)昭和拾七年生/馬盛會/村田勇・村田好三郎・村田定・村田忠・山路茂男・山田喜久男・山田清三・山本義廣・五十音順・昭和五拾七年三月吉日
望湖神社	26	狛犬	昭和57年3月	(基壇正面)奉獻 (基壇裏)昭和拾七年/馬盛會/川原崎莊三・川原崎孝司・小林勝・周防庄三・徳田利一・中村正輝・長谷川治男・備前繁男・五十音順・昭和五拾七年三月吉日
大濱神社	49	玉垣	平成22年3月	(左)祥風会・祥風会・奥村和範・中嶋康博・奥村博之・橋村昌純・奥村彰恒・徳永光武・川原崎徹・村田真・山路哲司・夏井啓吾・村田崇・平成二十二年三月吉日
大濱神社	10	社標石	平成25年8月	(正面)愛宕神社 (右)平成二十五年八月吉日 (裏面)昭和二十八年生/奉納還暦記念/河原崎正枝・山路敏江・川原崎順子・田村久義・田中和子・池一夫・西川しづえ・中村三蔵・奥村栄子・徳永佐代子・山田明男・橋村孝一郎・吉田秀義・村田源一
大濱神社	25	石灯籠		(正面)献燈 (右)中村彦□・片山岩□・中居平□・沖□十郎・村田兵□ (左)宮川与惣□・片山辰治郎・中村亀治郎・片山□□・中村辰治郎 (裏)明治辰元年生/山路右一
大濱神社	31	狛犬		(台石正面)奉獻 (台石裏)明治十一同年者/□□□吉・田辺□□・□□□□ (台石左)※人名記載の可能性があるが読めず
大濱神社	34	石灯籠		(正面)奉燈 (裏)願主/明治二十八年乙未同年者/浮気万治郎・山本達蔵・川原崎弥三郎・片山□□・中村英一・山本末吉・山路茂太郎・中村弥之助

5)年長

現在の年長は各町から年長者1名が選出される形となっている。ただ伊庭祭りの際に年長も繖峰三神社へと登らねばならず、あまりに高齢では無理であるため70歳程度の人が選ばれるようになっている。伊庭祭りの卯の時参りでは、年長は烏帽子に直衣といいで立ちで行列の先頭を竹杖をもって歩き、また盆には妙楽寺などで盆礼のために正面に座って、参拝者の例を受ける。正月にも妙楽寺と大濱神社の社務所で手分けをして正月礼を受けるなど、様々な行事で象徴的な役割を果たしている。

年長は郷頭の流れを引くものと言われる。郷頭は各宮座の長老であり、元禄8年(1695)

の大濱神社棟札にも記されているが、その歴史はさらに遡るであろう。宮座組織の解体によって、各町から年長を出す形態に変化したものと思われる。

6)伊庭の宗教組織

伊庭には寺院として、浄土真宗本願寺派の妙楽寺・誓教寺・法光寺・淨福寺、浄土真宗仏光寺派正巖寺、浄土宗妙金剛寺があり、またそのほかに無住ではあるが正福寺・薬師寺（堂）などの寺堂がある。これらの寺院には当然信徒集団が形成されている。また神社としては先述のとおり大濱神社・望湖神社・繖峰三神社があり、それぞれに氏子集団がある。さらに金刀毘羅神社・古宮をはじめとする小祠や塚が多くあり、大濱神社の境内にも多くの小祠がみられる。これらの小祠はそれぞれ在地と呼ばれる祭祀集団の信仰対象となっている。さらに集落内には多くの地蔵がみられるが、その大半は各家庭で祭祀されるものであり、そのほかに地域的に祀られている地蔵が4体ある。このように伊庭では多くの神仏とそれを祭祀する組織がみられるが、これは周辺の村落と比較しても非常に多く、伊庭の都市的な性格を示すものといえる。これらの宗教施設は伊庭の文化的景観の一部を形成しているが、それはそれを形成し保持する宗教組織と不可分の関係にあることが重要であろう。

ここではこれらの宗教組織について、特に伊庭の特色をよく示すと思われる在地を中心にその概略を説明することとする。

7)在地

伊庭の宗教組織のうち、非常に大きな特徴を持つものとして在地がある。在地とは他では聞くことができない民俗語彙であるが、集落内にある各種の宗教施設の信者集団であり、それぞれの組織のメンバーは家ごとにほぼ固定し、様々な行事を行っている。講組織と性格が類似するが広域的な信仰ではなく、信仰対象物が集落内に存在する点で景観と密接に関連する組織といえる。現在確認できる在地は仁王堂在地・五位田在地・天満宮在地・百大夫在地・高木觀音在地・中村堂在地・柳瀬在地・岩神在地・雨谷在地・金刀比羅在地・毘沙門在地・薬師在地であるが、それ以外の宗教施設に関わる組織のうち、陣屋稻荷神社、白玉稻荷神社の信者集団はほぼ在地と同様の性格をもつためここで説明することとする。最初に各在地の祭祀対象・組織構成・行事・歴史などについて簡単に説明したい。なお在地の戸別データなどについては、「伊庭庄の歴史を語る会」によって行われた個別調査のデータに負っている。調査に当たられた皆さんには心より感謝いたしたい。また説明中の戸数などは伊庭集落の住民の戸数であり、このほかに安樂寺や能登川の人が在地に入っている場合もある。

【仁王堂在地】

大濱神社境内の道祖神社を信仰対象とするため、道祖神在地ともいわれる。祭神は猿田彦である。現在は42戸が加入しており、成員は名古町の家が15軒と多いが、全町に分布している。中村姓(27戸)、西川姓(8戸)などが多い。在地には郷頭と呼ばれる最年長者がいて、成員の家で子どもができれば郷頭に頼んでコヅケをしてもらう。これは帳面に名前を記入することである。一年交代の当番があり、神社の世話ををする。また年長者7名は社中と呼ばれ当番になったときには1月5日の座長開きで社中を呼んで接待する。また1月10日に大濱神社前の勧請縄を替える。7月13日、14日の大濱神社の祇園祭りにも参加する。その夜には涼み会といわれる宴会がある。

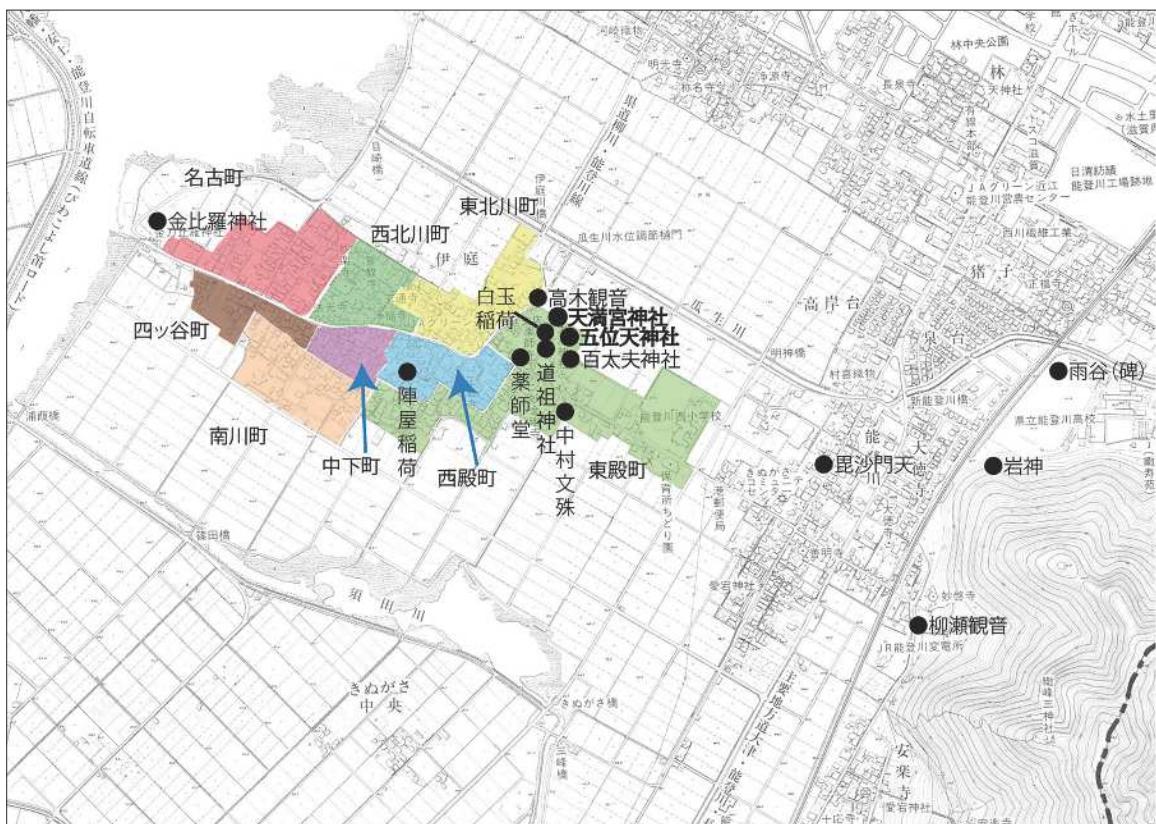


図38 在地の信仰対象物



写真71 大濱神社境内の小祠



写真72 仁王堂在地による勧請吊り

仁王堂在地の歴史を史料的に知ることはできないが、道祖神社は棟札から弘化4年（1847）に建立されたものであることが明らかである。ただ在地としてはそれ以前から存在していたことが推測される。

【五位田在地】

五位田在地は大濱神社境内の祠を信仰対象としている。五位殿や五位天と表記されることもある。この在地は又左衛門と増右衛門の2つの組に分かれており、一年交代で世話をすることになっている。又左衛門は現在、村田姓（11戸）、大西姓（4戸）、奥村姓（2戸）の17戸から構成され、成員の家は名古町（6戸）が最も多いが散在している。増左衛門は徳永姓（3戸）、橋村姓（1戸）、村田姓（2戸）の計6戸である。当番は毎月祠に榊を供えるが、そのほかに12月31日には鏡餅を供え、1月3日に鏡開きをする。

在地所蔵の史料には明和7年（1770）に「座帳箱」が作られたという記載があり、それ以前より存在していたことがわかる。

【天満宮在地】

大濱神社境内にある天満宮の小祠を信仰対象とする。現在は中村姓の家1戸のみが成員となっている。中村家は近世に金融業をしていたが、九州の大名に貸した担保としてもいたものと伝承されている。6月後半の日曜日に祭りがあるが、現在ではムラの行事となっており氏子総代が中心に行われている。また正月の深夜にも参拝が行われている。天満宮在地については史料がなく、歴史的経過を明らかにすることはできない。

【百太夫在地】

大濱神社境内にある百太夫神社という小祠を信仰対象とする在地である。百代夫、百代などと表記されることもある。現在、河原崎姓（7戸）、川原崎姓（5戸）を含む18戸によって構成されている。郷頭の制度は現在はみられないが、近世の史料には記載されている。また座の帳面があり、子どもが生まれればコヅケ（生まれた子どもを帳面に載せる）をする。正月には鏡餅と神酒を社に供える。正月の間に座帳開きをして、賽銭などの会計をする。その後に直会がある。また8月には涼み会という宴会をしている。かつては在地の田があったので年末に年貢取りをしていたが現在は行われていない。在地の文書の中に享和3年（1803）の「下在地座帳」があるので、近世には下在地と呼ばれていた可能性がある。同帳の中に文化8年（1808）に「御宮上ふき」をしたという記載があるので、社もそれ以前には建設されていたと思われる。

【高木觀音在地】

大濱神社に隣接して建つ正福寺境内の高木觀音が信仰対象である。觀音は秘仏だが寅年

に開帳する。現在では加入は自由だが、かつてはコヅケした人だけが加入していた。現在の成員は9戸であり、田辺（邊）姓が4戸あるほかは、1戸ずつで住居する町も散在している。このほかに能登川の家も加入している。かつては70戸が加入していたといわれている。以前は当番を定めて寄り合うときにはお膳を出していたが、現在は仕出しを頼んでいる。お参りは年間7回あり、般若心経の読経と御詠歌が行われている。そのほか元旦には初詣の礼受け、1月4日に注連縄吊、1月17日には芝焼きをして一年の天候を占う。4月は伊庭祭りの前なので境内の清掃をする。5月、9月には御命日として読経が行われている。注連縄（勧請）は観音堂の前に吊るもので、以前は1月4日に作っていたが現在は年末に全員で作っている。

【中村堂在地】

大濱神社と道を挟んで南側にある知恵文殊堂が信仰対象である。中村堂というのは現在の能登川にある地名で、そこから現在地に移転したと伝えられている。現在は片山姓（3戸）と周防姓（1戸）によって構成されている。講中と呼ばれることもある。一年交代で当番があり供物を供える。1月と8月に法要があり妙金剛寺の住職に読経してもらう。1月の法要は「合格祈願法要」として町内に案内を送る。法要のあとには食事会を開いている。12年に一度寅年に開帳がある。在地に伝わる「中村堂縁起」によると文殊像は役行者が彫ったものであり、応永年間（1394～1427年）に佐々木氏の家臣中村源左衛門重信が百日の日参の末靈夢をみたことに感激し堂を再建したことなどが記されている。

【柳瀬在地】

望湖神社参道脇にある柳瀬観音堂が信仰対象である。現在の成員は17戸で、山路姓（8戸）、宮居姓（3戸）、村田姓（3戸）などが多い。住居は散在している。長老6名が長人（おとな）と呼ばれている。1月に座帳開きがあり、コヅケや死亡者を消すなど帳面の編集を行う。6月の第1土日に大祭があり、供物を供える。またお盆にも供物をする。12年に一度寅年に、柳瀬観音御開帳が行われる。

天和元年（1681）、天明7年（1787）の望湖神社との敷地をめぐる争論文書があり、在地の歴史はそれ以前に遡ることがわかる。

【岩神在地】

能登川高校グラウンド脇の巨石が信仰対象物である。岩は2つあり注連縄が張られている。現在の成員は2戸であるが、かつては13戸あった。正月の第1土日に注連縄を編み、一同が紋付姿でそれを岩にかける。夜には当番の家で宴会が行われる。在地の歴史的な経過は史料が少なく知ることができない。

【雨谷在地】

能登川高校横の道と線路に挟まれた場所に建つ石碑が信仰対象物である。ただ祭祀などは大濱神社で行う。雨乞いの神で猪子山の龍神を祀っていると伝承されている。成員は現在3戸で、姓は異なり、住居も散在している。当番は碑の周りの除草などを行う。10月中旬に祭りを大濱神社で行い、その後社務所で直会をする。

【金刀毘羅在地】

伊庭集落の西端にある金刀毘羅神社が信仰対象である。この場所はかつては内湖に接した場所で船着き場があった。境内には祠のほか石鳥居や安政4年（1857）に建立された大きな石灯籠がある。この石灯籠は航海のための常夜灯ともなっていたといわれている。現在は7戸によって構成され、村田姓（4戸）、西川姓（2戸）、田辺姓（1戸）である。居住する町は散在している。在地の郷頭は一番年配の人となる。また郷頭のほか総代と一年交代の当番がおかされている。大濱神社の祇園祭りの宵宮である7月13日が金刀毘羅神社の祭りで供物をして神官にお祓いをしてもらう。正月と盆にも供物をするが、正月には鳥居や灯籠に注連縄をし、鏡餅を供える。また新年会がありかつては当番の家で行っていたが、現在は料理屋でしている。

石灯籠とともに在地には安政2年の「勧進帳」が残されており、金刀毘羅神社もその頃に建立されたと考えられる。寄進者のうち圧倒的に多いのは伊庭村の人々であるが、近在の村落や彦根、八幡、高宮など周辺の町場からの寄進もみられる。さらには大坂、京都、江戸、浦賀、名古屋、高岡、氷見などの寄進者もみられ、当時の伊庭が単なる農漁村ではなく、港湾機能をもった町場であることがうかがわれる。さらに上州各地からの寄進者が16名にも及ぶのは、近江商人の交易活動を抜いては考えにくい。そのような意味で金刀毘羅神社周辺の施設や石造物は、かつての伊庭の賑わいをうかがわせる貴重な文化的景観といえる。



写真73 金刀比羅神社



写真74 金刀比羅神社の石灯籠

表21 金刀比羅神社建立寄進者の分布

伊庭村内	名古丁	11	
	五軒丁	13	
	横丁	7	
	四津谷丁	11	
	中川丁	2	
	南川丁	3	
	奥村	5	
	北川丁	24	
	柳村	2	
	殿町	17	
	しろ	3	
	中下丁	6	
	寺前	3	
	清水堂	2	
	胡摩堂	3	
	下川丁	3	
	戌亥	1	
	岡	1	
	須田丁	6	
	能登川(浜)	10	
	乙女浜	1	
	小川村	1	
	猪子村	1	
近在の村落	山路村	2	
	下平流	2	
	山之脇	1	
	奥村	5	
	長命寺	2	
	常楽寺	1	
	浅小井村	1	
	金堂	1	
	魚屋丁	1	
	袋町	1	
	沢町	1	
	油屋町	1	
	城下	1	
	高宮宿	2	
	八幡	5	
遠隔地	京都	1	
	大坂	東堀通	1
		久宝寺町	1
	□府		3
	相州浦賀		2
	尾州名古屋		1
	越中高岡		1
	能州輪島		2
	越中氷見新町		1
	上州高崎		1
	江戸富沢町		1
	上州下仁田		2
	上州		11

【毘沙門在地】

毘沙門在地が信仰対象とする毘沙門堂は隣接する能登川町の領域にあり、朝鮮人街道から少し入った場所にある。敷地に数軒の家が建ち、その借地料も在地の財源となっている。川原崎姓の8戸によって構成され、居住地は東殿町が3戸ある以外は散在している。役職として大役と行事の2つがあり、大役は1年、行事は2年の任期である。大役は勧請縄の材料となるもち米の藁を用意する。行事は会計を担当する。1月前半の休日に勧請縄を作り堂の前に吊るす。また3月に座帳開きがあり夕方に大役の家で宴会がある。5月と9月にお参りがあり御仏飯を供える。12年に一度寅年の秋に開帳があり、3体あるうちの中央の毘沙門天から白い布をつなぎ、境内に建てた柱へと結ぶ。この柱を触ることによって毘沙門天に触れたこととなるという。毘沙門在地についても史料が少なく、その歴史を明らかにすることはできない。

【薬師在地・折玉稻荷講】

大濱神社から西に行き栄橋を渡った場所にある薬師堂及び同じ境内に堂と並んで建つ折玉稻荷が信仰対象である。稻荷講と薬師在地は同じメンバーで現在は8戸から構成されている。また薬師堂の前にある延命地蔵も薬師在地で世話をしている。1月8日前後に注連縄を作り堂に張り、そのあと直会をしている。このときヒノキの箸を燃やして、その時の音で豊作を占っている。5月と9月の9日にお参りをしている。稻荷については1~2月の寒の間にセンギョを行っている。このときには社殿に油揚げや赤飯のおにぎりを供える。以前は「先生」「先達さん」と呼ばれる宗教者に来てもらっていたが、現在は薬師在地のうちの特定の3軒がセンギョを行っている。

このセンギョは伊庭の白玉稻荷、陣屋稻荷、多武大明神、大徳寺境内の稻荷大神、望湖神社、繖峰三神社の稻荷大明神すべて参っている。

また延命地蔵は背丈ほどの大きさの石仏座像で堂に入っていない。毎年8月24日の地蔵盆には在地が世話をしている。薬師在地については史料がなく歴史的経過は不明である。

【白玉稻荷】

大濱神社境内の白玉稻荷を信仰対象としている。現在3戸が成員であるが、姓も居住する町も異なる。3月はじめに初午、11月に御火焚祭りを行っている。このときには油揚げなどの供物をしている。正月には掃除をして注連縄や鏡餅を供えている。昭和6年以降の記録が残っているが、それ以前のことは不明である。

【陣屋稻荷】

謹節館の裏側に守国神社と並んで祀られている陣屋稻荷が信仰対象である。現在4戸で

祀っているが、その姓も居住する町も別々である。3月に初午をし、11月に御火炊をしている。これらの行事のときには油揚げや神酒を供える。守国神社は近世の領主三枝氏の先祖を祀ったもので、陣屋跡で明治初期に祀られているが、稻荷についてはいつ創建されたのかは不明である。

8) 各組織の関係

以上、在地を中心に伊庭の宗教組織を概観してきたが、集落規模の大きさもあって宗教組織相互の関係や、地縁組織などとの関係を探るのはなかなか困難である。表22は神社組織、在地、地蔵を祭る集団の成員が、どの町に属しているのかを示したものである。例えば神社組織において望湖神社氏子や仁王堂在地の成員が名古町に多いといった特色は若干みられるものの、宗教組織と町との関係はそれほど明確ではない。各神社や在地の信仰対象物は山麓から内湖周辺にそれぞれが相当離れて立地しているので、その周囲に宗教組織の成員が集まるのは当然であるが、そのような状況は伊庭ではみられない。この原因として特に在地の場合、加入脱退が比較的自由であり、流動性が激しいことが考えられる。また伊庭の場合、人家が密集しており、分家などを出す場合にも本家の近くに屋敷地を構えることが困難であり、集落内の空いた場所に分家を出すことが多いといった事情もあったと思われる。表23は戸数が多い同姓集団11と各宗教組織及び町との関係を示したものである。同姓とはいえ必ずしも親戚でないというケースもあるが、同姓集団と宗教組織との間には相當に明確な関係性が読み取れる。例えば奥村姓では二ノ宮氏子が多く、河原崎・川原崎姓では望湖神社氏子・百太夫在地の家が多い。同様に山路姓では三ノ宮、西川姓では二ノ宮・仁王堂在地、村田姓では二ノ宮・五位田在地増右衛門、中村姓では二ノ宮・仁王堂在地などが卓越している。しかしながら、これらの同姓集団と町との関係に目を移すと、どの姓においてもほぼ各町の規模に応じて散在した状況であることがわかる。すなわち同姓集団と宗教組織の間には歴史的にある種の関係がみられるが、同姓集団は固まって居住するわけではないので、宗教組織の成員としては散在して分布する状況が生まれるのである。町や在地は原初的には相当独立性が強い組織であったと考えられるが、時代の中で成員が集落内に入り混じる結果となり、伊庭全体としての結合が強化されていったものと考えられる。

ただ地蔵に関しては、各地蔵の周辺の人々が祭祀をする状況がみられる。この地縁性の点で、地蔵と在地とでは少し性格の違いがみられる。

伊庭では多様な生業が営まれながら、特定の生業集団が集住し、集落内が分節化されるといった現象はそれほどみられない。これは集落内に水路が縦横に走り、どこからでも船を出して漁に出たり、また田舟で農業に出かけたりすることが可能であったこととも関連しているだろう。同様に宗教組織の成員も混在しており、地域的な分節化はみられない。その背景として、先述のとおり人家が密集しているため本分家の集住がほぼ不可能であつ

たことがあるだろう。このことが伊庭全体としての結集の強さにつながっているが、宮座の解体によって年齢集団、ことに同年が伊庭最大の行事である伊庭祭りの主体となったことなども、地縁や在地のまとまりを超えた結集を促進したといえるだろう。

表22 宗教組織の成員と「町」との関係

		東殿町	東北川町	名古町	四ツ谷町	西殿町	西北川町	中下町	南川町	合計
	戸数	59	50	50	29	36	29	25	22	300
神社組織	大濱	2	2	1	0	0		0	0	5
	二之宮	15	13	22	7	12	12	6	12	99
	三之宮	0	0	6	1	4	6	0	1	18
	望湖	0	0	14	4	8	3	7	0	36
在地	岩神	1	1	0	0	0	0	0	0	2
	雨谷	0	3	0	0	0	0	0	0	3
	毘沙門	3	1	0	1	1	2	0	0	8
	金毘羅	1	2	2	1	0	0	0	1	7
	百太夫	4	1	2	1	4	0	4	2	18
	五位田又左衛門	2	0	1	2	0	0	0	1	6
	五位田増右衛門	2	2	6	2	0	2	0	3	17
	仁王堂	5	6	15	2	4	4	2	4	42
	柳瀬	6	4	2	1	0	0	3	1	17
	高木觀音	3	2	2	1	0	0	1	1	10
	中村堂	2	0	2	0	0	0	0	0	4
	薬師	1	0	3	1	2	0	1	0	8
	天満宮	1	0	0	0	0	0	0	0	1
	陣屋稻荷	1	0	1	0	1	0	1	0	4
	白玉稻荷	0	0	0	1	1	0	1	0	3
	折玉稻荷	0	0	3	1	2	0	1	0	7
地蔵	乳地蔵	1	6	0	0	0	2	0	0	9
	帶解地蔵	0	0	1	0	0	0	0	8	9
	延命地蔵	1	0	3	0	2	1	1	0	8
	南無地蔵	9	1	1	4	5	2	2	1	25

9)社会組織と文化的景観

以上、地縁組織・年齢組織・宗教組織に分けて伊庭の社会組織について概観してきた。冒頭で述べたとおり、これらの組織の結集の場となる、謹節館・妙楽寺・大濱神社、あるいは各在地が祭祀する中村堂・薬師堂・柳瀬觀音堂・金刀比羅神社、さらには地域ごとに祀られる地蔵などは、生業や生活のさらに基盤となる社会組織の在り方を示す文化的景観であるといえる。それぞれのイエは、町などの地縁組織に属しながら、それとは異なった原理によって構成される神社組織や在地組織にも所属している。また個人は同年などの年齢組織にも所属しているので、伊庭のイエや人はこれらの組織の重なりを通じてほぼ知らない人がいない状況となる。このように重層的なネットワークによって相互に関連づけられる伊庭の社会の在り方を雄弁に示すのが先に挙げた様々な施設なのである。

またこれらの組織が作り出す景観にも目を向ける必要がある。例えば仁王堂在地が正月に作る勧請縄は伊庭集落の入り口に懸けられ、重要なランドマークとなっている。毘沙門在地が作る毘沙門堂前の勧請吊り、あるいは高木觀音堂在地が作る觀音堂前の勧請吊り、

表23 宗教組織・「町」と同姓集団の関係

		奥村姓	河原崎姓	川原崎姓	山路姓	西川姓	村田姓	大西姓	中村姓	片山姓	田中姓	浮気姓	田邊(辺)姓
神社組織	大濱	1	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0
	二之宮	11	0	1	0	9	19	1	24	2	0	5	0
	三之宮		1	4	9	0	2	0	0	5	7	4	0
	望湖	1	7	16	0	0	4	6	0	1	1	0	8
在地	岩神	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
	雨谷	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	毘沙門	0	0	8	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	金毘羅	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0
	百太夫	0	5	7		1	1	0	0	0	0	0	0
	五位田又左衛門	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0
	五位田増右衛門	0	0	0	0	0	11	4	0	0	0	0	0
	仁王堂	1	0	0	0	8	3	0	27	0	0	0	0
	柳瀬	1	0	0	8	0	3	0	0	0	0	0	0
	高木觀音	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	4
	中村堂	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0
	薬師	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	天満宮	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
	陣屋稻荷	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
	白玉稻荷	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
	折玉稻荷	0	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0
地蔵	乳地蔵	0	0	1	0	0	0	0	1	1	2	1	0
	帶解地蔵	1	1	0	0	0	0	1	2	0	0	2	0
	延命地蔵	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0
	南無地蔵	2	0	6	0	0	0	0	2	1	0	0	0
町	東殿町	3	2	8	5	2	4	3	3	3	2	2	0
	東北川町	1	0	4	1	0	7	0	5	1	5	2	2
	名古町	3	2	1	1	1	5	2	11	1	1	3	4
	四ツ谷町	1	0	1	0	1	5	0	1	1	0	0	1
	西殿町	1	2	3	0	1	2	1	4	3	0	1	1
	西北川町	0	0	2	0	2	4	0	1	0	3	1	1
	中下町	2	1	3	1	0	0	0	2	0	0	0	0
	南川町	4	1	0	1	2	1	3	1	0	1	1	0

岩神在地が作る注連縄なども同様である。社会組織の核となる施設とともに、社会組織が行事の中で生み出す景観も伊庭の歴史と社会を映し出す重要な文化的景観であろう。そのほかにも水利や山林、実行組合などの生業関係の組織もあるが、他章で触れられるためここでは地縁、年齢、宗教の組織のみを取り扱う。

(3) 寺院の民俗

1) 伊庭の諸寺院

伊庭には浄土真宗本願寺派の妙楽寺・法光寺・誓教寺・源通寺・淨福寺、浄土真宗仏光寺派の正巖寺、浄土宗鎮西派の妙金剛寺の7カ寺がある。このうち本願寺派の5カ寺の構成は伊庭の文化的景観の特色の1つを形成している。妙楽寺は寺伝によると古代の創建とされその後天台宗を経て、仏光寺派7代了源の舎弟了念によって再建されたと伝わる。以来、湖東における仏光寺派の拠点寺院であったが、元文4年（1736）に浄土真宗本願寺派に転派した。その子院的な寺院である法光寺・誓教寺・源通寺・淨福寺なども同時期に転派している。また仏光寺派に残った門徒たちによって創建されたのが正巖寺である。仏光寺派の寺院では先祖の絵像を巻子に記した絵系図を盆前後に寺に持ち寄り供養してもらう絵系図参りの行事を伝える寺院がいくつもあるが、後述するように妙楽寺などは転派の後もこの行事を現在に伝え伊庭の特色ある民俗となっている。妙金剛寺も妙楽寺同様に古代の創建という伝承をもち天台宗を経て浄土宗の寺院となっている。

2) 寺院をめぐる社会関係

伊庭の諸寺院の檀家がどの姓が多いか、また各寺院の檀家がどの氏子や在地に属しているのかを示したのが表24である。ある寺院の檀家には同姓の集団が属している場合が多く、在地や氏子も同姓集団との関係が深いため、檀家と氏子や在地の間にも、同姓集団を媒介とした一定の関係性がみられる。例えば法光寺の檀家には仁王堂在地に属するものが多いが、これは檀家の中の15軒を占める中村姓の家の大半が仁王堂在地に属しているためである。同様に伊庭に9軒ある山路姓の家はすべて淨福寺の檀家であるが、山路姓の家は大半が柳瀬在地に属するため、淨福寺の檀家には柳瀬在地の家が多いということになる。ただ妙金剛寺の檀家に南無地蔵尊を祭祀する家が多いのは、この地蔵が妙金剛寺の門前にあるため、地蔵の祭祀集団と檀家集団がほぼ重なるためである。

また本願寺派寺院のうち妙楽寺は他の4カ寺の親寺とでもいべき存在であり本来的には独自の檀家を有しなかったと思われるが、現在ではそのうち源通寺が無住となっておりその檀家が妙楽寺の檀家となっている。さらに他所から伊庭に来た家も妙楽寺の檀家となることが多いといわれている。

また各寺院の檀家集団の中にも講などの集団が形成される場合もある。例えば妙楽寺には十六日講という講がある。これは講中とも呼ばれ、男性が60歳で加入する年齢階梯的な集団である。妙楽寺では、佛教青年会と佛教壮年会を経て十六日講に加入する。

表24 檀家と他の集団の関係

	妙楽寺	法光寺	誓教寺	淨福寺	正巖寺	妙金剛寺	善明寺	大徳寺
同姓	上田4 岡田2 片山5 河村2 田邊7 辻4 中村3 西川9 橋村3	大西5 川原崎6 河原崎6 徳永3 中村15 橋村2 村田2	備前2 福井2 宮居3 村田23 浮気8	浮氣2 田中10 山路9	大西3 奥村8 川原崎10 河原崎2 徳永2 中村5 村田2	沖4 奥村2 川原崎6 徳永3 中村2	片山2	岡田4
大濱神社	0	0	0	3	1	1	0	0
二ノ宮	23	19	25	4	13	8	0	1
三ノ宮	3	0	8	17	3	6	2	0
望湖	17	22	7	2	13	5	1	4
岩神	0	0	0	1	0	0	0	1
雨谷	1	0	0	2	0	0	0	0
毘沙門天	0	2	0	0	0	6	0	0
金刀毘羅	3	0	4	0	0	0	0	0
百太夫	0	9	1	0	6	0	1	0
五位田1	1	3	2	0	0	0	0	0
五位田2	0	4	12	0	0	1	0	0
仁王堂	13	16	4	0	5	3	0	0
柳瀬	2	1	1	8	0	0	0	0
高木觀音	4	1	1	0	0	0	0	1
中村堂	3	0	0	1	0	0	0	0
薬師堂	1	0	1	1	1	0	0	3
天満宮	0	1	0	0	0	0	0	0
陣屋稻荷	1	0	1	0	1	0	0	1
白玉稻荷	1	0	0	0	0	1	0	0
折玉大明神	1	0	1	0	1	0	0	3
乳房地蔵	2	2	0	3	1	0	1	0
帶解延命地蔵	2	3	1	0	0	0	0	0
厄除延命地蔵	1	0	1	0	1	0	0	0
南無地蔵	0	0	0	0	0	26	0	3

3) 仏教関係の行事

① 絵系図参り

伊庭の民俗の特色の1つとして、仏教民俗行事がある。ここに妙楽寺など浄土真宗の寺院でみられる絵系図参りは非常に特徴的な行事である。これは各家ごとに故人の肖像を巻子に描いたものを寺院に持ち寄り、住職に読経をしてもらう行事である。絵系図では故人は僧体で描かれ、法名が記される。またすべてではないが没年月日や俗名が記されるも

のもある。死者が出るたびに肖像が描かれた紙を継いでいくようになっており、近年のものは写真が貼られたものもある。また中には近世前期の年号が記されたものも見られ、歴史的にも貴重な史料である。絵系図は各家で保管されるほか、妙楽寺に保管されたものが多くみられる。これは妙楽寺転派の際に離檀した家のものと言われている。また仏光寺派の正巣寺でも昭和16年より絵系図参りを始めており、こちらは肖像ではなく位牌状の枠の中に法名を記したものと卷子にしている。

本願寺派寺院の絵系図参りでは最初に妙楽寺に親族で参り供養をしてもらったのちに、法光寺・誓教寺・淨福寺において供養をしてもらうという二重の供養をする家が多い。供養が終了したのち、本家で宴会をする家もある。絵系図参りのときにともに参拝する集団は家族の場合もあれば30名を超える大人数の場合もある。これは絵系図に描かれた故人の子孫が集まるもので、普段の冠婚葬祭では親戚付き合いをしていない場合もある。



写真75 妙楽寺の絵系図参り



写真76 絵系図

②墓制

伊庭の浄土真宗寺院の檀家には近年まで墓を建立したり、また遺骨を墓地に埋葬する習俗がなかった。これは無墓制とでもいべきもので、滋賀県下の浄土真宗の門徒では所々でみられる習俗である。火葬された遺骨は妙楽寺の納骨堂と京都の本山に納骨する。火葬場は現在ではトンネルができている字野上にあり、その付近には多宗派の家の石塔が建っている。墓地が存在しないというのもまた伊庭独自の文化的景観といえるだろう。

3 寺社建築とその特質

(1) 寺社建築の分布

伊庭集落には寺院として、妙楽寺・法光寺・淨福寺・誓教寺・源通寺（以上浄土真宗本願寺派）・正巖寺（真宗仏光寺派）・妙金剛寺（浄土宗）の7カ寺がある。

堂は6カ所、神社は13カ所がある。しかし、繖山にある望湖神社・繖峰三神社は別として、堂・神社が伊庭の集落の東寄りに偏在しているのが注目される。集落の中にあるのは帶解延命地蔵と守国大明神と、西端の金刀比羅神社だけである。



図39 寺社調査位置図

表25 伊庭集落に関わる寺院・堂・神社

番号	名称	形態	管 理
1	妙楽寺		
2	妙金剛寺		
3	正巖寺		
4	毘沙門堂	堂	毘沙門天在地
5	高木觀世音菩薩正福寺	堂	高木觀音在地
6	薬師堂	堂	薬師在地
7	乳房地蔵大菩薩	堂	東北川町柳出10軒講中
8	蒂解延命地蔵	堂	南川7軒講中
9	南無地蔵尊	堂	妙金剛寺
10	大濱神社		
11	道祖神社	社	仁王堂在地 幕末に社殿
12	愛宕神社	社	村管理 古くは在地 享保に摂社となる
13	五位田神社	社	五位田在地 もとより今地にあり
14	百大夫神社	社	百大夫在地
15	天満宮神社	社	個人的祭祀が明治に摂社となる
16	白玉稻荷神社	社	白玉稻荷在地
17	文殊堂(知恵の文殊堂)	社	中村堂在地
18	正一位稻荷折玉大明神	社	折玉稻荷在地
19	守国大明神	社	陣屋稻荷在地
20	金刀比羅神社		金比羅在地
21	望湖神社	社	
22	柳瀬觀世音大菩薩	社	柳瀬在地
23	繖峰三神社	社	

その多くは在地や講中によって奉祭されているが、在地や講中は村の一部の住民によって構成されている。伊庭の集落全体が氏子として祀るのは伊庭八郷の地主神として祀られた大濱神社（近世までは牛頭天王社）である。在地などの祀る神社の多くは大濱神社の摂社とされており、その求心力の大きさがうかがわれる。

(2) 寺社建築の建設年代

これらの寺社の主要な建物は表26のとおりである。

それらの堂宇・社殿の建てられた年代も同表のとおりである。大濱神社仁王堂は格段に古く、様式・技法から鎌倉時代前期の建物である。古くは今より南の「六斎堂」という小字の地にあったとも伝えられ（『伊庭の坂下し祭』）、現在地に定着するまでの過程は定かではない。取り替えられている部材も少なくないが、本来は五間仏堂であったと考えられるため、中世には一定程度の構えを持った顕密寺院があったと考えられる。

望湖神社・大濱神社・繖峰三神社本殿は17世紀末から18世紀初頭に建てられた三間社で、それぞれ規模や形式・意匠が異なるが、いずれも特色を持つ良質の建物である。

仁王堂と3社の本殿はそれらが伊庭祭りの重要な舞台となる建物であり、それが江戸時代中期前半以前の建物で、なおかつ一部には前身建物の棟札も残り、伊庭地域における信仰とその歴史を具体的な形で残している点で貴重である。薬師堂も3社とほぼ同時期に建てられていて、伊庭村に関わる宗教施設の整備の1つの画期とみる事ができる。

これに対して妙楽寺の山門内は、淨福寺本堂(寛政5年)を最古として、幕末以降の建物が並ぶ。これは文政2年の地震被害後の復興の結果である。ただし妙金剛寺本堂も寛政11年、妙楽寺山門が享和3年の建立であり、神崎郡大工組頭田中家文書には天明から文化年間(1804~18)の普請願が3通残されている。18世紀後期に伊庭における寺院改修の動きがあり、その後の文政地震が妙楽寺境内の整備を推し進めたとみる事ができる。すなわち寺院に関しては、幕末の造営事業の結果が、現在まで残ってきたことになる。

また在地などが祀る神社や、大濱・望湖神社の拝殿・幣殿等は、明治以降に建てられたものが多い。しかしそれらは概ね近世の形式を継承している。

表26 主要寺社建築一覧

評価	社寺名	建物名	建立年代	西暦	構造形式
1	妙楽寺	山門	享和3年(獅子口刻銘)	1803	一間薬医門、切妻造、桟瓦葺
2		本堂	天保5年(棟札)	1834	桁行20.2メートル、梁間21.1メートル、入母屋造、向拝三間、本瓦葺、背面下屋庇付、桟瓦葺
3		庫裏	19世紀中期		桁行8.9メートル、梁間8.0メートル、切妻造、東・北面下屋庇付、桟瓦葺、正面切妻造、妻入、桟瓦葺、玄関付
4		鐘楼	大正5年(寺蔵記録)	1916	桁行一間、梁間一間、切妻造、桟瓦葺
5		手水舍	天保9年頃(手水鉢刻銘)	1838	桁行一間、梁間一間、切妻造、桟瓦葺
6		源通寺本堂	19世紀中期		正面8.3メートル、側面8.8メートル、入母屋造、妻入、桟瓦葺
7		淨福寺本堂	寛政5年(棟札)	1793	桁行9.1メートル、梁間7.5メートル、入母屋造、背面軒下張出付、桟瓦葺、東面下屋庇付、桟瓦葺、西面下屋庇付、鉄板葺
8		誓教寺本堂	明治5年(鬼瓦銘)	1872	桁行13.7メートル、梁間9.0メートル、片側入母屋造、片側切妻造、桟瓦葺、正面下屋庇付、側面下屋庇付、鉄板葺、背面下屋庇付、桟瓦葺
9		法光寺本堂	文政5年(棟札)	1822	桁行10.2メートル、梁間11.3メートル、入母屋造、向拝一間、本瓦葺
10		法光寺福智藏(経蔵)	明治27年(小屋梁墨書き)	1894	正面一間、側面一間、宝形造、桟瓦葺
11	正厳寺	表門	19世紀中期		一間薬医門、切妻造、本瓦葺
12		本堂	明治22(棟札・鬼瓦銘)	1889	桁行11.5メートル、梁間12.7メートル、入母屋造、向拝一間、本瓦葺、側・背面下屋庇付、桟瓦葺
13	妙金剛寺	表門	19世紀後期		一間薬医門、切妻造、本瓦葺
14		本堂	寛政11年(獅子口刻銘)	1799	桁行11.2メートル、梁間10.2メートル、入母屋造、向拝一間、桟瓦葺、側・背面張出付
15		鐘楼	20世紀後期		桁行一間、梁間一間、切妻造、桟瓦葺
16	薬師堂		正徳2年(鬼瓦刻銘)	1712	正面三間、側面三間、正面寄棟造、背面両下造、桟瓦葺
17	薬師堂境内	稻荷社(右)	19世紀中期		一間社流造、檜皮葺
18	薬師堂境内	折玉大明神(左)	昭和前期		一間社流造、見世棚造、流板葺
19	大濱神社	本殿	元禄8年(棟札・擬宝珠銘)	1695	桁行三間、梁間二間、切妻造、向拝一間、檜皮葺
20		仁王堂(県指定)	鎌倉時代前期		桁行五間、梁間五間、入母屋造、茅葺、背面下屋庇付、鉄板葺
21		道祖神社	明治前期		一間社流造、桟瓦葺
22		愛宕神社	19世紀中期		一間社流造、檜皮葺
23		五位田神社	明治33年頃(記録)	1899	一間社流造、見世棚造、板葺
24		百大夫神社	明治後期		一間社流造、見世棚造、板葺
25		天満宮	明治25年頃(記録)	1892	一間社流造、見世棚造、板葺
26		稻荷社	明治32年頃(記録)	1892	一間社流造、見世棚造、板葺
27	文殊堂	厨子	19世紀中期	1899	一間社流造、見世棚造、鉄板葺
28	陣屋稻荷		19世紀中期		一間社切妻造、向拝一間、桟瓦葺
29	守国大明神		19世紀中期		一間社流造、檜皮葺
30	金刀比羅神社		19世紀中期		一間社流造、檜皮葺
31	望湖神社	本殿(県指定)	元禄4年(棟札)	1691	三間社流造、向拝一間、銅板葺
32		拝殿	明治		桁行三間、梁間三間、切妻造、桟瓦葺
33	織峰三神社	本殿	宝永2年(社伝)	1705	三間社流造、向拝一間、銅板葺

(3) 寺社建築の特質

【寺院】

妙楽寺は真宗寺院が5カ寺集合している点で極めて特異である（写真77）。滋賀県下の集落では東西両派の真宗寺院が並立する場合はしばしば見られるが、同じ派の真宗寺院が集合している例はない。極めて特異であり、むしろ中世の顕密寺院で、本堂を中心として、周囲に院家が集合している形態に類似する。妙楽寺が天台系寺院から転派した歴史を想定させるが、そうであれば転派してもなお院家の集合形態を保ち続けた要因が謎として残る。この妙楽寺を中心として伊庭の集落が営まれているので、伊庭集落そのものを特徴づける極めて重要な宗教施設と言えよう。



写真77 妙楽寺境内の景観

【神社】

望湖神社と繖峰三神社の本殿はほぼ同形式の、向拝の付いた前室付流造本殿であり、意匠的には彩色や彫刻などの点で前者が手が込んでいる。しかし規模は後者が格段に大きい。望湖神社は規模が小さく、三間社ではあるが切妻造向拝付で、絵様の意匠や浮彫彫刻の壁など独自性がある。仁王堂は鎌倉時代まで遡る異例の古建築である。五間佛堂が茅葺の村堂のような形態に改変され、神輿蔵や神事の場として長らく使い続けられてきた。かつてあったであろう中世寺院が変容し、大濱神社の重要な施設として使われ続けてきた、その伝統が重層した貴重な建築である。

そしてこれら3社は、伊庭集落の結合の紐帶となる伊庭祭りの中核的施設であり、3社に伝えられてきた有形と無形の歴史的遺産が伊庭集落のもう1つの宗教的特質を体現している。

【堂と小社】

伊庭の堂は、形態的には村堂と呼ばれるような簡素な形態の小佛堂であるが、それを維持するのは村全体ではなく、村の一部の住人から構成される在地という組織である点で、他の地域と異なる。在地の組織は伊庭以外にも見られる。

小社も多くは在地が維持している。しかしその多くは神社の摂社となっていて、その維持基盤は表面的には見えない。

これらの宗教施設は薬師堂を除いて、いずれも19世紀以降に建てられたもので、とりわけ堂の多くが戦後になって建て替えられている。伝統的な木造建築の形式ではあるが、近世以来の伊庭の景観の中で傑出した評価を与えられるわけではない。

(4) 寺社建築各個解説

1) 伊庭集落の寺社建築

1 妙楽寺　浄土真宗本願寺派

妙楽寺は伊庭の集落のほぼ中央部に位置する規模の大きな浄土真宗本願寺派の寺院である。寺伝では7世紀に藤原不比等との関わりの中で創建されたと伝えているが、確実なことは不明である。仏光寺派第7世了源上人の舎弟了念上人が中興開基とされている。了念が正慶元年（1332）に伊庭の天台寺院妙楽寺に至り、これを再興した。妙楽寺には法光寺派・源通寺・淨福寺・誓教寺が属していたという。江戸時代になって、元文4年（1739）、仏光寺派から本願寺派に転じた。毎年8月には門徒が所持する絵系図を妙楽寺に持ち寄り礼拝する絵系図参りが行われており、仏光寺派であった伝統が長く息づいている。（藤葉性信『妙楽寺史』）

境内は東西約130m、南北約70mの範囲を占め、東南端に山門を開き、北西端近くに本堂が建つ。この間の参道沿いに、北側には源通寺・誓教寺・妙楽寺庫裏が並び、南側は鐘楼・淨福寺・法光寺・高祖聖人分骨堂などが建ち並ぶ。真宗寺院の境内に塔頭寺院の如き寺が建ち並ぶ状況は極めて珍しく（図40・41）、中世に天台系寺院であった時代の院家、あるいは末寺の在り方を継承しているのではないかと推定される。

文政2年（1819）の地震によって、淨福寺を除いて境内建物が倒壊したが、その後、復興が図られた。

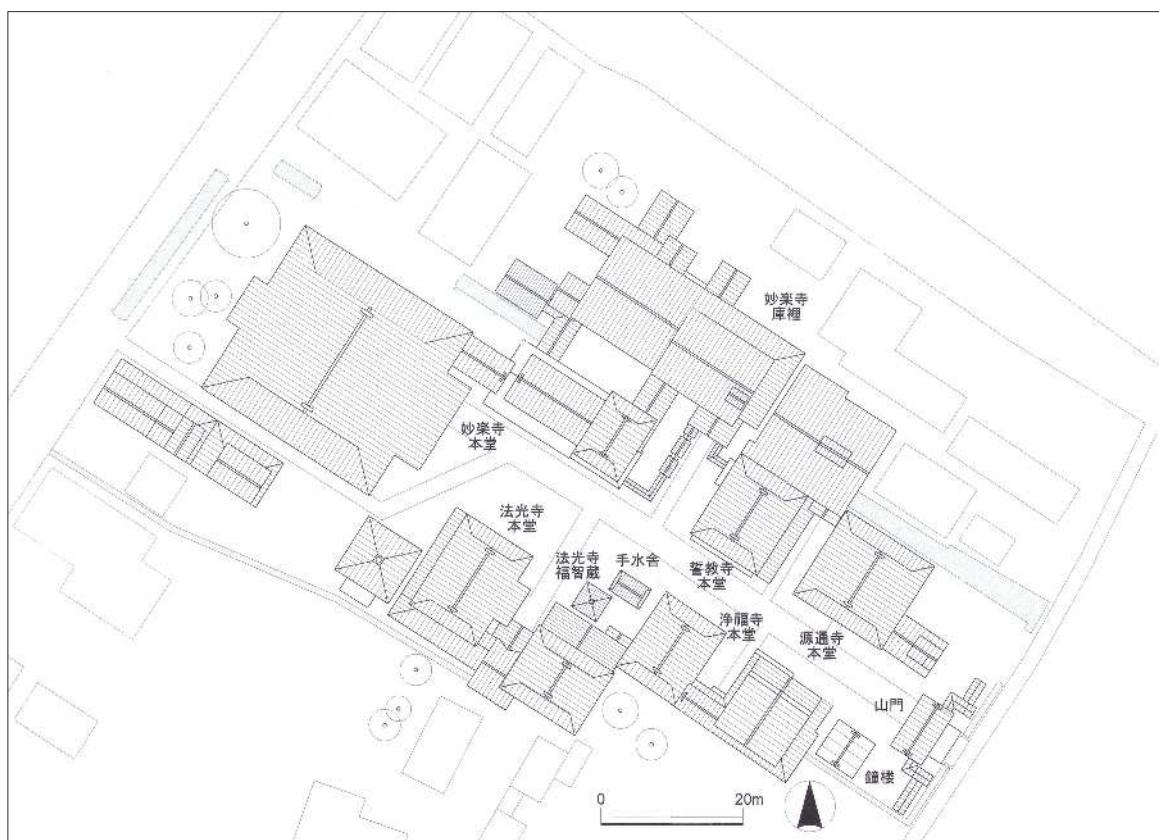


図40 妙楽寺配置図 1/1000



図41 妙楽寺境内連続立面図

i 妙楽寺山門 一間薬医門 切妻造 本瓦葺

享和3年(1803 獅子口刻銘)

親柱円柱 跛放 椅 冠木 女梁 男梁 男梁先端に虹梁形桁 三斗枠肘木実肘木 中備平三斗
 実肘木・拳鼻 控柱角柱 虹梁形頭貫 三斗枠肘木実肘木 中備平三斗実肘木・拳鼻 親柱控柱
 間は腰貫・飛貫を入れ男梁は控柱の頭貫として納める 妻飾虹梁大瓶束笈形 二軒繁垂木

境内南東端に開く大規模な薬医門である(図

42 写真78～82)。正面は男梁で持ち出した虹梁形桁の上に組物と中備を並べ、それらの間は獅子の彫刻で埋める。控柱上も虹梁形頭貫の上に正面と同様の組物・彫刻を並べる。棟通りには、妻飾虹梁間を桁行の虹梁で繋いで、その中央に龍をあしらった蟇股を置いて棟木を受ける。妻飾には笈形として鯉の瀧登りの彫刻を置く。

拳鼻には浮彫の絵様を施し、虹梁絵様には渦から延びる菖蒲の花としていて、大工の腕の冴えが目立つ。彫刻装飾を多く用いて豊かに飾られた上質の建物である。

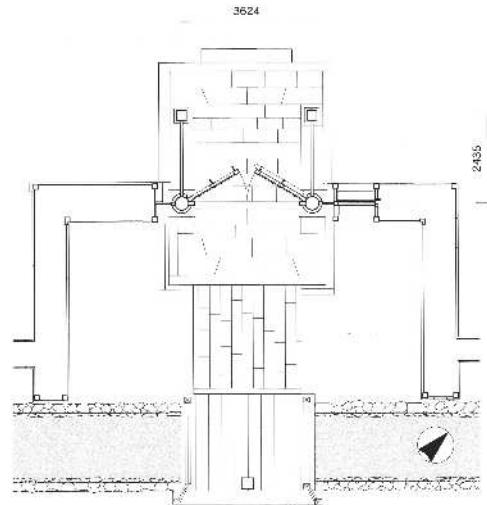


図42 妙楽寺山門平面図 1/200



写真78 妙楽寺山門正面



写真79 妙楽寺山門背面



写真80 妙楽寺山門内部見上げ



写真81 妙楽寺山門正面見上げ

平成 15 年の屋根葺替で下ろされた獅子口の刻銘から、享和 3 年（1803）に八幡や伊庭村の瓦師の手で作られていることがわかる。従って享和 3 年頃に上棟した建物と考えられる。つまり文政の地震の被害は受けていないことになる。



写真82 妙楽寺山門妻飾

ii 妙楽寺本堂 桁行20.2メートル 梁間21.1メートル 入母屋造 向拝三間 本瓦葺
背面下屋庇付 栈瓦葺

天保5(1834 棟札)

広縁通り角柱 桁 虹梁形頭貫 木鼻 台輪 木鼻 平三斗 実肘木・拳鼻 中備平三斗実肘木・
拳鼻 入り側柱との間は繫海老虹梁 入側角柱 切目長押 内法長押 虹梁形飛貫 頭貫 木鼻
台輪 留め 出組 実肘木・拳鼻 中備蟇股 二軒繁垂木 妻飾二重虹梁大瓶束 向拝角柱 虹
梁形頭貫 木鼻 三斗枠肘木実肘木・手挟 二軒繁垂木

本堂は寺地の北西端に立地し、堂々たる威容を誇っており、その姿は伊庭周辺の田園地帯からも目立つ存在となっている（図43 写真83～89 内陣欠）。正・側面の3方に広縁と落縁を設けた、最も格の高い形式の真宗本堂である。軒周囲も内外陣境から後方を塗籠とする正式な手法が用いられている。

側周囲では、入側の柱筋に虹梁形飛貫を入れて笈形付の大瓶束を据え、内法長押との間には波濤の彫刻の欄間を入れ、隅組物には龍頭の尾垂木を入れるなど、相当華やかに飾る。ただし内部では大瓶束も欄間彫刻も省略されている。また立て上せ柱なので、外部で台輪・組物を重ねていても、内部では柱がそのまま天井裏まで突き抜け、組物は挿肘木となっている。

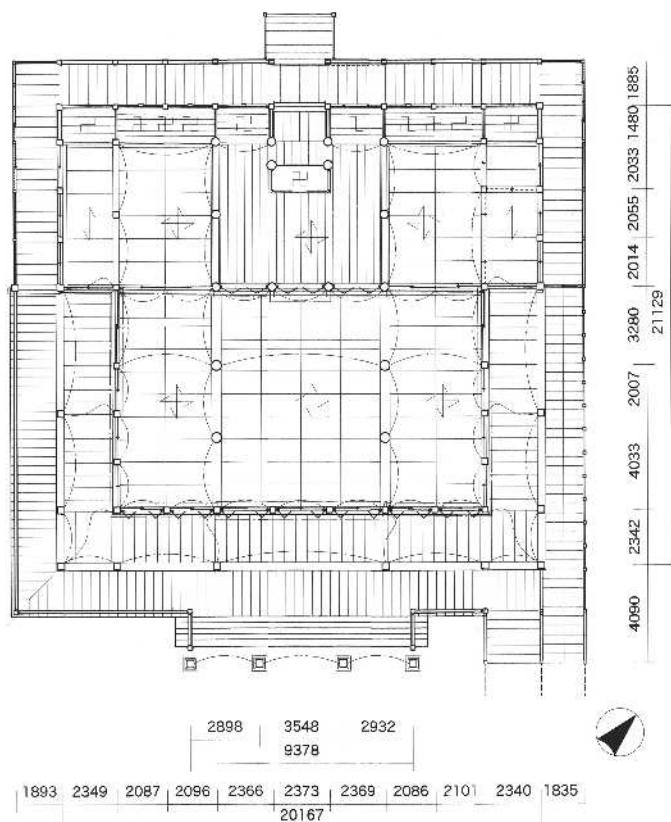


図43 妙楽寺本堂平面 1/300



写真83 妙楽寺本堂全景



写真84 妙楽寺本堂妻飾

広い外陣には4本の円柱を立てて縦横に虹梁で繋ぎ、虹梁上には幕股を置いて、二十四孝や神仙の彫刻を付す。内外陣境の柱・虹梁・組物等は金箔や彩色を施し更に華麗に飾る。内陣は中央後方に2本の円柱を立てて前に須弥壇を設ける、いわゆる出仏壇形式である。内陣の両脇に余間、さらにその外の広縁部分を室内に取り込んでさやの間を設ける。内陣と余間境の柱筋では、虹梁形飛貫上の大瓶束に繰形付きの肘木を付けて出組の形式として天井廻縁を受ける珍しい形式を採っている。

小屋組に棟札が置かれていて、天保5年に高木但馬の弟子で美濃石津郡の大工伝兵衛が建てたことが判明する。外陣の賽銭箱は天保6年の銘が、南余間と外陣境の欄間に天保10年の刻銘が、正面高欄の擬宝珠に安政5年（1858）の刻銘があり、上棟の後、造作の完成までには30年程かかっていることがわかる。本堂の虹梁絵様は蒲生郡大工組頭高木家の絵様と共通しており、棟札の記述も頷くことができる。

幕末に建てられた真宗本堂としては大規模で上質な建物である。



写真85 妙楽寺本堂正面

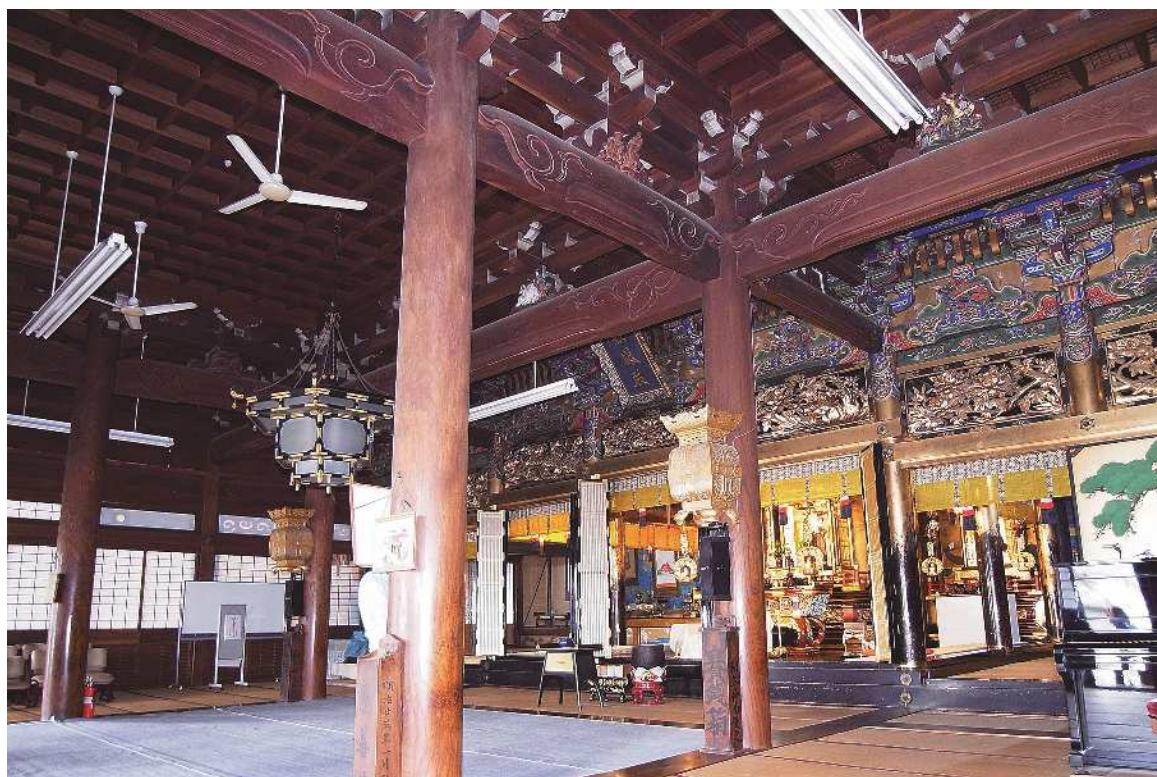


写真86 妙楽寺本堂外陣



写真87 妙楽寺本堂内陣

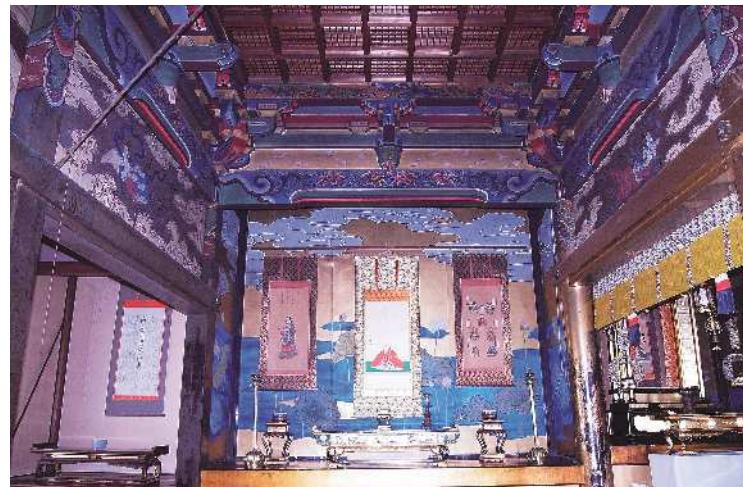


写真88 妙楽寺本堂余間



写真89 妙楽寺本堂外陣細部

iii 妙楽寺庫裏 柱行8.9メートル 梁間8.0メートル 切妻造 東・北面下屋庇付 栓瓦葺
正面切妻造 妻入 栓瓦葺 玄関付

19世紀中期

庫裏は本堂の東に建つ。土間と畳敷の居室部からなる建物であるが、西側は戦後に改築されており、古いのは土間周りと土間に接する1列3室のみである（図44・45 写真90～93）。土間では縦横に梁を架けて東・貫で固めた豪快な架構を見せており。部屋部分は柱間をせいの高い差鴨居で繋いで、大引天井を貼っている。幕末に建てられたものであろう。

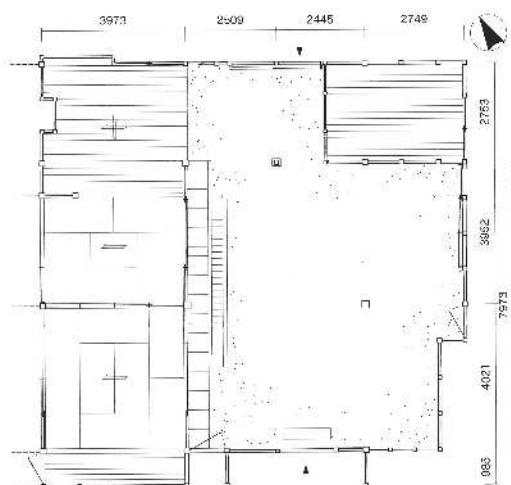


図44 妙楽寺庫裏部分平面図

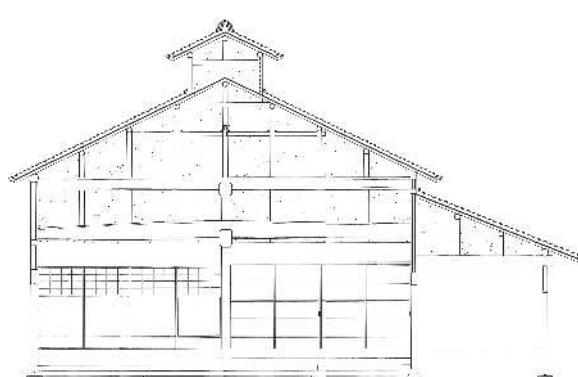


図45 妙楽寺庫裏断面図 1/1500



写真90 妙楽寺庫裏外観



写真91 妙楽寺庫裏土間



写真92 妙楽寺庫裏小屋組



写真93 妙楽寺庫裏室内

iv 妙楽寺鐘楼 桁行一間 梁間一間 切妻造 栈瓦葺

大正5年(1916 寺蔵記録)

円柱 腰貫 飛貫 頭貫 木鼻 台輪 木鼻 三斗枠肘木実肘木 中備平三斗実肘木・拳鼻

妻飾虹梁大瓶束 二軒繁垂木

鐘楼は高い石垣の上に建つ（図46 写真94～97）。四方転びの柱を貫・台輪で繋ぎ、三斗を組んだ定型的な鐘楼である。妻の虹梁の上に桁行に梁を架けて鐘を吊り、中央には大瓶束を立てて棟木を受ける。

虹梁絵様から見て本堂や山門よりかなり降って建てられたとみられる。「当山系図由来」（『妙楽寺史』所収）には大正5年（1916）11月に「梵鐘堂寄進完成落慶法要」との書き入れがあり、これが今の鐘楼の建立年代を示すとみてよい。近世以来の伝統技術や意匠を継承する建物である。

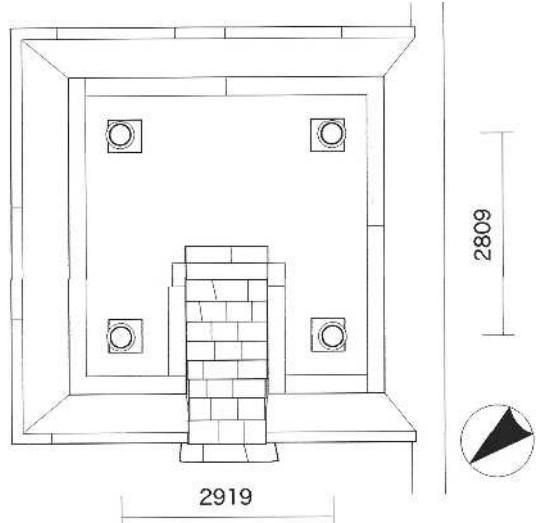


図46 妙楽寺鐘楼平面図 1/100



写真94 妙楽寺鐘楼全景



写真95 妙楽寺鐘楼妻



写真96 妙楽寺鐘楼見上げ



写真97 妙楽寺鐘楼細部

v 妙楽寺手水舎 柏行一間 梁間一間 切妻造 栓瓦葺

天保9年頃(1838 手水鉢刻銘)

角柱 虹梁形頭貫 木鼻 大斗絵様肘木 中備幕股 妻飾虹梁幕股 一軒疎垂木

手水舎は法光寺経蔵の傍に建つ（図47 写真98～100）。四方転びの柱を立てて虹梁形頭貫で繋ぐだけの簡素な構造の建物である。内部に大きな石製手水鉢を据える。この刻銘の天保9年（1838）が建物の建設の年代と一致するとみてよい。本堂に引き続いて建てられたものであろう。妻飾裏面に昭和47年の修理棟札があり、垂木より上は、その際取り替えられた材であろう。

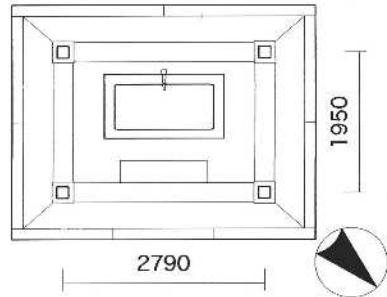


図47 妙楽寺手水舎 平面図 1/100



写真98 妙楽寺手水舎全景



写真99 妙楽寺手水舎妻



写真100 妙楽寺手水舎内部

vi 源通寺本堂 正面8.3メートル 側面8.8メートル 入母屋造 妻入 栈瓦葺

19世紀中期

角柱 切目長押 内法長押 虹梁形飛貫 組物・中備なし 一軒疎垂木 妻飾虹梁大瓶束

源通寺は山門を入ってすぐの北東にある(図48 写真101~103)。本堂は境内で唯一、妻入の真宗本堂である。正面の飛貫を虹梁形として、複雑な菊水と菖蒲の絵様を彫って、正面を飾る意識が強い。

正・側面には低い縁を設け、外陣には内部に柱を立てず、虹梁も架げず、棹縁天井の広い空間とする。内外陣境から後方は縁の部分も堂内に取り込んで、3分割して内陣と余間を設ける。内陣にも組物は用いず、内外陣境外陣側のみ二手先組物で棹縁を受けて飾る。

外観からは真宗本堂とは思えない構えであるが、内部は真宗本堂の定型を守っている。建立年代は様式からみて幕末であろう。

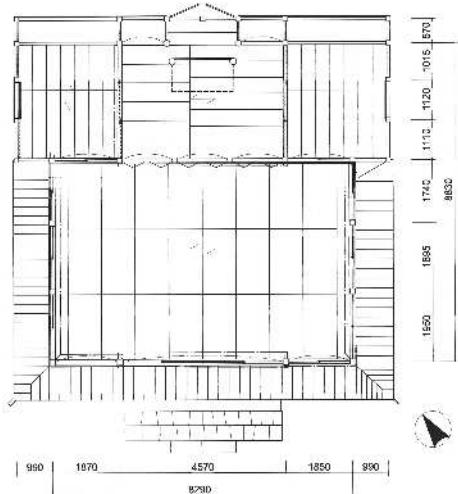


図48 源通寺本堂平図面 1/200



写真101 源通寺本堂正面



写真102 源通寺本堂外陣



写真103 源通寺本堂細部

vii 浄福寺本堂 柱行9.1メートル 梁間7.5メートル 入母屋造 背面軒下張出付 栈瓦葺
東側面下屋庇付 栈瓦葺 西面下屋庇付 鉄板葺

寛政5年(1793) 棟札

角柱 切目長押 内法長押 飛貫 正面中央間のみ虹梁形 組物なし 飛貫上中備平三斗実肘
木・拳鼻 一軒疎垂木 妻飾虹梁大瓶束

浄福寺は参道の南の西寄りにある(図49 写真104~107)。庫裏と本堂が狭い庭を
挟んで、平行して建つ。

本堂は規模の小さな真宗本堂である。
外陣は間口が畠で4間半分あり、南北に
下屋庇を延ばしてもう1間ずつ広めている。
奥行は2間半で、外陣内部に柱を立
てず、正面柱から内陣両隅の柱に2本の
虹梁を架けている。内陣も奥行は2間弱
しかなく、北余間は下屋側に半間張り出
して広さを確保している。奥行がないため
内陣は三並仏壇で、中央間は須弥壇を
張り出し、両脇間には火灯形虹梁を入れ
て飾っている。

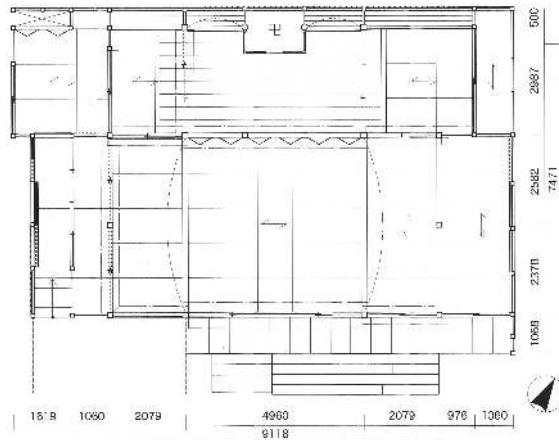


図49 浄福寺本堂平面図 1/200



写真104 浄福寺本堂全景



写真105 淨福寺本堂外陣



写真106 淨福寺本堂内陣正面



写真107 淨福寺本堂内陣

以上のように平面形式としては古風であるが、絵様などから見て18世紀後期の建立である。棟札が保管されており、寛政5年（1793）の建立は明らかで、大棟南端の鬼瓦にも寛政5年の刻銘がある。つまり文政2年（1819）の地震では倒壊することなく生き残った建物ということになる。

viii 誓教寺本堂 桁行13.7メートル 梁間9.0メートル 片側入母屋造 片側切妻造 栈瓦葺
正面下屋庇付 栈瓦葺 側面下屋庇付 鉄板葺 背面下屋庇付 栈瓦葺

明治5年(1872) 鬼瓦刻銘)

角柱 切目長押 内法長押 正面中央間のみ虹梁形内法貫 組物・中備なし 一軒繁垂木
妻飾虹梁束

誓教寺は妙楽寺庫裏と源通寺の間にある(図50 写真108~111)。本堂は外觀の上では庫裏と区別のつかない形態の建物である。南側桁行約10mが本堂で、その北は2部屋があって、さらに北に部屋が繋がっている。つまり庫裏と本堂が一体となった建物である。本堂部分は広い外陣と、その後方の、内陣・余間に区分された部分からなり、外陣には2本の虹梁を架けて、蟇股で天井を受けている。つまり真宗本堂の定型には則った平面形式である。内外陣境の柱筋は虹梁形頭貫・台輪で繋ぎ、出三斗の組物を据えて飾る。内陣は三並仏壇である。

虹梁絵様は端正であるが、部材の表面は極めて美しく、建立年代の新しいことをうかがわせている。本堂前に置かれた鬼瓦に明治5年の刻銘があり、これがこの本堂の建立年代を示すと考えられる。堂内に「神崎郡伊庭村誓教寺再興建立次第」と題する木札(写真112)があり、享保5年(1720)の紀年があるが、これは前身堂の記録であろう。

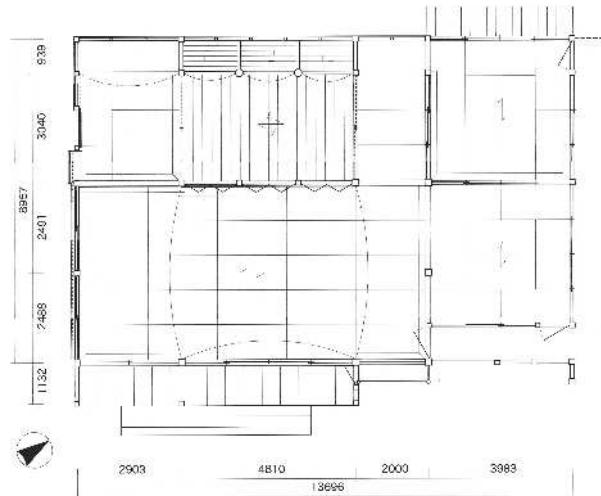


図50 誓教寺本堂平面図 1/200



写真108 誓教寺本堂全景

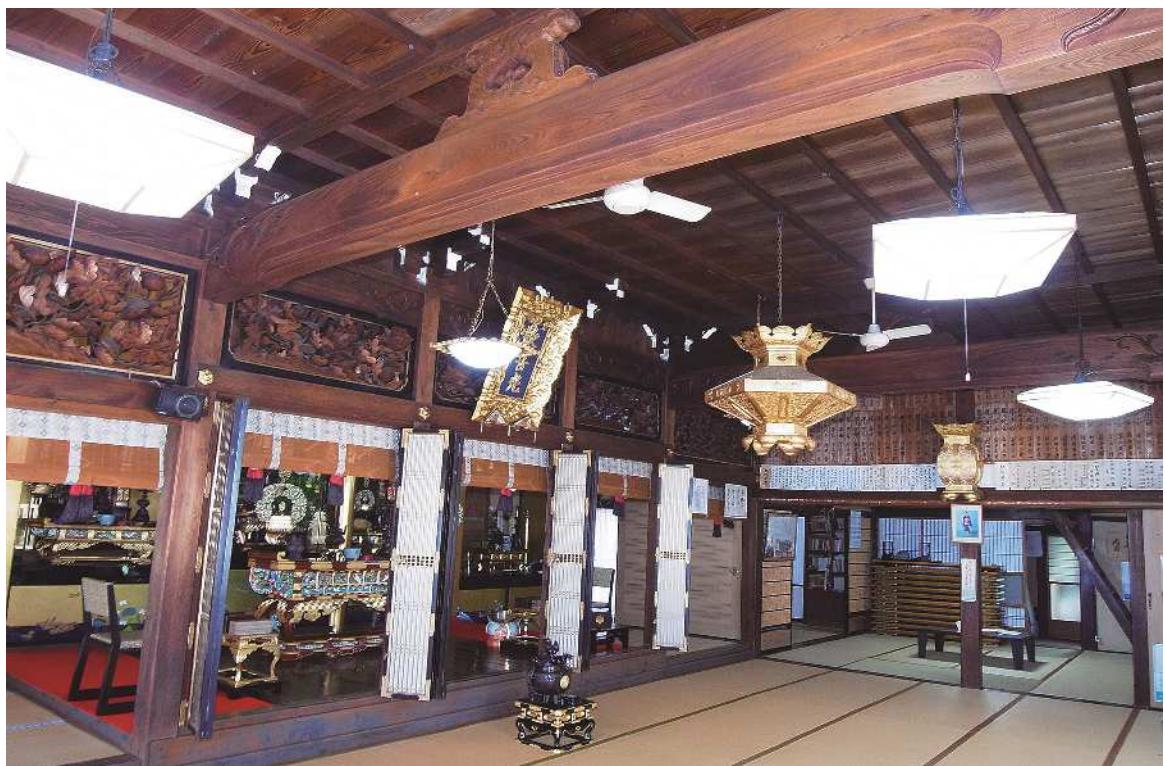


写真109 誓教寺本堂外陣



写真110 誓教寺本堂内陣正面



写真111 誓教寺本堂内陣



写真112 誓教寺本堂前身堂造営木札

ix 法光寺本堂 柏行10.2メートル 梁間11.3メートル 入母屋造 向拝一間 本瓦葺

文政5年(1822 棟札)

角柱 切目長押 内法長押 正面中央間のみ虹梁形内法貫 飛貫 組物・中備なし 一軒繁垂木

妻飾虹梁大瓶束 向拝角柱 虹梁形頭貫 木鼻 連三斗実肘木 手挟 中備龍彫刻 二軒繁垂木

法光寺は妙楽寺本堂のすぐ南西に建つ寺である（図51 写真113～116）。本堂は小規模な真宗本堂である。境内では妙楽寺本堂以外で唯一向拝を備える。正面・北側面にのみ縁を設け、外陣は桁行が畠で5間、梁間が3間あり、内部に2本の柱を立てて、桁行・梁行に虹梁を架ける。後方が内陣と余間で、余間の間口は南が一間、北が一間半で、左右非対称の平面となっている。内外陣境の柱筋は内法長押・虹梁形頭貫を入れて台輪で繋ぎ、出組組物を組んで天井を受けるので、かなり派手に飾られている。

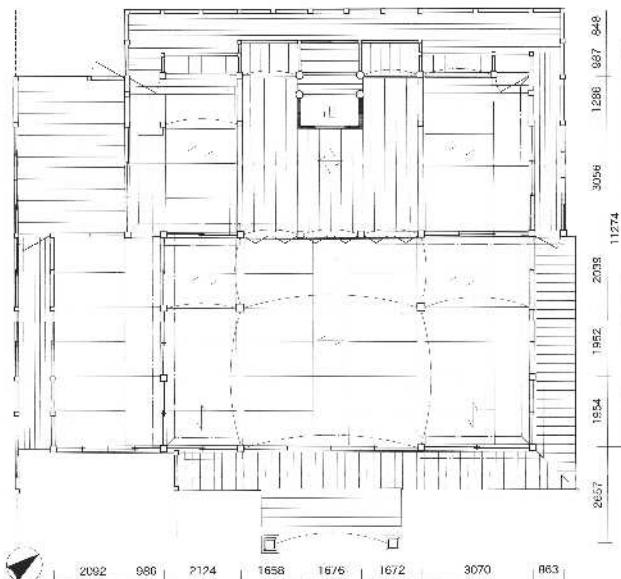


図51 法光寺本堂平面図 1/200



写真113 法光寺本堂全景

内陣・余間の奥行は3間弱あるが、これは改修によって1間弱拡張されている。内陣・余間境の中程の柱が本来の内陣・余間の仏壇の前面の柱筋であり、その後方に仏壇が設けられていた。内陣も同じ柱筋で前は格天井、後ろは鏡天井となっていて、この改修の痕跡である。おそらく当初は三並仏壇であったと考えられる。

棟札（写真117、118）を所蔵しており、能登川の大工岡田源兵衛の手で文政5年（1822）、つまり地震の3年後に再建されたことが判明する。上記改修は嘉永の御遠忌に合わせたものではなかろうか。



写真114 法光寺本堂外陣



写真115 法光寺本堂内陣



写真116 法光寺本堂余間



写真117 法光寺本堂棟札(表)



写真118 法光寺本堂棟札(裏)

x 法光寺福智藏 正面一間 側面一間 宝行造 栈瓦葺

明治27年(1894 小屋梁墨書)

円柱 飛貫 舟肘木 中備なし 一軒繁垂木

福智藏は法光寺庫裏の北に接して建つ(図52 写真119～122)。石垣を組んで切石の土台を置いて、円柱を立て、簡素な構造で造られている。全体に軒まで漆喰で塗り籠められて、土蔵風の建物である。北面に觀音開きの扉を設ける。

内部は正面・側面とも三間に割って角柱を立て、これで桁を受けており、この部分が本当の建物の構造体ということになる。円柱の舟肘木を載せた外見は、あくまでも見せかけにすぎない。内部には後方に寄せて壇を作り、その上に棚を造り付けて経典を安置する。

小屋組は前後方向に梁を架けて、中央に心束を立て、化粧隅木を心束に枘差しとする。隅木上に短い束を立てて、桁を廻し、野垂木を受ける。

前後方向の梁の下面に墨書があって明治27年(1894)に伊庭の小島孝治が建てたことが知られる。

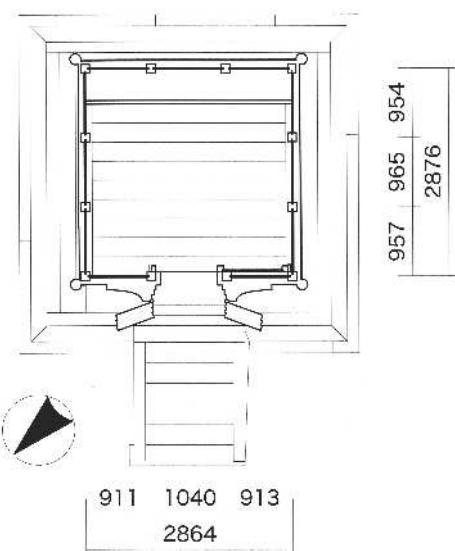


図52 法光寺福智藏 平面図 1/100



写真119 法光寺福智藏全景



写真120 法光寺福智藏内部



写真121 法光寺福智藏正面



写真122 法光寺福智藏小屋組と墨書

2. 正巌寺 真宗仏光寺派

妙楽寺は元文4年（1739）に仏光寺派から本願寺派に転じた。しかし伊庭・能登川・須田の門徒は仏光寺派に留まることを望み、明和2年（1765）に伊庭に仏光寺派の掛所が設けられた。本山からは明和3年に木造の本尊が下され、安永元年（1772）に正巌寺の寺号が与えられた（『能登川の歴史』第2巻）。これが現在の正巌寺で、こうした歴史からこの寺にも絵系図が残されている。明治6年に茅葺の本堂が焼失し、明治27年に旧浅井町の勝伝寺の古材で再建したと伝える（境内の「平成の大修復 記念碑」による）。

i 表門 一間薬医門 切妻造 本瓦葺

19世紀中期

表門は（図53 写真123～125）、親柱筋に冠木を載せ、控柱とは2段の貫と男梁で繋ぎ、組物は組まず、妻飾は男梁に束を立てるだけという、至って簡素な薬医門である。垂木は反りを持たせてこの種の門の定型に則っている。

本堂と共に勝伝寺より移築されたと伝え、風蝕から幕末の建立と考えられる。

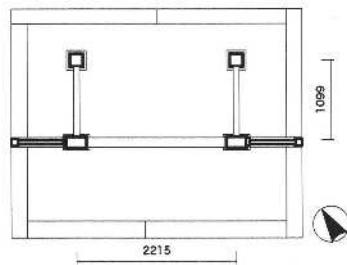


図53 正巌寺表門平面図 1/100



写真123 正巌寺表門正面



写真124 正巌寺表門妻



写真125 正巌寺表門見上げ

ii 本堂 桁行11.5メートル 梁間12.7メートル 入母屋造 向拝一間 本瓦葺
側・背面下屋庇付 栈瓦葺

明治27年（1894）寺伝

角柱 切目長押 内法長押 飛貫 舟肘木 中備なし 一軒繁垂木 妻飾虹梁大瓶束 向拝角柱
虹梁形頭貫 木鼻 連三斗実肘木
手挟 中備龍彫刻 二軒繁垂木

本堂は正・側面に縁を巡らせた小規模な真宗本堂である（図54 写真126～129）。矢来の柱筋から後方は縁の部分を取り込んでいる。外陣には2本の円柱を立てて縦横に虹梁で繋ぐ。内外陣境の円柱は虹梁形飛貫で繋ぎ、立て上せ柱を見せたまま挿肘木を組む。内陣は出仏壇形式である。なお側・背面は建立後の改造で縁を更に堂内に取り込み、下屋を付けて拡張する等の手が加えられている。

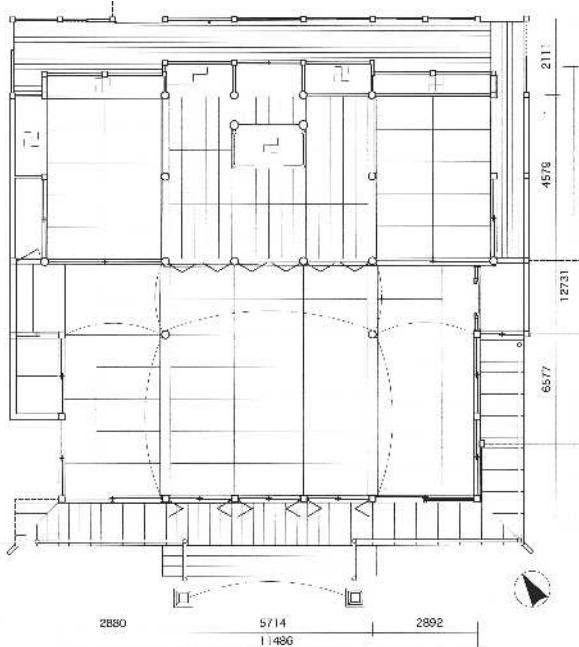


図54 正厳寺本堂平面図 1/100



写真126 正厳寺本堂全景



写真127 正厳寺本堂外陣



写真128 正厳寺本堂内陣

本堂は、前述の如く、古い堂の部材を使って明治に再建されたと伝えられ、実際、柱に古い枘の埋木が見られる。特に矢来柱筋の桁行虹梁3本は18世紀中期の流麗な絵様が彫られ、これが明らかに前身堂の部材と知られる。その他の虹梁は絵様がこれとは異なり明治の部材と考えてよい。寺蔵の棟札は「紀元二千五百四十九年」との紀年があり、これは皇紀であって明治22年（1889）に該当する。この年に上棟され、その時の棟梁は著名な常喜村の宮部太平衛であった。近年の屋根葺替で下ろされた隅蓋瓦にも明治22年の紀年があるので、22年にはほぼ完成していたものと考えられる。仏光寺派門徒の拠点となってきた重要な寺院である。

なお鐘楼は近年の修理で柱がすべて取り替えられてるが、柱頂部より上は古い材料がそのまま残されている（写真130）。幕末の建立と考えられる。棟札があるが文字は殆ど消えている。



写真129 正厳寺本堂余間



写真130 正厳寺鐘樓

3. 妙金剛寺　浄土宗

妙金剛寺は伊庭集落の南東のはずれ、大濱神社に隣接して立地する。古く天台系寺院だったようであるが、文明2年（1471）に浄土宗に転じたとされている。大濱神社仁王堂に隣接し、当寺との関連を想定させる（図55）。

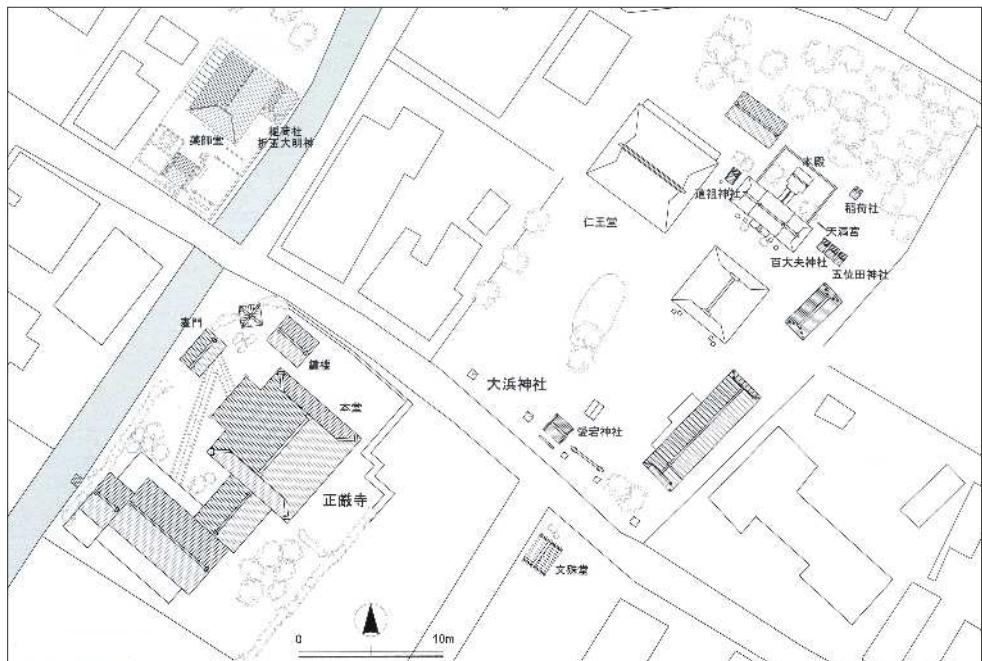


図55 妙金剛寺・大濱神社・薬師堂配置図 1/500

i 表門 一間薬医門 切妻造 本瓦葺

19世紀後期

親柱円柱 石製蹴放 椅 冠木 男梁
女梁 控柱角柱 腰貫 内法貫 大斗
妻飾男梁上臺股 一軒繁垂木小舞裏

表門は小規模な薬医門である（図56 写真131～132）。男梁上で直接桁を受け、組物等を殆ど用いない、簡潔な建物である。明治頃に建てられたものであろう。



写真131 妙金剛寺表門全景

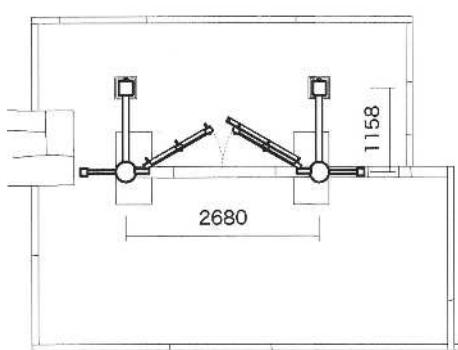


図56 妙金剛寺表門平面図 1/100



写真132 妙金剛寺表門軒

ii 本堂 桁行11.2メートル 梁間10.2メートル 入母屋造 向拝一間 栈瓦葺
側・背面張出付

寛政11年(1799 獅子口刻銘)

角柱 切目長押 内法長押 飛貫 舟肘木 中備なし 一軒繁垂木 妻飾虹梁大瓶束 向拝角柱
虹梁形頭貫 木鼻 連三斗実肘木 手挾 中備龍彫刻 二軒繁垂木

本堂は比較的規模の小さい浄土宗本堂である(図57 写真133~137)。堂内後方寄りに4本の太い柱を立てて、それらの正・側面3方を結界で仕切って、内部の床を1段高くして内陣とする。その前方は外陣、内陣両脇は脇陣、脇陣後方に位牌壇を設ける。内陣後方に来迎柱を立てて須弥壇を設ける。凸字型に結界を設けた浄土宗本堂の典型的な平面構成となる。

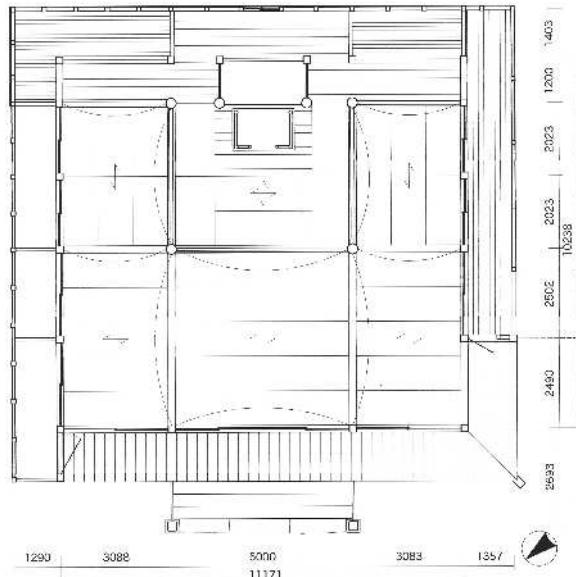


図57 妙金剛寺本堂平面図 1/200



写真133 妙金剛寺本堂全景

外陣に2本の虹梁を架け、内陣正・側面、脇陣正・背面にも虹梁を架けて、柱を繋ぐ。内陣正面の大虹梁上には、2本の大瓶束を立てて、桁行に台輪を通し、平三斗と幕股で正面を強調する。虹梁絵様の意匠はかなり華やかである。

近年の屋根葺替で取り替えられた5点の獅子口の刻銘から、寛政11年（1799）に建てられたことが判明する。



写真134 妙金剛寺本堂妻飾



写真135 妙金剛寺本堂外陣



写真136 妙金剛寺本堂内陣後方



写真137 妙金剛寺本堂内陣

iii 鐘樓 柁行一間 梁間一間 切妻造 栈瓦葺

20世紀後期

円柱 腰貫 飛貫 頭貫 木鼻 大斗絵様肘木 中備なし 一軒疎垂木 妻飾虹梁大瓶束

鐘楼は石垣の上に建つ（図58 写真138～140）。四方転びの柱を貫で固めた定型的な鐘楼である。

牛梁の下面に棟札が打ち付けてあるが、紀年は見えない。しかし内容から考えても昭和後半の再建とみてよいであろう。



写真138 妙金剛寺鐘楼全景

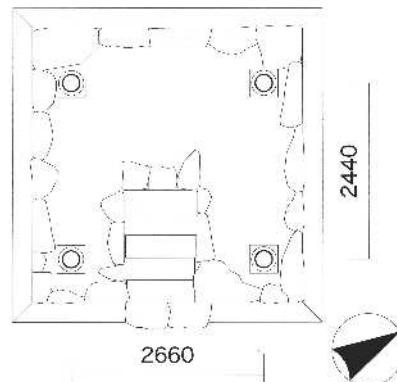


図58 妙金剛寺鐘楼平面図 1/100



写真139 妙金剛寺鐘楼妻



写真140 妙金剛寺鐘楼見上げ

4. 薬師堂

大濱神社や妙金剛寺に隣接して、水路の際に薬師堂の境内がある。その境内に覆屋に稻荷・折玉の2明神が祀られている。推古天皇の時代に繖山に聖徳太子作の靈像を祀り真泉寺として靈験あらたかであったが、永禄年中（1558～70年）衰微し、その本尊を祀ったのがこの薬師堂だと伝える（堂内に貼られた印刷物「本尊略縁記」）。

i 薬師堂 正面三間 側面三間 正面寄棟造 背面両下造 栈瓦葺

正徳2年（1712）鬼瓦刻銘）

角柱 切目長押 内法長押 舟肘木 中備正面中央間束 一軒繁垂木

薬師堂は小規模な三間堂である（図59 写真141～146）。屋根は正面から見ると寄棟造であるが、中央に鬼瓦が見えて、背面は両下造の特異な形態である。これは後述の改造と関わる。



写真141 薬師堂境内

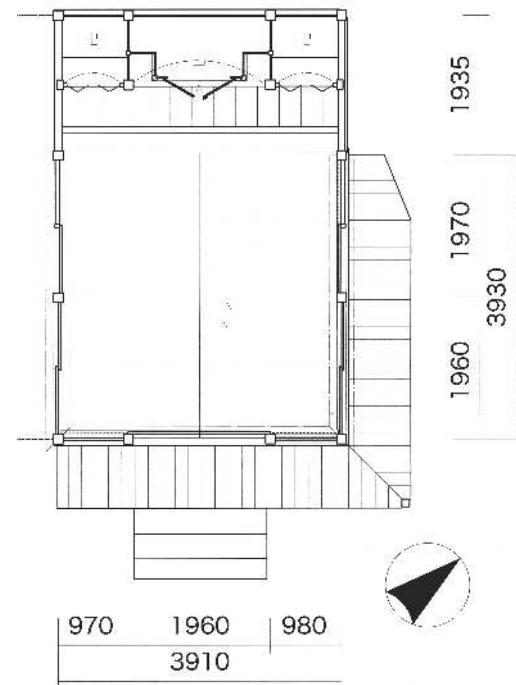


図59 薬師堂平面図 1/100



写真142 薬師堂全景



写真143 薬師堂内部

軸部は簡素で角柱に舟肘木を載せるだけであるが、この舟肘木は左右によく延びて、美しい形状である。正面中央間は板戸引き分け、両脇間は板壁、側面第1間は板戸引違、第2間は片引板戸、第3間と背面は土壁である。

内部は奥行二間分の広い空間で、第3間に須弥壇を造り付け、3間に割って板扉を設けて厨子とする。特に中央間は向唐破風造に見せかけて、柱上に三斗を組み、妻飾は虹梁大瓶束、中備に墓股を置いた塗の上質な構えとなっている。

以上のような構えは、背面一間を拡張した結果であることが、柱などの痕跡で明瞭に残されている。まず前から3本目の柱には板決と仏壇框の埋木があり、柱の背面側は風蝕している。またこの柱位置で側面内法長押には留めの仕口が残り、この柱筋で長押が廻って、建物はこの柱筋で終わっていた事がわかる。背面側の一間は増築ということになる。当初は奥行二間の規模で、おそらく背面側も寄棟造の屋根だったものを、一間分拡張して両下造に改造したものであろう。仏壇上の中央間の厨子は建立当初のものとみてよく、現状で内法の虹梁などは19世紀に入ってのものとみられる。



写真144 薬師堂内部

また前から 2 本目の柱には敷居・鴨居の当たりがあり、桁行に差鴨居が通り、天井も区切られている。当初は正面側一間の外陣と、その奥の内陣の 2 部屋に分けられていた事を示す。ただし差鴨居は当初材ではなくここにも複雑な改造過程があるようである。

降棟の鬼瓦に正徳 2 年（1712）の刻銘があって、これが薬師堂の建立の時期を示し、現状の須弥壇中央の南側の柱に打ち付けた祈禱札の天保 13 年（1842）の紀年が、背面の拡張と須弥壇の改造の時期と推定される。

建立当初は外陣・内陣に分けていた仏堂が、19世紀中期には厨子を後方に張り出して設け、参詣の空間を拡張したことが知られる。堂内に掲げられた絵馬も正徳 2 年・享保 2 年（1717）など各時期のものがある。この堂を維持しているのは 6 軒の講中で、寅年に開帳を行うとのことである。村堂の在り方とその変遷を示していて興味深い建物である。



写真145 薬師堂須弥壇・厨子



写真146 薬師堂組物詳細

ii 稲荷社 一間社流造 檜皮葺

19世紀中期

覆屋の向かって右側の社が稻荷社である（図60 写真147～150）。高い切石積の基壇に建つ小規模な社殿である。身舎は角柱を虹梁形飛貫で繋いで木鼻を付け、舟肘木で桁を受ける。身舎は角柱を切目長押・内法長押で固めて、舟肘木を載せる。身舎3方に縁を、庇には五級の木階、浜縁・浜床を設けて、本格的である。軒は一軒疎垂木で、小社に似合わず厚い軒付の檜皮を葺いている。基壇の背面には穴があけられているが、稻荷社によく見られる狐の出入りの穴である。建物は幕末に建てられたものと考えられる。

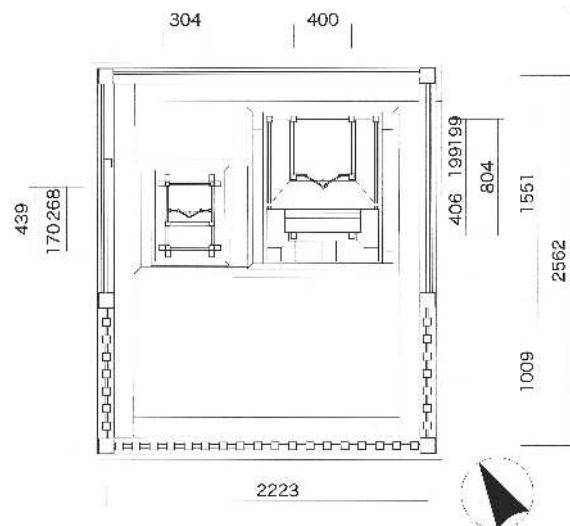


図60 稲荷社・折玉大明神平面図 1/50



写真147 稲荷社・折玉大明神覆屋



写真148 稲荷社・折玉大明神正面



写真149 稲荷社斜め正面

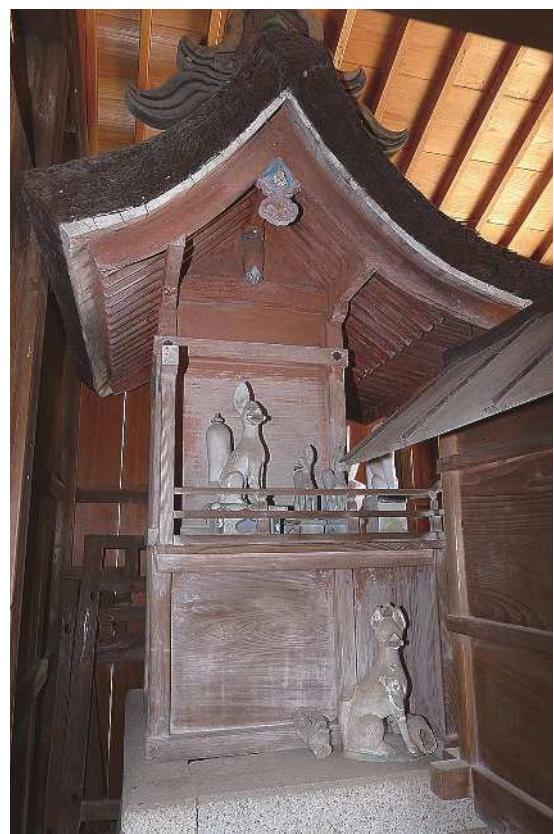


写真150 稲荷社側面

iii 折玉大明神 一間社流造 見世棚造 流板葺

昭和前期

覆屋の向かって左にある更に小規模な社殿である（写真151・152）。やはり切石製の基壇の上に、木製土台を置いて角柱を立てている。庇に虹梁形飛貫を入れる以外は組物も装飾的な部材もない簡素な建物である。近代に入って造られたものであろう。

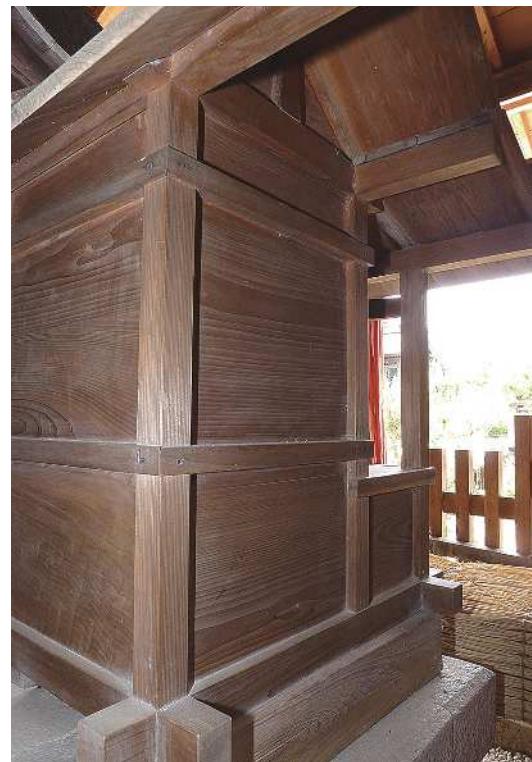


写真151 折玉大明神妻



写真152 折玉大明神全景

5、大濱神社

大濱神社は伊庭集落の南東はずれに広い社地を占める。中世後期には牛頭天王社等と称された。当社の浜村座、望湖神社の森村座、繖峰三神社の中村座・新村座の4座の宮座によって、坂下しで著名な伊庭祭りが催行され、その際、各座の神輿が当社仁王堂に参集する。伊庭周辺地域の重要な位置を占める神社である。

i 本殿 桁行三間 梁間二間 切妻造 向拝一間 檜皮葺

元禄8年(1695 棟札・擬宝珠銘)

円柱 切目長押 腰長押 内法長押 頭貫 木鼻 出組実肘木・拳鼻 蛇腹支輪 中備蟇股
二軒繁垂木 妻飾虹梁大瓶束 向拝角柱 虹梁形頭貫 木鼻 連三斗実肘木 手挟 蟇股
二軒繁垂木 三方切目縁 組勾欄 木階七級 浜床 浜縁

本殿は規模の小さな三間社で、滋賀県下では珍しく切妻造の社殿である(図61 写真153～160)。湖西で中世の天皇神社・道風神社本殿が知られている程度である。

本体は腰長押を打ち、その下の板壁には華麗な格狭間を彫る。頭貫は各柱間毎に虹梁形として両端に絵様を彫る。また正面両脇間に壁面いっぱいの鳳凰・雲紋の浮彫彫刻を填める。妻飾も妻面いっぱいを迦陵頻伽と雲紋の浮彫彫刻で埋め、大瓶束上にも鑿痕を残す大きめの雲紋を付ける。向拝は比較的一般的な装飾に留まるが、手挟の鼻先に独特的な絵様を彫るのは珍しい。

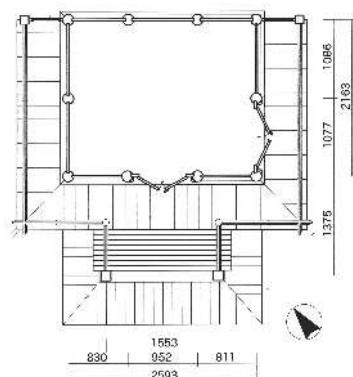


図61 大濱神社本殿平面図 1/100



写真153 大濱神社境内

以上のように、本殿は極めて珍しい独特の装飾を豊富に備えた建物である。その装飾のあり方は湖北の大工藤岡家の作風と共通する面がある。元禄8年（1695）の棟札があり、擬宝珠の金具にも同年の刻銘がある。棟札に記載された大工は伊庭村の岡田姓・村田姓で、湖北大工と何らかの繋がりがあるのかは今後の課題である。



写真154 大濱神社本殿全景



写真155 大濱神社本殿庄面



写真156 大濱神社本殿向拝詳細



写真157 大濱神社本殿本体正面

向拝の柱は取り替えられているようであるが、独特の形式と意匠を持つ本殿として極めて重要である。

なお、幣殿は入母屋造、中央部1段切り上げ、切妻造、向拝一間、向唐破風造、檜皮葺、拝殿は入母屋造、妻入、檜皮葺で、大正14年（1925）に建てられたもので（『伊庭の坂下し祭』）、上質な建物で、社域に欠かすことのできない建物である。

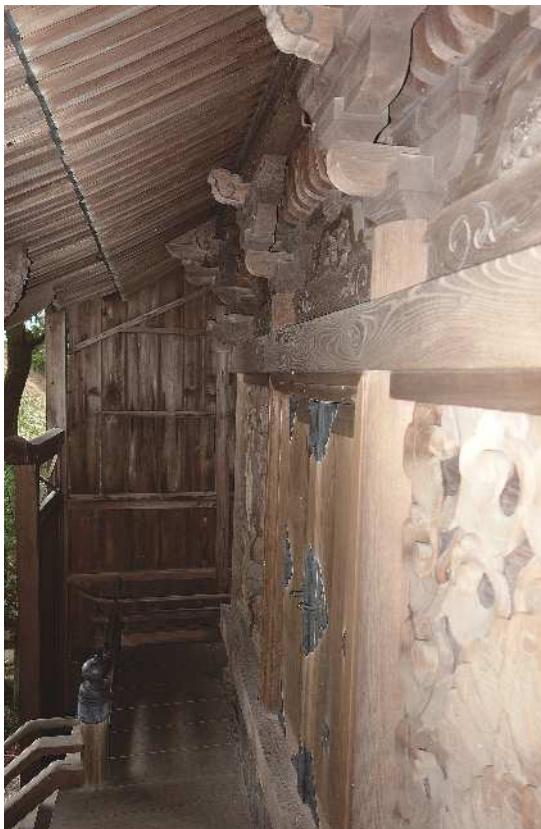


写真158 大濱神社本殿本体正面



写真159 大濱神社本殿妻飾



写真160 大濱神社本殿本体正面腰長押下の格狭間

ii 仁王堂 柄行五間 梁間五間 入母屋造 茅葺 背面下屋庇付 鉄板葺
 [県指定文化財] 鎌倉時代前期

仁王堂は大濱神社の社域の中で、大きな茅葺の屋根を見せて、目立つ存在である（図62～64 写真161～170）。伊庭祭りでは5基の神輿が仁王堂内に祀られ、様々な行事が行われる。極めて重要な建物である。

平面は方五間で、背面の下屋も含めると梁間は六間となる。円柱・八角柱・角柱が混在する。前から5列目の柱筋に腰高の中敷居を入れて蔀を吊り、その前の外陣と、奥の内陣に区分している。外陣部分は間仕切りも建具もない吹き抜けの空間である。背面下屋は比較的近年の材料で作られているが、背面に貼られた舟板は古材である。

正・側面3方の側柱は足固と飛貫で繋ぎ、柱頂部に舟肘木と桁を輪薙ぎ込む。隅柱にのみ柱上に大斗肘木を組む。入側柱筋は平三斗を組み、正面の入側柱筋だけは内法長押で固めている。正・背面入側の中央2本の柱上組物には鰯尾が付く（1カ所欠失）。

小屋組は和小屋で、垂木は木の垂木が使われている。この垂木は面戸決りがあり、反り増しのある物が多く、一部には面取がある。



写真161 大濱神社仁王堂全景

殆どの部材は風蝕が大きく、極めて古い五間堂を改造したものであることがわかる。斗のせいの高さから鎌倉時代前期の建立と考えられ、向拝を持った方五間の平面形式で、入側柱以外は柱は立たず、垂木勾配は3寸、おそらく檜皮葺か柿葺の軽快な仏堂であったと考えられる。鎌倉時代前期に遡る五間堂として貴重であるが、一方で、伊庭祭りの舞台としても極重要な位置を占める建物であり、これら両面から貴重な遺構といえよう。

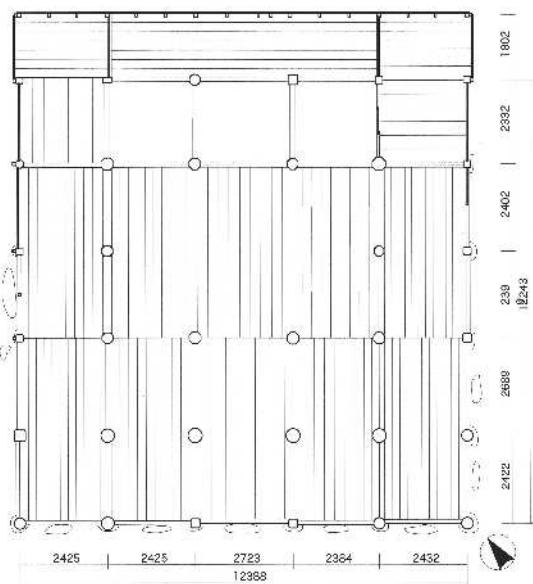


図62 大濱神社仁王堂平面図 1/100

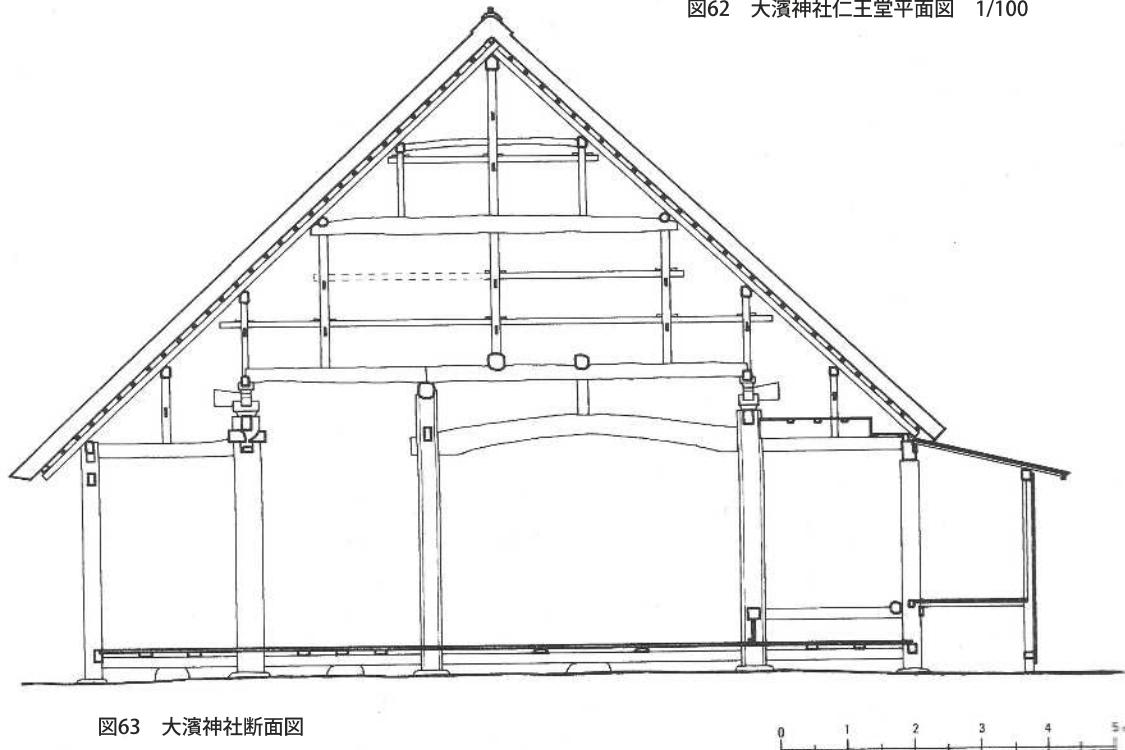


図63 大濱神社断面図

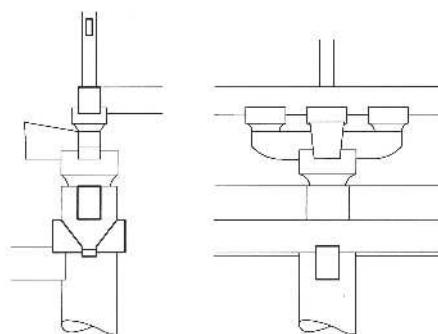


図64 大濱神社仁王堂組物 1/50



写真162 大濱神社仁王堂正面



写真163 大濱神社仁王堂内部



写真164 大濱神社仁王堂内部架構



写真165 大濱神社仁王堂側柱・組物



写真166 大濱神社仁王堂組物詳細



写真167 大濱神社仁王堂組物詳細



写真169 大濱神社仁王堂小屋組



写真168 大濱神社仁王堂組物詳細



写真170 大濱神社仁王堂垂木

iii 道祖神社 一間社流造 栈瓦葺

明治前期

身舎角柱 腰長押 内法長押 組物・中備なし 一軒疎垂木 妻飾陸梁撥東 座角柱

虹梁形頭貫 木鼻 平三斗実肘木 中備幕股実肘木 一軒疎垂木 正面轉縁 浜床

道祖神社は仁王堂と本殿の間に低い石垣を組んで建てた境内社で、約30軒からなる仁王堂在地が祀っている（図65 写真171～174）。万延年間（1860～61年）に伊勢から猿田彦命の分霊をもたらした人がいて、社殿を設け、明治4年に道祖神社と改めたという（『伊庭の坂下し祭』）。

本殿は小規模の流造社殿である。土台を組んで柱を立てる。正面にのみ低い縁を設け、木階は作らず、庇の部分に土台上に浜床を設けている。身舎・庇とも角柱で、身舎には組物を組まず、庇にのみ平三斗を置く。端正な社殿であるが、肘木の繰りが直線であり、建立は、道祖神社と名を改めた明治4年頃であろう。

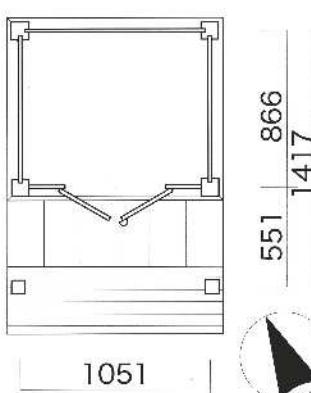


図65 大濱神社道祖神社
平面図 1/50



写真171 道祖神社正面



写真172 道祖神社斜め正面



写真173 道祖神社詳細



写真174 道祖神社妻

iv 愛宕神社 一間社流造 檜皮葺

19世紀中期

身舎円柱 切目長押 腰長押 内法長押 木鼻 台輪留め 二手先実肘木・拳鼻
 中備二手先組物及び幕股 一軒繁垂木 妻飾大瓶束笈形 庵角柱 切目長押 腰長押
 虹梁形頭貫 木鼻 二段の連三斗実肘木・拳鼻 手挟 繫海老虹梁 中備幕股 二軒繁垂木
 三方切目縁 組勾欄 木階五級 浜床 浜縁

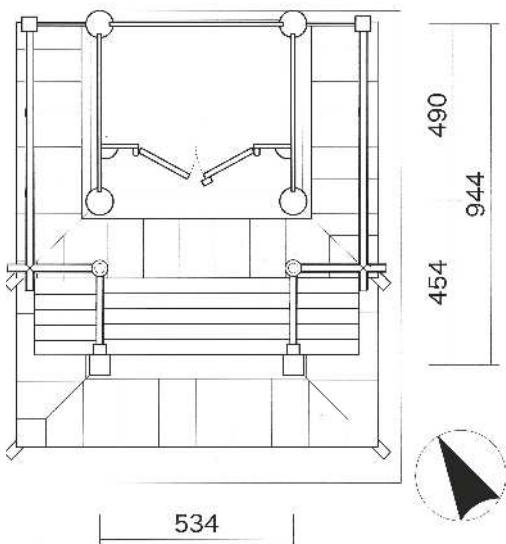


図66 大濱神社愛宕神社面図 1/20



写真175 愛宕神社全景

愛宕神社は享保6年（1721）に京都愛宕山から分霊し、摂社とした（図66 写真175～178）。寛政4年（1792）再建立の棟札があるとされている（『伊庭の坂下し祭』）。古くは在地の組織があったようであるが、現在は村の管理である。

社殿は小規模であるが、相当に手の込んだ複雑な形式と意匠を持った建物である。まず平面は、身舎内部に扉構えを設けて後方を内陣とするが、前方の外陣正面は建具を入れず開放している。身舎では、組物の2手目は絵様・縁形の付いた肘木とする。身舎頭貫は入れず内法長押より上は板壁であって、そこに雲紋や転法輪の浮彫の彫刻を貼り付ける。最も目を見張るのは海老虹梁で、菊水の紋様を海老虹梁側面全面に彫り込んでいる。このように間口2尺にも及ばない小社であるが、在り得る限りの意匠を尽くした手の込んだ社殿である。

建立年代は、絵様からみて上記寛政4年とは認めがたく、幕末に建て直されたものであろう。



写真176 愛宕神社側面見返し



写真177 愛宕神社庇詳細



写真178 愛宕神社妻飾

- v 五位田神社 一間社流造 見世棚造 板葺 明治32年頃(『伊庭の坂下し祭』所引記録)
- vi 百大夫神社 一間社流造 見世棚造 板葺 明治後期
- vii 天満宮 一間社流造 見世棚造 板葺 明治25年頃(『伊庭祭』所引記録)

この3社は本殿の東側に並ぶ小社である(図67～69 写真179～184)。五位田神社は応永年間(1394～1427)から祀られていたが文明年間(1469～86年)に牛頭天王(大濱神社の祭神)が遷座した際に摂社とした。約20軒の在地によって守られている。百大夫神社は約20軒からなる在地によって守られている。明治32年(1899)に本殿を新たに建てた記録があると伝える。天満宮は富豪中村家が所持した菅原道真像を祀るために文政年間(1818～31年)に社殿を造営し、明治25年頃大宰府の分霊を移し本殿を新築したと伝える(いずれも『伊庭の坂下し祭』による)。

3社はいずれも覆屋に納められており、土台の上に組まれた見世棚造の小規模な一間社流造である。ほぼ似た形式で造られているものの、それぞれ個性があって、五位田神社は庇に内法長押を廻し、壁と扉で閉鎖した前室付流造で、組物は用いないものの、妻虹梁には絵様を施し、軒は疎垂木である。百大夫神社は前室付とはせず、舟肘木を柱上に置き、庇には虹梁形飛貫で繋ぐものの、妻虹梁は陸梁で、軒は板軒である。天満宮も百大夫神社とほぼ同形式だが、軒が繁垂木である。このように差はあるが、建てられた年代はほぼ同じと見られ、『伊庭の坂下し祭』の記述では明治32年と25年頃となっている。五位田神社の宝前の明治27年の灯籠もこれらの社殿の建立に前後する造立であろう。



写真179 五位田神社・百大夫神社・天満宮外観

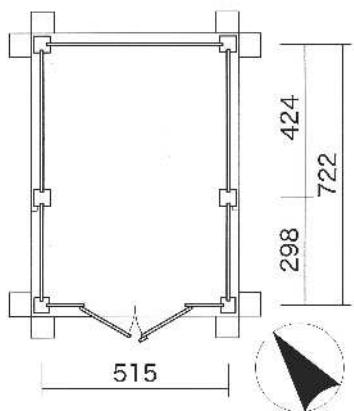


図67
大濱神社五位田神社
平面図 1/20

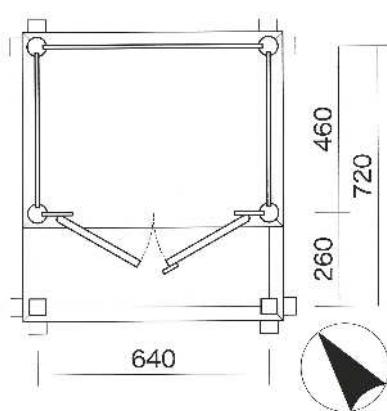


図68
大濱神社百大夫神社
平面図 1/20

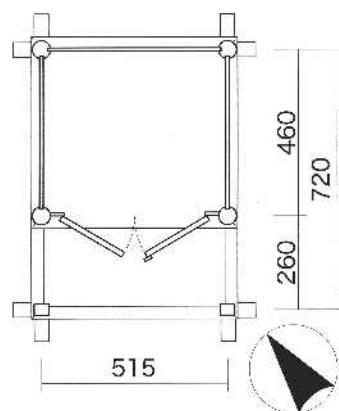


図69
大濱神社天満宮
平面図 1/20



写真180 五位田神社



写真181 百大夫神社



写真182 百大夫神社細部



写真183 天満宮外観



写真184 天満宮詳細

viii 稲荷社 一間社流造 見世棚造 板葺

明治32年頃(『伊庭の坂下し祭』所引記録)

本殿のすぐ東隣にある境内社である(図70 写真185~187)。木製の台を設けた上に土台を置いて柱を立てている。全体の形式は百大夫神社に近いが、当社は舟肘木は用いない。百大夫神社等と同時期の造営であろう。



写真185 稲荷社正面

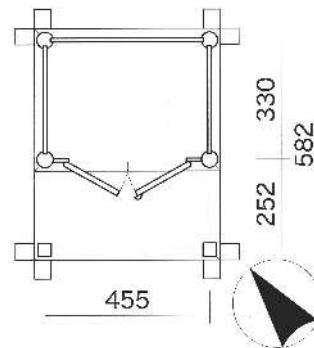


図70
大濱神社稲荷社
平面図 1/20



写真186 稲荷社詳細



写真187 稲荷社側面

6、文殊堂

厨子 一間社流造 見世棚造 鉄板葺

19世紀中期

文殊堂は大濱神社に道路を挟んで隣接して建つ小堂である（図71 写真188～191）。堂に掲げられた縁起によれば、この文殊菩薩は役行者の作った像で、織山の寺の一仏だったが、永禄8年（1565）に伽藍が焼失したので、信仰の輩が堂を造ったという。中村堂在地とも呼ばれている。

近年建て替えられた流造風の建物の中に厨子が安置されている。厨子は小規模な見世棚造の社殿の形式である。身舎は組物を組まず、庇は連三斗に手挾を組んで、中備には幕股を置く。軒は吹き寄せ垂木で、庇は二軒、身舎は一軒である。庇頭貫と妻飾虹梁には絵様を施す。この絵様と風蝕の大きさから、幕末の建立と考えられる。なお、近年の修理の際に、庇の連三斗の組む向きを取り違えている。

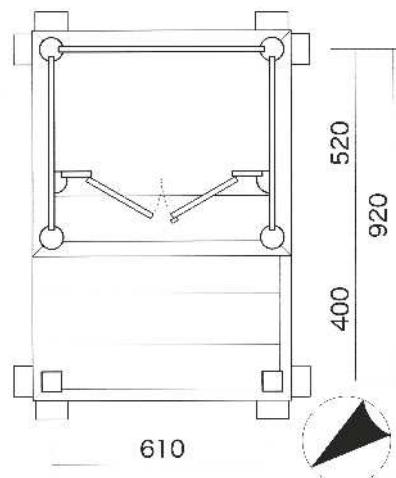


図71 文殊堂厨子 平面図 1/20



写真188 文殊堂全景



写真189 文殊堂厨子正面



写真190 文殊堂厨子詳細



写真191 文殊堂厨子妻飾

7、守国大明神

守国大明神の由来は不明である。伊庭氏の居館のあったとされる謹節館の区画の西側、水路を背にしたところにこの神社がある。覆屋の中に2棟が並ぶ（図72 写真192～198）。

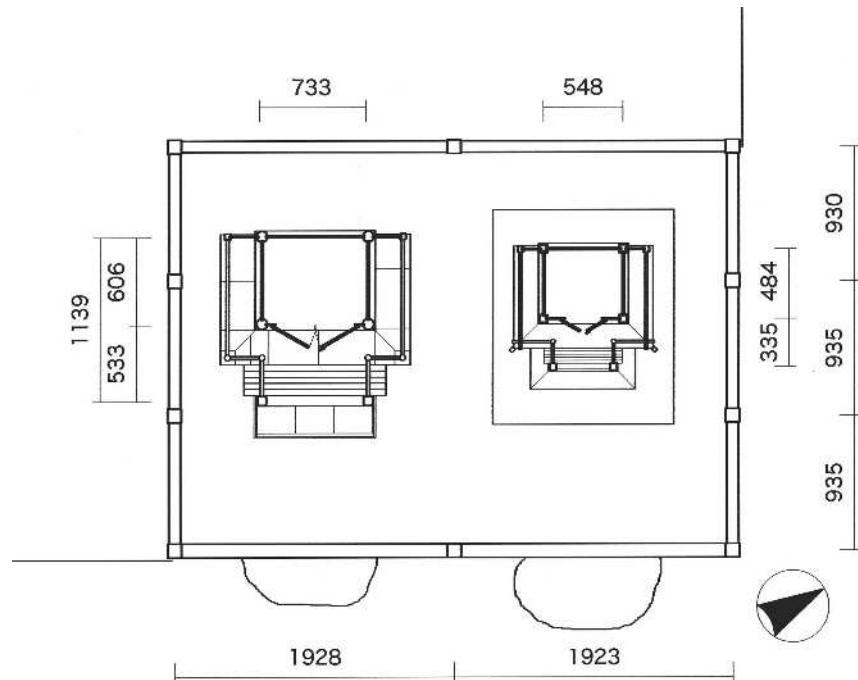


図72 陣屋稻荷・守国大明神 平面図 1/50



写真192 陣屋稻荷・守国大明神 覆屋

i 陣屋稻荷 一間社切妻造 向拝一間 栈瓦葺

19世紀中期

身舎角柱 切目長押 内法長押 組物・中備なし 一軒疎垂木 妻飾束 庵角柱 切目長押

虹梁形飛貫 木鼻 中備藁股 一軒疎垂木 三方榑縁 組勾欄 木階五級 浜床 浜縁

覆屋内の向かって右手にある。切石の基壇の上に木製土台を置いて建てる。珍しく流造ではなく切妻造向拝付としているが、平面的には流造と何ら差はない。装飾的要素は少ないが、向拝虹梁形飛貫の絵様は比較的大きく、浮彫としているのが目立つ。また垂木に反りを持たせているのも珍しい。縁は身舎背面の脇障子下に持送板を入れて支えているだけで縁束はない。幕末の建立であろう。



写真193 陣屋稻荷全景



写真194 陣屋稻荷側面

ii 守国大明神 一間社流造 檜皮葺

19世紀中期

身舎円柱 切目長押 内法長押 木鼻 台輪留め 出組拳鼻 中備組物・彫刻板 二軒繁垂木
妻飾虹梁大瓶束笈形 庵角柱 虹梁形頭貫 木鼻 連三斗実肘木 手挟 中備幕股 一軒繁垂木
三方切目縁 組勾欄 木階五級 浜床 浜縁

守国大明神は陣屋稻荷よりひと回り大きい流造社殿である。本社は大濱神社摂社愛宕神社と類似した装飾の技法を使う。まず身舎頭貫は用いず、内法長押上は板壁のままで、そこに浮彫彫刻を貼る。身舎の中備に組物を置いた上、組物間に桐紋の彫刻を配する。妻飾の板一面に彫刻を貼り付けるのも同趣と言えよう。一方で当社の身舎組物は、出組の手先の肘木を通し肘木として、斗を均等に並べるという独特的の形式も用いている。打越垂木を反らすのは陣屋稻荷と共に通した形式である。

小社ながら丁寧に造り込んだ建物で、やはり幕末の建立と推定される。



写真195 守国大明神全景



写真196 守国大明神庇詳細



写真197 守国大明神身舎詳細



写真198 守国大明神妻飾

8、金刀比羅神社

本殿 一間社流造 檜皮葺

19世紀中期

身舎円柱 切目長押 内法長押 台輪留め 三斗枠肘木実肘木 中備墓股 一軒繁垂木
 妻飾虹梁束 庵角柱 切目長押 虹梁形頭貫 木鼻 三斗実肘木 手挟 繫海老虹梁 中備墓股
 二軒繁垂木 三方博縁 組勾欄 木階五級 浜床 浜縁

当社は伊庭の集落の西端の湖岸の傍にあり、金刀比羅在地によって守られている（図73 写真199～201）。

集落内の多くの神社と同様小規模な流造社殿である。身舎頭貫を持たないのは愛宕神社・守国大明神と共に通する技法であるが、当社ではそこに彫刻を填め込んでいた形跡はない。身舎側面の中備墓股は欠失しているが風蝕の差が墓股形に残っている。妻飾の板壁にも彫刻が付いていたようで、当たりがかすかに残る。

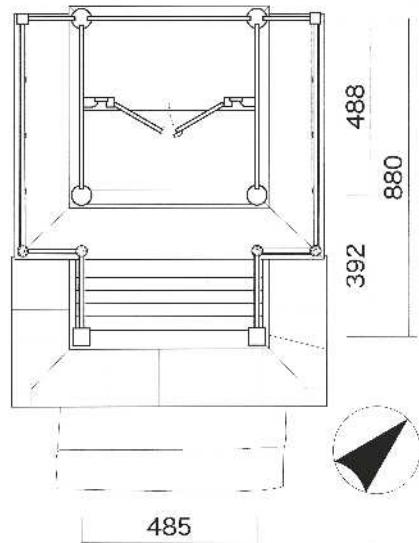


図73 金刀比羅神社本殿 平面図 1/20

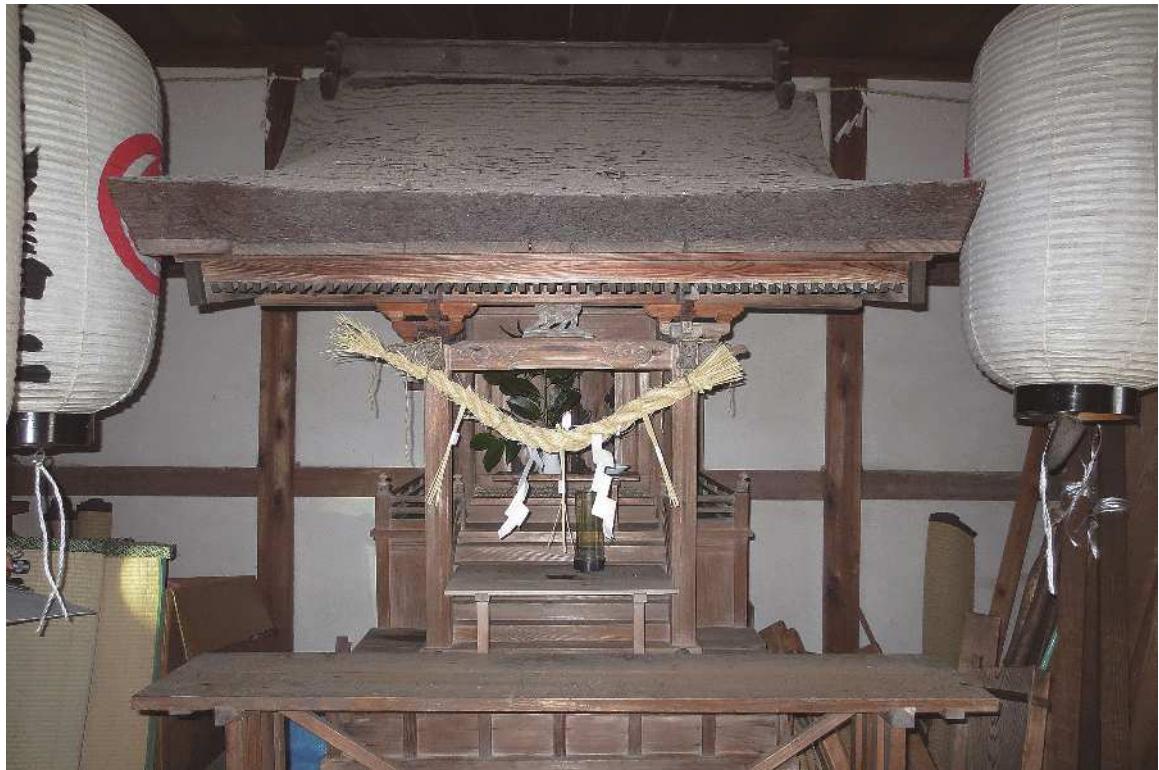


写真199 金刀比羅神社本殿正面

庇の組物はかなりの部分が新しい材料で取り替えられている。この組物は連三斗風に蟇羽側の肘木を延ばしているが、斗2個は置くほどの長さではなく、変則的である。また背面の軒は、ある時期に切断されているようである。建立は他と同様、幕末であろう。



写真200 金刀比羅神社本殿側面



写真201 金刀比羅神社本殿詳細

B、繖山の神社

1. 望湖神社

望湖神社は、繖山の西麓にあり、伊庭集落から東に一直線で延びる道路が繖山に突き当たる位置に社殿は位置している（図74 写真202）。藤原鎌足を祀る。近世には多武大明神と呼ばれたが、明治4年（1871）に望湖神社と名を改めた。伊庭祭りを担う3社の1つである。

麓から約100m昇ると、南北に広い平坦地を設けて、南から拝殿・幣殿・本殿が1列に並び、その西に懸造の社務所が立つ。

本殿は、元禄4年（1691）に建てられており、前身の慶長6年（1602）の棟札も残されている。拝殿は幕末に建てられたものと考えられる。

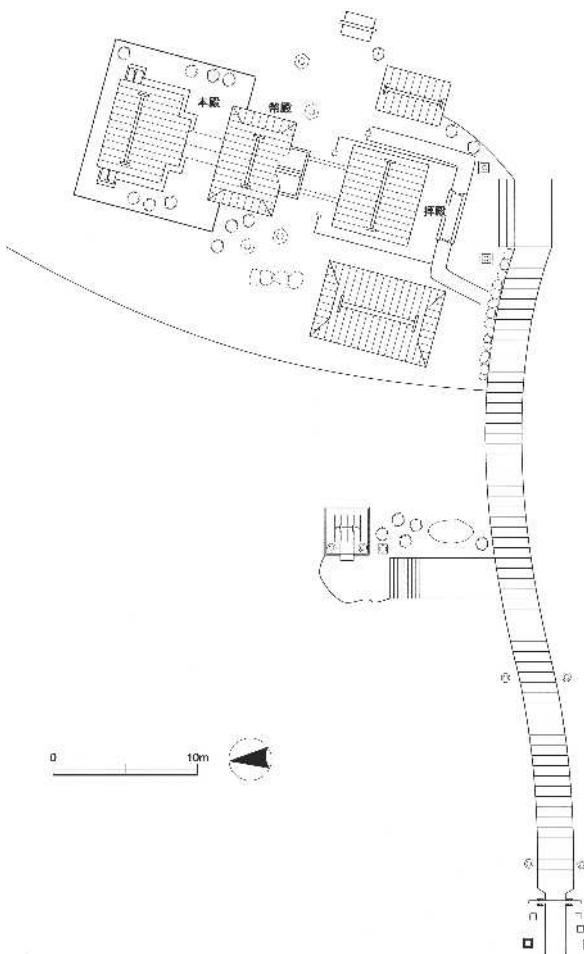


図74 望湖神社配置図 1/500



写真202 望湖神社境内

i 本殿 三間社流造 向拝一間 銅板葺

〔県指定文化財〕

元禄4年(1691 棟札)

身舎円柱 切目長押 腰長押 頭貫 木鼻 出三斗実肘木 中備幕股 妻飾二重虹梁幕股
 二軒繁垂木 庵角柱 切目長押 内法長押 頭貫 木鼻 出三斗実肘木 正面中備束
 身舎と海老虹梁で繋ぐ 二軒繁垂木 向拝角柱 切目長押 腰長押 虹梁形頭貫 木鼻
 連三斗実肘木 手挟 中備幕股実肘木 二軒繁垂木 三方切目縁 組高欄 木階五級 浜床 浜縁

本殿は、向拝の付いた三間社流造本殿で、庇は引違または片引の板戸で閉じられた、いわゆる前室付の形式を持っている（図75 写真203～207）。身舎正面の柱は中央間の正面側だけを円柱風に作った角柱で、建具はない。身舎後方一間通りを3間に割って板扉を設け、内陣としている。

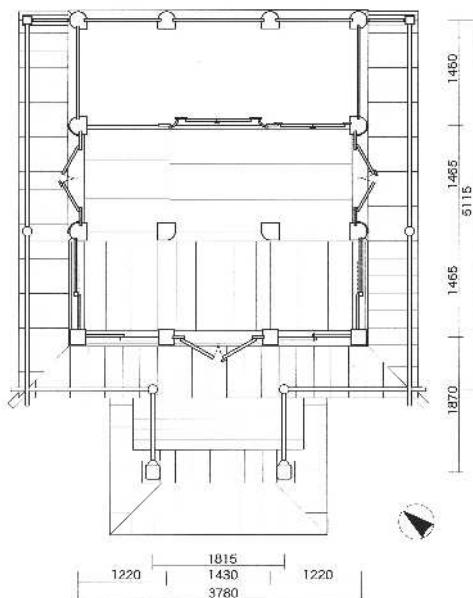


図75 望湖神社本殿 平面図 1/100



写真203 望湖神社本殿全景

身舎・庇とも出組の組物を組んで、妻側では連三斗としている。中備はいずれも本幕股を据えている。頭貫木鼻と妻棟通り組物の拳鼻の絵様は、上下から渦を巻き込み若葉を加える複雑な意匠である。庇側面の繫海老虹梁の下の板壁に松の浮彫彫刻をあしらう。この他、妻飾の幕股足下の波濤の彫刻、妻飾棟木際の雲紋彫刻、繫海老虹梁の庇柱側の線条文と絵様など、特異な意匠が多々みられる。庇の柱が几帳面取であるのは珍しい。このように木部だけ見てもかなり装飾豊かであるが、注目すべきは建物全体に彩色が施されていたことである。現状で褪色が著しいものの、部分的な顔料や、絵様の風触差が残っていて、建設当初の華麗な様をうかがわせている。縁より下の柱や板壁にまで彩色・絵様が施されているのは極めて例が少ない。なお、床高が高く、庇側面床下に片引戸を設けているのも注目される。なお痕跡と社蔵の棟札から、建立当初は身舎正面の柱筋に板扉と壁が設けられていた、身舎が内陣、庇が外陣と区分されていたが、天保4年（1833）頃、身舎正面柱間装置を一間後方に移動し、内陣を狭め、外陣を広くとるように改造し、併せて天井も設ける改造を行っていることが知られる。

この本殿の建立された元禄年間（1688～1704年）頃から、寺社建築の装飾が派手になるが、その比較的初期にあって彫刻と彩色が相俟って、例のない華麗な社殿が建てられ、しかも使われ続けてきた。内部空間の変化がわかる点でも貴重な遺構である。



写真204 望湖神社本殿側面



写真205 望湖神社本殿向拝



写真206 望湖神社本殿向拝見返し



写真207 望湖神社本殿妻飾

ii 拝殿 柁行三間 梁間三間 切妻造 栈瓦葺

明治年間(1868－1912年)

角柱 足固貫 腰貫 内法貫 差鴨居 正・背面中央間のみ虹梁 組物なし 中備なし

妻飾陸梁束 一軒疎垂木

拜殿は、立ちの高い4方開放、土間床である(図76 写真208～210)。正・背面中央間のみ虹梁を入れて中軸線を強調する。内部天井は格天井で、中央部一間4方を折上としている。



写真208 望湖神社拝殿正面



写真209 望湖神社拝殿側面

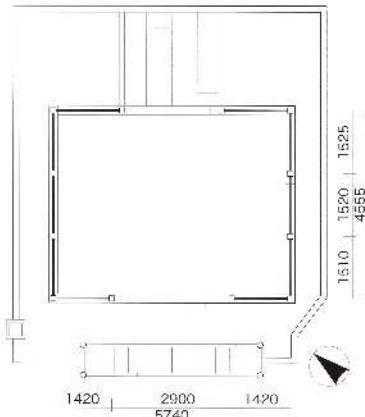


図76 望湖神社拝殿 平面図 1/100



写真210 望湖神社拝殿内部

拝殿と本殿の間に、幣殿が建つ（図 77、写真 211）。桁行五間、梁間二間、入母屋造、一間向拝向唐破風造、鉄板葺の上質の建物である。明治に入って境内を整えるために建てられたものであろう。

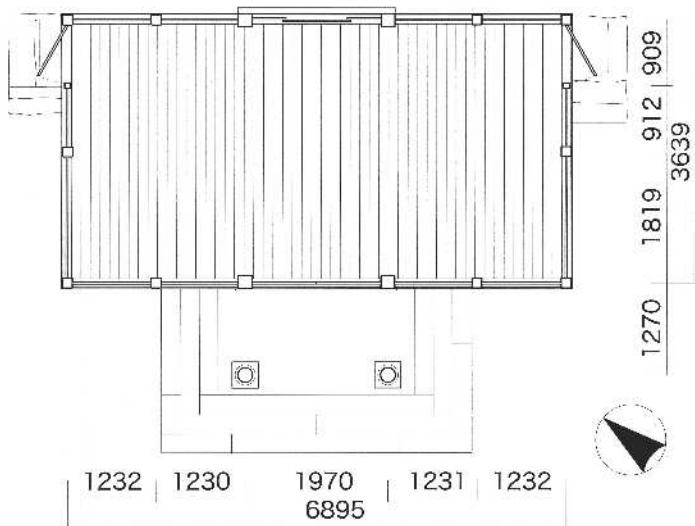


図77 望湖神社幣殿 平面図 1/100



写真211 望湖神社幣殿

2、繖峰三神社

繖峰三神社は、繖山山塊の八王子山山頂部近く、標高約250mの高さにある。伊庭祭りの坂下しの際、二ノ宮・八王子・三ノ宮の神輿を繖峰三神社まで引き上げて、神を載せて降る神事が行われることで知られている。本殿は、後述の如く宝永2年（1705）の建立である。



写真212 繖峰三神社本殿境内

本殿 三間社流造 向拝一間 銅板葺

宝永2年(1705 社伝)

身舎円柱 切目長押 腰長押 頭貫 木鼻 大斗肘木 中備無し 妻飾陸梁大瓶束豕又首

二軒繁垂木 庵角柱 切目長押 内法長押 頭貫 木鼻 出三斗実肘木 正面中備束

身舎と海老虹梁で繋ぐ 二軒繁垂木 向拝角柱 切目長押 虹梁形頭貫 木鼻 連三斗実肘木

手挾 中備蓋股実肘木 一軒繁垂木 三方切目縁 組高欄 木階五級 浜床 浜縁

山頂近くの平坦地に、西を向いて拝殿と本殿が並んで建つ（写真212）。拝殿は桁行三間、梁間三間、入母屋造、茅葺（ただし鉄板で覆う）の建物で、内部は土間、4周は開放の趣ある建物である。

本殿は、比較的規模の大きな三間社流造本殿である（図78 写真213～220）。亀腹を築いて、その上に置いた木製土台に柱を立てている。



写真213 織峰三神社本殿正面

庇両側面を板壁で閉じ、正面は三間とも板扉を設けて、庇を開放とはしない、いわゆる前室付の形式である。この形式は滋賀県下では中世以来多く見られる。この本殿では更に一間の向拝を設けて、浜縁を付けている。身舎は南側面第一間にだけ幣軸構の板扉を設け、他は板壁で閉じている。身舎・庇の3方に縁を設け、庇の縁を長押のせいだけ低くする。

身舎・庇周りは頭貫木鼻に線形を付けるものの、絵様は施さず、装飾的な部材は少ない。庇・向拝の組物の肘木が禅宗様であるのに対し、身舎は和様の大斗肘木で、対照的である。禅宗様の要素は庇側面の海老虹梁にも見られる。

簡素な意匠の本体部に対し、向拝は比較的華やかで、頭貫木鼻はやや異形の象鼻、手挟は雲紋を彫った中世の名残を

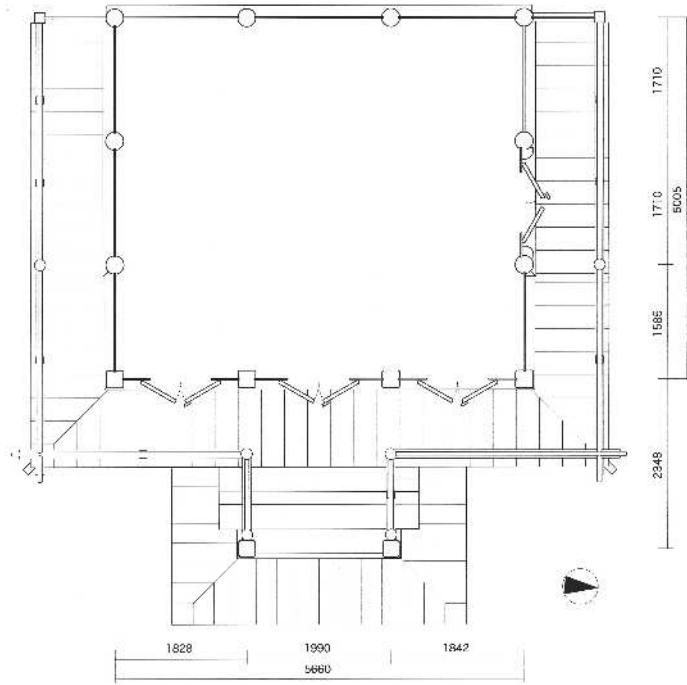


図78 織峰三神社本殿 平面図 1/100



写真214 繖峰三神社本殿側面



写真215 繖峰三神社本殿向拝



写真216 繖峰三神社本殿向拝見返し

感じさせる意匠である。

柱は柱間に比して比較的太く、総じて木太い安定感のある建物である。当初材の残存状況も良い。内部は未調査であるが、麓の案内板には「宝永二年乙酉七月建立ト伝フ」と書かれていて、何らかの根拠史料があるように思われる。向拝の虹梁絵様はこの頃の意匠とみて差し支えない。18世紀初頭に建設されているが、比較的古風な技法・意匠で作られ、伝統の伊庭祭りと相俟って、地域の歴史を物語る重要な建物である。



写真217 繖峰三神社本殿細部



写真218 繖峰三神社本殿正面

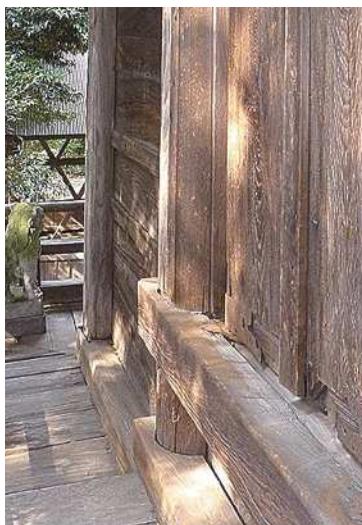


写真219 繖峰三神社本殿側面見返し



写真220 繖峰三神社本殿妻飾

4 伊庭集落の民家

(1) 民家の建設年代

伊庭の集落には約 340 軒の民家の建物が建っている。それらの建てられた年代は、外観の観察と聞き取りとによってほぼ推定できる。外観調査だけからの判断を図 79 に示した。

江戸時代に建てられた民家は極めて少なく、近代になって建て替えられたものが多い。この要因は生活の近代化、近世以来受け継がれてきた民家の老朽化など、一般的な要因もあるだろう。しかし、むしろ大中の湖の干拓事業、水路の埋め立てや改修などの進行が建物そのものの改築にも影響を及ぼしたと考えられる。

昭和 19 年（1944）から小中の湖の干拓が始まり、大中の湖の干拓は昭和 21 年から 43 年に実施された。水路の埋め立てや改修は大正 14 年（1925）の官有溝渠の廃止頃から始まり、昭和 49 年頃までに完了している（沢他「水郷集落における文化的景観の持続性」2013）。建物の建て替えはこれらの事業と連動しながら、徐々に進行したようで、結果的には昭和以後の建物が多い上に、統一性がなくなっている。

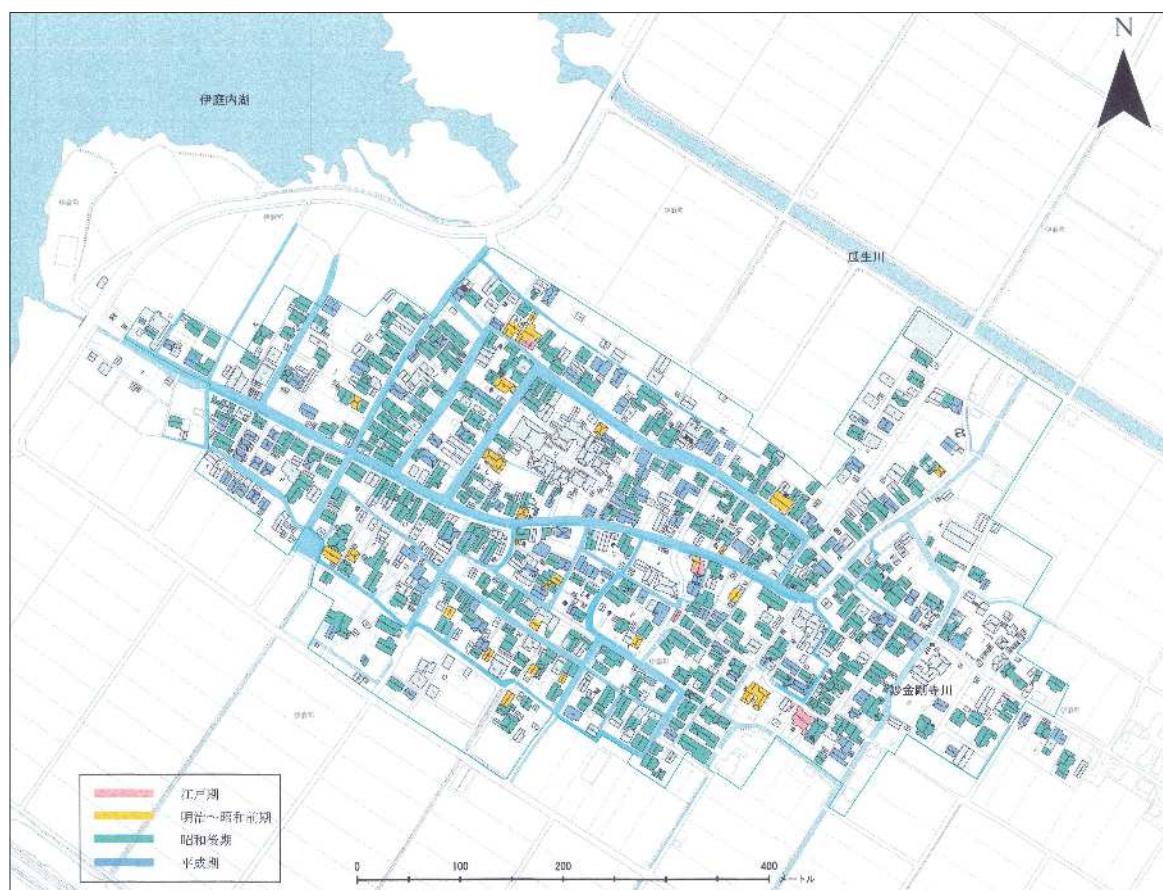


図79 建設年代別民家分布図(伊庭集落)。この地図は、伊庭内湖と伊庭外湖の間に位置する伊庭集落の構造を示す。地図上では、多くの緑色の建物が点在しており、これらは建設年代別で色分けされている。北側に位置する伊庭内湖と伊庭外湖との間には、複数の運河や水路が開削されている。また、東西に走る主要な幹線道路や、南北に走る支線道路が示されている。地図右上には北緯子午線が記載されている。地図左下には、建設年代別民家分布図の目録が記載された表があり、年代別に建物の分布状況が示されている。

表3に、伊庭の特徴的な民家、改修・改変の跡が見られるもの、カワトの関係などに注目して選んだ30件について整理した。これに示されているように、木造の伝統的な建物が建て続けられているものの、戦後に建て替えられた建物が大勢を占めている。

(2) 民家の形式

民家の形式は屋根に注目すれば以下のように分類できる。まず屋根葺材では茅葺と瓦葺と分類でき、それぞれ切妻造と入母屋造が見られる。一部に寄棟造も見られる。

茅葺は1軒を除き鉄板で覆われている。瓦葺もすべてが桟瓦葺であって本瓦葺は寺院に限定される。またトタン等金属板で葺いた建物も多い。

そしてプレファブの住宅も多くはないが目立つようになっている。

現状で比較的古い明治から昭和戦前までに建てられた建物は、切妻造の桟瓦葺が多く、一部に入母屋造の屋根を基調にしながら複雑に建物を繋ぐ、意匠を凝らした近代的な和風の建物も見られる。切妻造の一般的民家として中村家（東北川 昭和17年建設）、意匠を凝らした和風民家としては大西家（東殿 昭和3年建設）が代表として挙げられる。

表27 民家30軒の特徴

番号	建築年代	建築形式			屋根		外壁形式	概要
		用途	構造	階高	屋根形式	屋根葺材		
1	昭和中期	主屋	木造	2階	切妻	桟瓦	真壁	茅葺民家から建て替えた。水路沿いの石垣が残り、カワトを使用している様子。
	昭和中期	隠居屋	木造	1階	入母屋	桟瓦	真壁	水路側の壁面の腰壁が舟板貼り。
	昭和中期	納屋	鉄骨	1階	切妻	波板	大壁 (鉄板貼り)	外壁が錆び、状態が悪い。
2	明治期	主屋	木造	1階	入母屋	茅葺 (トタン覆い)	真壁 (木目調鉄板貼り)	茅葺屋根を赤色のトタンで覆っている。
	昭和中期	隠居屋	木造	2階	切妻	桟瓦	真壁	使用していないか。
	昭和後期	増築部	木造	1階	陸屋根	セメント	大壁 (モルタル)	増築部が多く、外壁材が多様である。屋上に物干し場があり、目立っている。
3	平成	主屋	木造か鉄骨	2階	切妻	スレート風 新建材	大壁 (モルタル)	以前は空地だった場所に新築する。水路側に駐車場を配置している。
4	昭和前期	主屋	木造	2階	切妻	桟瓦	真壁	最近空き家になる。
	昭和中期	納屋	鉄骨	1階	片流れ	鉄板	大壁 (鉄板貼り)	
5	平成8年	主屋	木造か鉄骨	2階	寄棟	スレート風新建材	大壁 (パネル)	2世帯住宅。外壁が黄色のパネル。
	昭和42年	主屋	木造	2階	切妻	桟瓦	真壁	カワトの傍にイケスを設け、鯉や亀を飼っている。
	昭和42年	主屋の一部	木造	1階	切妻	鉄板	大壁 (杉板風トタン貼り)	玄関や水回り部分。
6	平成15年	主屋	木造か鉄骨	3階	切妻 (複雑形)	瓦風新建材	大壁 (パネル)	近年茅葺民家から建て替えたが、透塀と門、前庭は昔のものを残している。
	昭和55年	隠居屋	木造	2階	切妻	桟瓦	真壁	
	昭和50年	納屋	鉄骨	2階	切妻	スレート瓦	大壁 (トタン波板貼り)	2年前に農業をやめ、今は倉庫として使う。
		外便所	木造	1階	切妻	瓦風新建材	大壁(パネル)	主屋の建て替え時に、同じ様な意匠に改装した。
7	昭和中期	主屋	木造	2階	切妻	桟瓦	真壁	茅葺民家から建て替えた。敷地内に大きな畝があり、周囲の水路は改められず石垣が残る。
8	大正～昭和初期	主屋	木造	2階	入母屋	桟瓦	真壁	立派な透塀と門があり、水路沿いの石垣を整備しつつも残している。
	昭和中期	隠居屋	木造	1階	切妻	桟瓦	真壁	
	大正～昭和初期	倉庫(土蔵)	木造	1階	切妻	桟瓦	大壁	軒を塗り込めている。
9	平成期	主屋	木造	3階	切妻 (複雑形)	桟瓦	大壁 (吹き付け)	透塀と前庭は昔のものが残る。
	昭和後期	外便所	木造	1階	陸屋根	セメント	大壁 (モルタル)	使用禁止となっている。
	平成	納屋	鉄骨	2階	陸屋根	折板材	大壁 (鉄板貼り)	

番号	建築年代	建築形式			屋根		外壁形式	概要
		用途	構造	階高	屋根形式	屋根葺材		
10	昭和後期	主屋	木造	2階	切妻	桟瓦	真壁	道路側の外壁に庇を設け、屋根から鉄骨で吊るしている。
	平成	増築部	鉄骨	1階	陸屋根	折板材	大壁 (鉄板貼り)	駐車場、物置として使われている。
11	昭和63年	主屋	木造	2階、3階	切妻	桟瓦	真壁	4棟が通りに正面を向け、3階棟は奥に作る事により、圧迫感をなくしている。水路から橋を渡ってアプローチ。
	平成13年	増築部	木造	2階	切妻	桟瓦	真壁	主屋と同じようなつくり。
12	江戸～明治期	主屋	木造	2階	入母屋	茅葺、桟瓦 (鉄板覆い)	真壁	集落内の茅葺民家の中でも古い方。茅置き場がある。
	昭和中期	増築部	木造	1階	切妻	桟瓦	大壁	勝手口からカワト、水路での繋がりが残る。
	昭和前期～中期	隠居屋	木造	2階	切妻	桟瓦	大壁	外壁の腰壁は深緑の縦板貼り。
	江戸～明治期	外便所	木造	1階	切妻	桟瓦	真壁	
	江戸～明治期	倉庫(土蔵)	木造	1階	切妻	桟瓦	土蔵	舟板を縦貼りにしている。
13	明治期	主屋	木造	1階	入母屋	茅葺、桟瓦 (トタン覆い)	真壁	軒は鉄板で覆っている。
	昭和中期	増築部	木造	1階	片流れ	トタン波板		敷地内の建物の屋根、外壁のトタンの色を赤で統一している。
	昭和後期	隠居屋	木造	1階	切妻	桟瓦		
	明治～大正期	倉庫(土蔵)	木造	1階	切妻	桟瓦	土蔵	
	明治期	外便所	木造	1階	切妻	桟瓦	真壁	
14	明治6年	主屋	木造	2階	切妻	桟瓦	真壁	
	付属屋 (水回り)	木造	1階	切妻	桟瓦	真壁		
	大正期	隠居屋	木造	1階	片流れ	桟瓦	大壁	
	増築部	木造	1階	切妻	洋瓦			
	江戸後期	店舗	木造	1階	切妻	桟瓦	真壁	醤油屋を営む。
	江戸後期	付属屋	木造	1階	切妻	桟瓦		
		倉庫(土蔵)	木造	1階	切妻	桟瓦	土蔵	
	昭和中期	倉庫(土蔵)	木造	1階	切妻	桟瓦	土蔵	舟板貼り、軒を塗り込めてる。傷みが激しい。
15	明治22年	倉庫(土蔵)	木造	1階	切妻	桟瓦	土蔵	舟板貼り、軒を塗り込めてる。
	昭和10年	倉庫(土蔵)	木造	1階	切妻	桟瓦	土蔵	舟板貼り、軒を塗り込めてる。
	明治中期	主屋	木造	1階	入母屋	茅葺、桟瓦	真壁	集落で唯一残る茅のままの民家。住人は別の場所に住んでいるが、家屋は残しているそう。
16	昭和40-50年	増築部	木造	2階	入母屋	桟瓦	真壁	
	昭和中期	納屋	木造	1階	切妻	桟瓦	真壁 (木目調鉄板貼り)	主屋に合わせた意匠の木造の納屋。
	昭和中期	主屋	木造	2階	切妻	桟瓦	真壁	垂木、破風、化粧材に施されたベンガラの色が濃く目立っている。腰壁はレンガ調タイル貼り。
17	昭和中期	作業場	木造+鉄骨	1階	切妻	折板材	大壁 (鉄板貼り)	工務店を自宅で営んでいる為作業場の倉庫が4棟ある。
	昭和前期	主屋	木造	2階	切妻	桟瓦	真壁	角屋がある。
18	昭和中期	納屋	木造	1階	切妻	スレート	大壁 (トタン貼り)	鉄骨補強が為されている。
	明治期	主屋	木造	1階	切妻	茅葺(鉄板覆い)	真壁 (トタン貼り)	住民は別のところに住んでいる為空き家となっている。バラック化している。
19	昭和中期	主屋	木造	2階	切妻	桟瓦	真壁、大壁	茅葺民家から建て替えた。梁や柱を外面に出し、他の民家とか異なる形式。重厚な堀で囲まれている。
	明治期	隠居屋	木造	1階	切妻	桟瓦	真壁	
	明治期	倉庫(土蔵)	木造	1階	切妻	桟瓦	大壁	
20	昭和3年	主屋	木造	2階	入母屋	桟瓦	真壁	外壁が黒漆喰の大規模な民家。舟板貼りの堀で囲われている。
	昭和3年	倉庫(土蔵)	木造	2階	切妻	桟瓦	大壁 (トタン貼り)	軒が塗り込まれている。
21	江戸末期	主屋	木造	厨子2階	切妻	桟瓦	大壁	近年改築した。形態は古いが、細部意匠に新しいものを取り入れている。
22	昭和中期	主屋	木造	2階	入母屋	桟瓦	真壁	茅葺民家から建て替えた。勝手口が道路側、玄関が奥にある。
23	昭和初期	主屋	木造	2階	切妻	桟瓦	大壁	近年改装したようである。
	平成	増築部	木造	1階	片流れ	スレート瓦	大壁	増築部が多い。
	昭和中期	隠居屋	木造	2階	切妻	スレート瓦	大壁	
	昭和初期	倉庫(土蔵)	木造	1階	切妻	桟瓦	大壁 (鉄板貼り)	
24	昭和44年	主屋	木造	2階	切妻	桟瓦	真壁	茅葺民家から建て替えた。2階の外壁が青白色である。
	平成9年	増築部		1階	片流れ	トタン波板	大壁 (モルタル)	
	明治期	隠居屋	木造	2階	切妻	桟瓦	真壁	
	明治期	納屋	木造	1階	切妻	桟瓦	真壁	庇の出を大きくし、玉ねぎを吊るすなど活用している。

番号	建築年代	建築形式			屋根		外壁形式	概要
		用途	構造	階高	屋根形式	屋根葺材		
25	昭和中期	主屋	木造	2階	切妻	桟瓦	木造	増改築が繰り返し行われている。
	昭和前期	増築部	木造	1階	切妻	桟瓦	真壁 (ベニヤ板貼り)	増築部が多い。屋根、外壁ともに赤色。
	昭和末	外便所	木造	1階	陸屋根	コンクリート	コンクリート	
26	昭和後期	主屋	木造	2階	切妻	桟瓦	真壁	茅葺民家から建て替えた。水路の改変に影響を受け、敷地が小さくなつた。
	昭和中期	隠居屋	木造	2階	切妻	桟瓦	真壁	昔の隠居屋から建て替えた。
27	昭和後期	主屋	木造	2階	寄棟	桟瓦	大壁	現代的な和風の民家に建て替えた。
	昭和前期	隠居屋	木造	2階	切妻	桟瓦	真壁	2世帯住宅。
	昭和中期	増築部	木造	1階	入母屋	桟瓦	真壁	隠居屋の増築部。
28	江戸後期	主屋	木造	2階	切妻	桟瓦	真壁	虫籠窓、煙出しが残っているが、近年大幅に改築した。
	1862年	隠居屋	木造	1階	切妻	桟瓦	木造	近年改築した。
	1862年	倉庫(土蔵)	木造	1階	切妻	桟瓦	大壁	
		納屋	鉄骨	1階	切妻	トタン	鉄骨	敷地内に橋があり、水路を跨いで納屋が位置する。
29	昭和末期	主屋	木造	2階	切妻	桟瓦	真壁	桟瓦葺の民家から建て替えた。
		増築部	木造	1階	切妻	トタン	大壁 (モルタル)	水回り。
	大正～昭和前期	隠居屋	木造	1階	入母屋	桟瓦	真壁	使用感なし。
30	平成	付属屋	木造	1階	切妻	桟瓦	大壁 (パネル)	2世帯住宅。
		納屋	鉄骨	1階	陸屋根	トタン		作業場兼ガレージとして使われている。
	昭和17年	主屋	木造	厨子2階	切妻	桟瓦	真壁	外壁は黒漆喰で、煙出しがある。
		隠居屋	木造か鉄骨	2階	切妻	スレート瓦	大壁 (吹き付け)	2世帯住宅。
	昭和中期	倉庫(土蔵)	木造	1階	切妻	桟瓦	木造	近年改築された様子。

(3) 民家の変容過程

伊庭集落の敷地形状を知る史料として、「家籍図」と呼ぶ史料が伊庭町自治会に所蔵されている。この「家籍図」中には明治14年（1881）以降の追記があり、従って本史料は明治初頭の伊庭の個々の民家の状況を示す。これには、88の敷地の建物の規模や所有者が図示されており、主屋もしくは主屋と想定される建物の内、53棟が茅葺（艸葺と記すものが多い）、20棟が瓦葺、15棟は不明となっている。全体の6割が茅葺である。伊庭集落の全体を示すものではないが、現状に比し、格段に茅葺の民家が多かったことになる。

また昭和50年(1875)に撮影された航空写真から茅葺民家を拾い出すと68棟であった。現状では12棟しかない（図80）。

茅葺民家の減少率を明治14年頃から昭和50年まで(X)と、昭和50年から現在まで(Y)を比較する。仮に上記家籍図から知られる茅葺民家の比率が集落全体の比率を示しているものと仮定すると、X = 0.8棟 / 年、Y = 1.4棟 / 年である。明治期の集落全体の茅葺民家の数が、家籍図から知られた茅葺民家の比率より少ないとすれば、Xはさらに小さくなる。つまり水路改修以後に急速に茅葺民家が減少したことになる。茅葺民家の建て替えは伊庭に限らず、どの地域でも起こっていることであるから、そのこと自体は特異なことではない。しかし茅葺民家の減少は、茅葺以外の民家も急速に建て替えが進んで、集落全体の景観が近年大きく変化していることを意味している。

(4) 民家の敷地割と家屋

伊庭集落は複雑に水路が入り組んでおり、水路に面して民家の建物が建ち並ぶ。敷地割と敷地の中の民家の配置には規則性が見られる部分とそうでない部分がある。

東北川・名古地区は水路が条里方向に揃えて直角に曲がる水路が設けられており、その水路に直行して敷地境を設け、水路側に面した間口幅は狭く、奥行きは比較的長い短冊形の敷地が連なっている。これは近世都市における短冊形の地割に類似した形態であり、都市であれば敷地の表側に、街路に接して町屋が連檐して建ち並ぶのが一般的である。伊庭ではこうした短冊形敷地は街路ではなく水路に接しているわけであるが、そこに建つ民家は、2つの形式に分かれる（図81）。

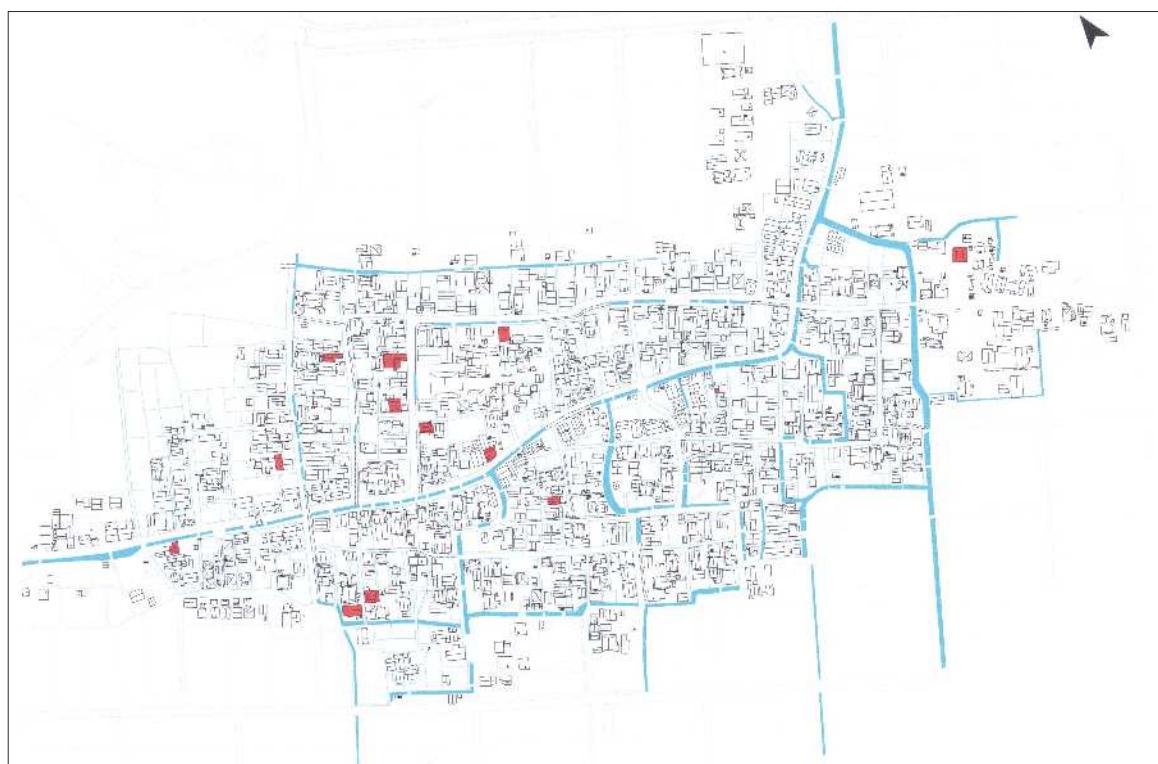


図80 民家屋根伏図(塗りつぶしは茅葺民家)

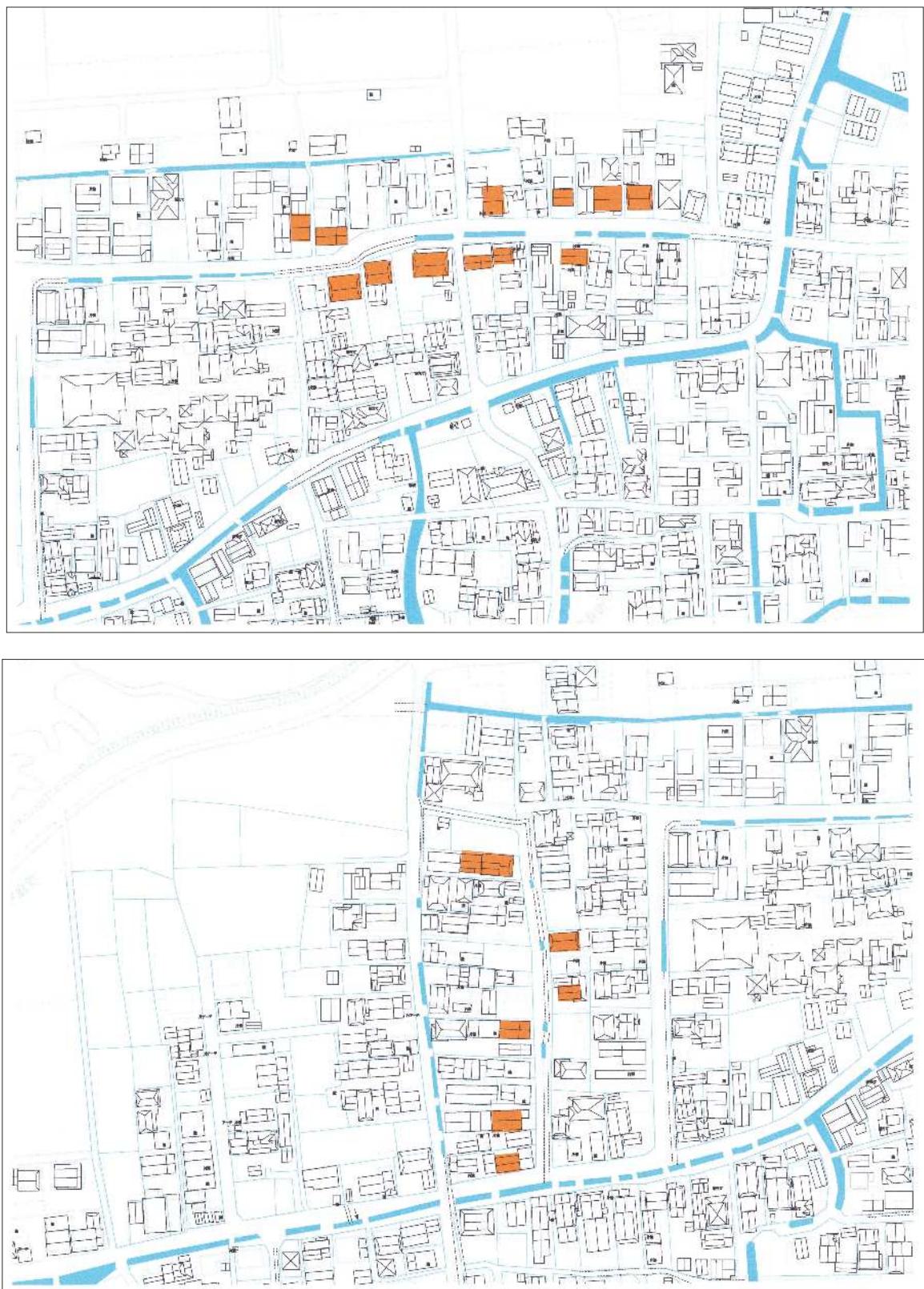


図81 敷地と民家の配置の2形式 上:東北川地区 下:名古地区

まず東北川地区では水路に対して棟を平行に通して民家の主屋を建てる。主屋は水路に近接せず、庭を設ける。また水路南側では玄関を南に設ける、すなわち水路を背にしてい

る例もある。つまり街路のいずれの面も街路に正面を向けて町屋が連檐する在り方とは異なる。これをA形式と呼んでおく。

一方、名古地区では、水路に直行する棟の主屋を建て、短冊形敷地の長手方向に建物が延びることになる。従って水路側からは妻入の民家が妻を見せて並ぶように見えるが、玄関は妻ではなく、平側に設けられる。これをB形式と呼んでおく。

B形式は東北川地区の一部にも見られる。また四ッ谷地区では東寄りにA形式、西寄りにB形式が目立つ。南川・北川・中下地区でも両形式は部分的に見られる。

しかし西北川・中下・西殿・東殿地区では敷地が短冊形にはならず、方形に近いものが多く、その中に建つ民家の配置にも規則性を見出しがたい。

以上述べた事は、明治の地籍図（図82）と現状の民家の在り方を踏まえて判断しているが、言うまでもなく敷地は分割されたり統合されたりする。建物の配置も建て替えに伴って変化する。このために規則性の差異は、明確な区分はできていない。しかし集落形成の過程を示唆しているものと考えられる。あえて大胆な推定をするならば、東北川・名古・四ッ谷・南川は後発的に集落を拡張した際に比較的計画的に作られ、それ以外の地区はそれに先んじて蛇行する川沿いに集落が形成されていた、といった過程を想定することができる。こうした集落の拡張があったとしても、それは明治以前のことであり、なおかつ拡張すべき要因があったはずであるが、その手掛かりは掴めていない。

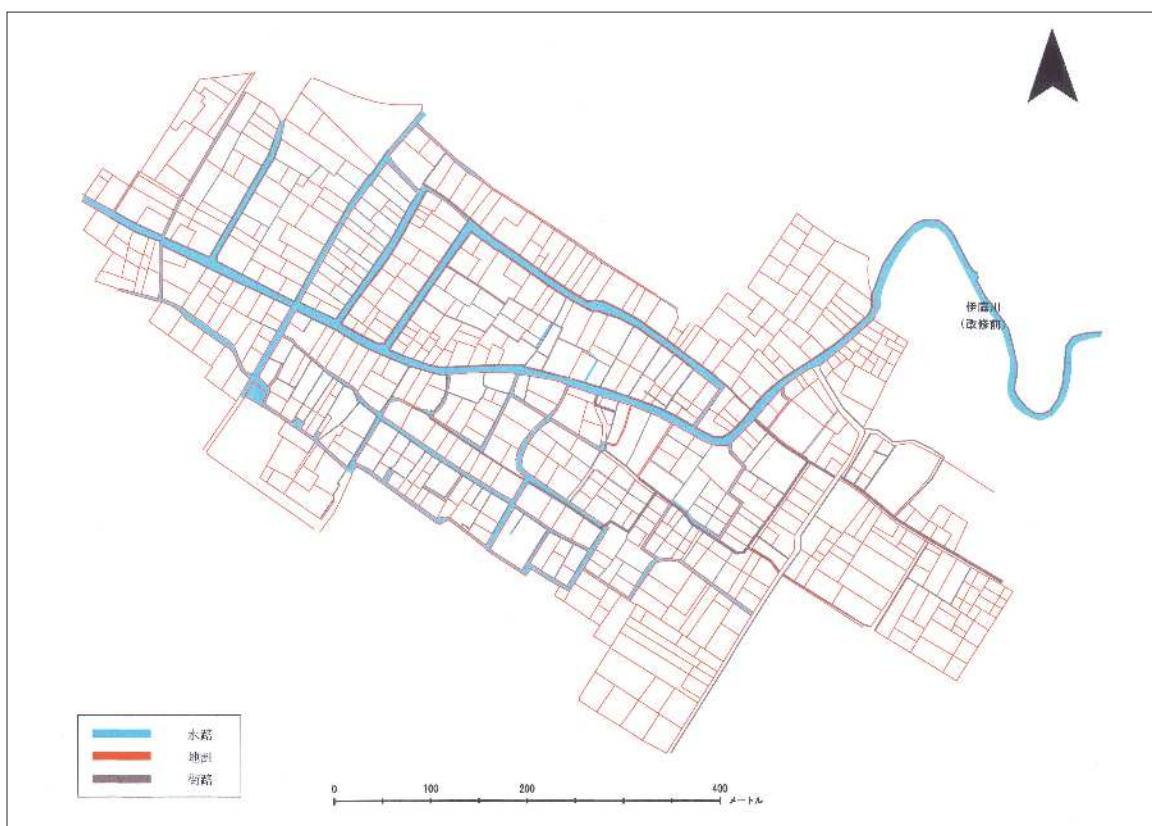


図82 明治の地籍図(明治6年「近江国神崎郡第一区伊庭村地券取調総絵図」を現在の地形図に合わせて描き起こした)

(5) 民家各個解説

中村家

東北川地区にある（図83 写真221・222）。道路に面して板塀を設け、庭の奥に主屋が道と平行に建つ。主屋の西に座敷が棟の方向を変えて接続する。前述の型式分類でA形式に該当する。

主屋はツシ二階建、切妻造、桟瓦葺で、棟高が低い。改装はされているが東側に土間があり、その西に4室が整形に並ぶ典型的な農家の間取りである。元は雑貨や薪炭の商売をしていたようである。棟木に昭和17年(1942)上棟の墨書があって、建設年代が明らかである。

伝統的な瓦葺民家の形式をよく伝えている民家である。

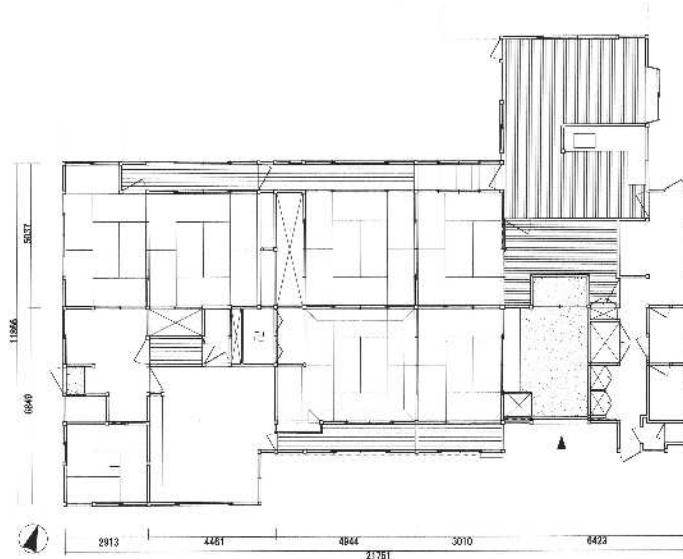


図83 中村家平面図



写真221 中村家内部



写真222 中村家外観

辻家

西北川地区にある（図 84・85 写真 223・224）。道路に接して庭があり、その奥に主屋が道路と平行に建つ。すなわち A 形式である。主屋は本二階建、切妻造、桟瓦葺で、二階高が高い。主屋平面は土間に整形四間の部屋を設ける典型的農家の形式であるが、土間の奥は最初から床張りの台所である。昭和 44 年に茅葺の主屋を建て替えたとの記録写真がある。つまり基本的な間取りや外観の形式は伝統を伝えているが、二階高については戦後の新しい形式が反映されている。とはいっても、伝統的な形式を保ちつつ漸次変化を遂げてゆく民家の一例である。



写真223 辻家外観



写真224 辻家主屋

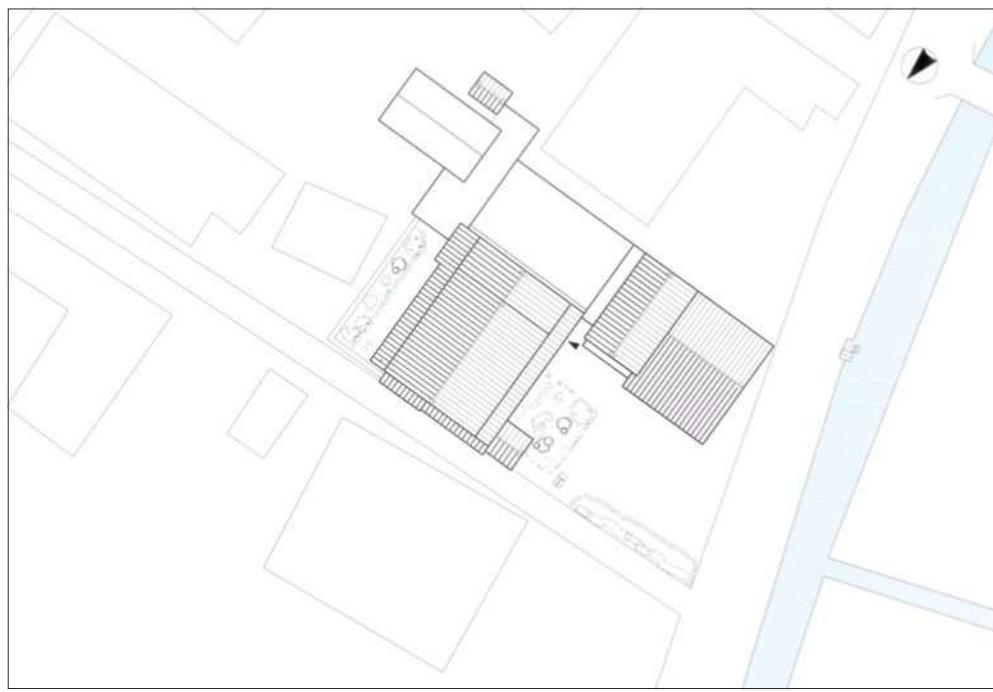


図84 辻家配置図

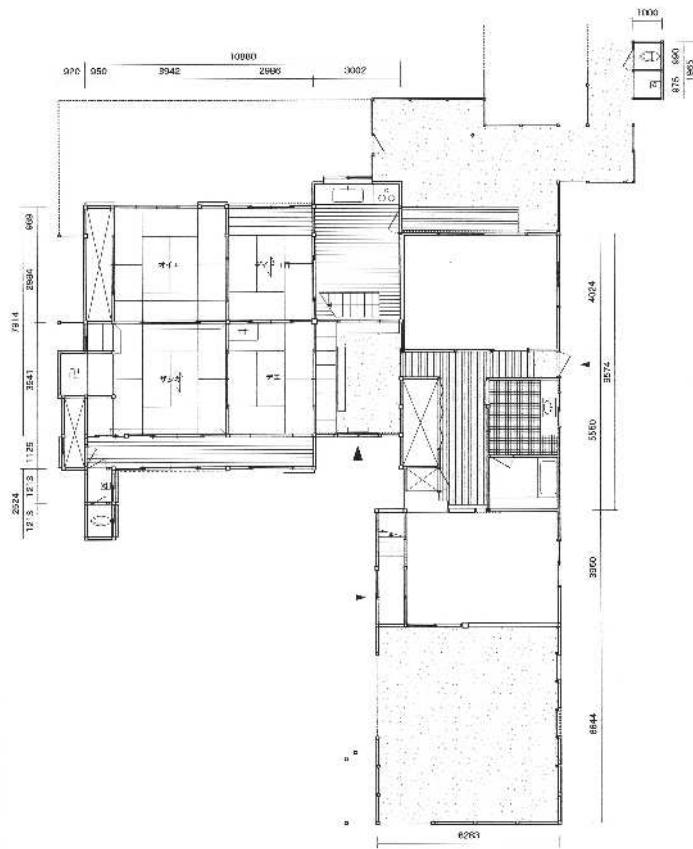


図85 辻家平面図

川原崎家

東殿地区にある（図86～88 写真225～226）。酒屋であった建物を昭和初期に買い取って住居とするとともに、敷地内で麻織物業を営んだ。主屋は道路に平行して建ち、道路との間には幅の狭い庭がある。すなわちA形式である。主屋の背後（南）に隠居屋と織物工場がある。主屋はツシ二階建、切妻造、桟瓦葺である。内部は改修があるが、本来土間と整形四間取りの部屋を持つ典型的な農家の形式である。



写真225 川原崎家主屋内部

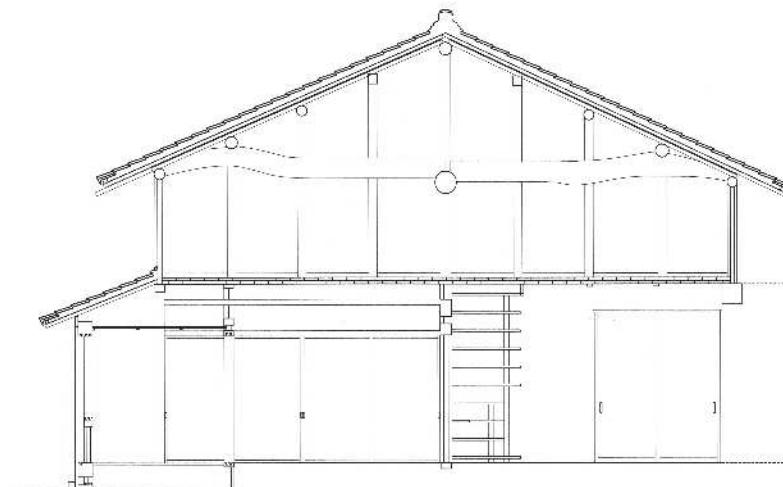


図86 川原崎家主屋断面図



写真226 川原崎家外観

明確な根拠はないが、部材や技法から江戸時代末期の19世紀中期に建てられたとみられる。近世の民家である。西端の落棟部分は昭和37年に増築されている。近世の伊庭の民家の形式を伝える建物である。背後の織物工場は切妻造、トタン葺の建物で、昭和8年の建設と伝える。キングポストの小屋組を持ち、機械が小屋組に取り付けられている。

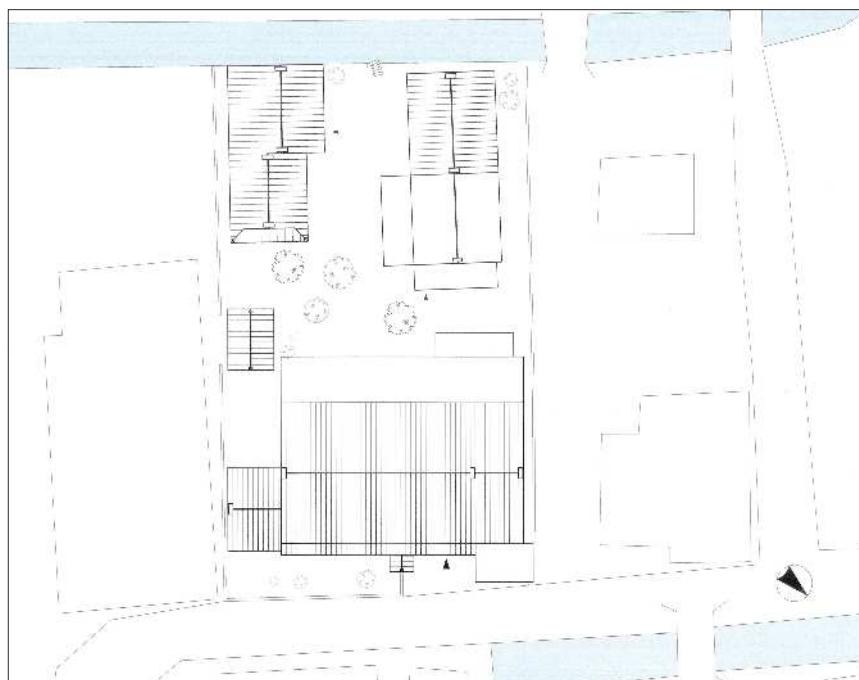


図87 川原崎家配置図

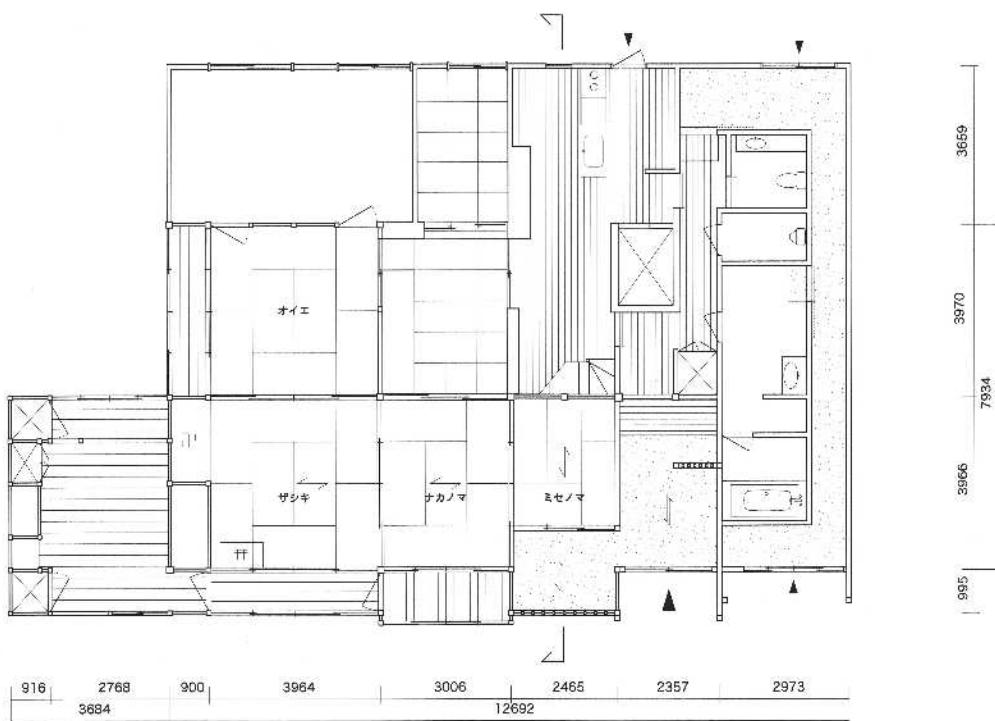


図88 川原崎家平面図

大西家

東殿地区にある（図 89・90 写真 227～230）。かつて伊庭村の村長を務めていたという家で、道路との間に庭を介して主屋が建ち、その奥に庭を囲むように隠居屋や附属屋が建つ。主屋は本二階建て、入母屋造、桟瓦葺の部分に切妻造の角屋が付いたような形態である。ただし内部は角屋に土間、入母屋造の部分に整形四間の部屋が設けられ、両者の境に大黒柱があるので、一般的な切妻造、平入の農家の形式で、部屋部分だけ二階建にして棟の向きを変えた入母屋造とした形式とみられる。そのように見ると A 形式に含めることができる。

昭和 3 年に五個荘の宮大工の手で建てられたと伝えている。隠居屋まで含めて、端正な和風の意匠と良質の材料で造られており、おそらく建物の建設と同時に整備された庭とともに、近代和風建築の優れた一例となっている。



写真227 大西家主屋



写真228 大西家庭



写真229 大西家主屋内部



写真230 大西家外観

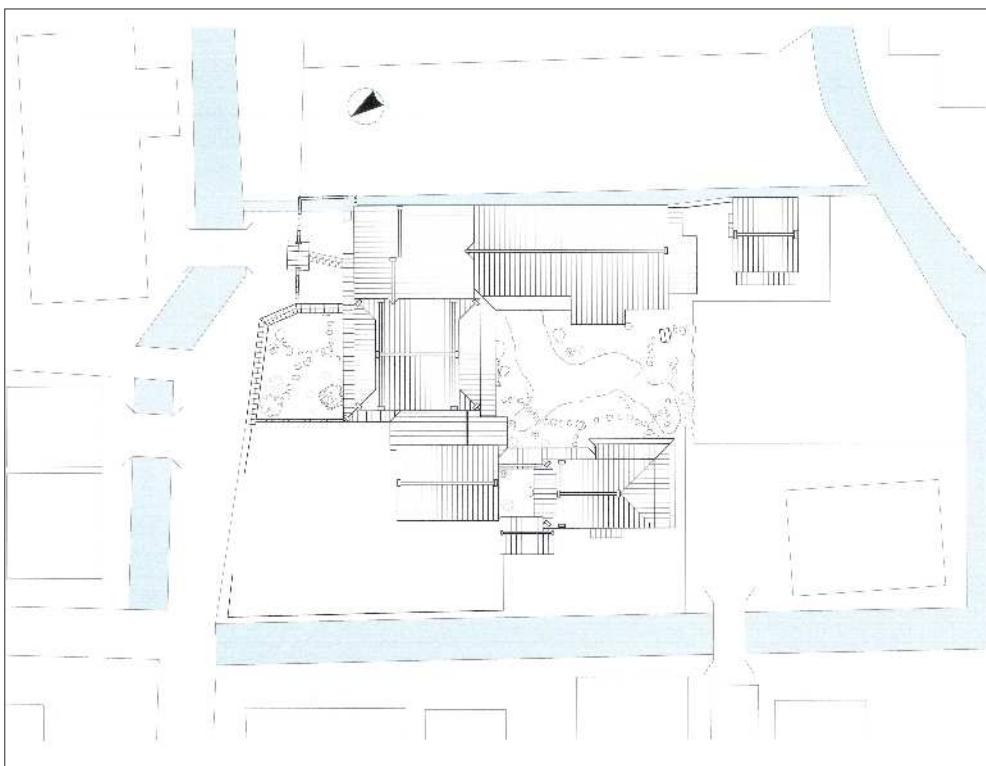


図89 大西家配置図

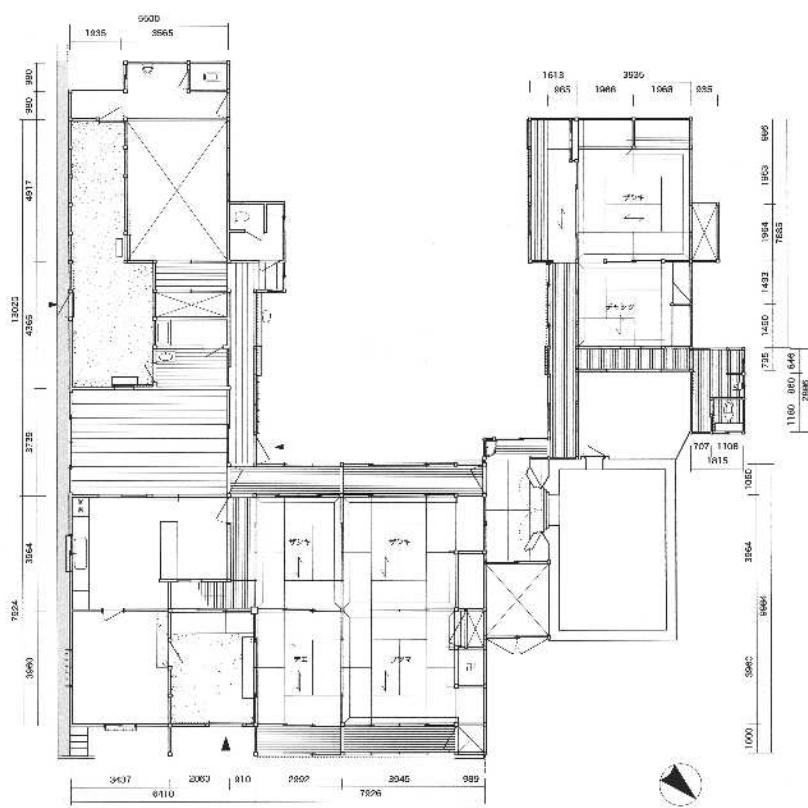


図90 大西家平面図

片山家

東殿地区にある（図91・92 写真231・232）。伊庭集落の東を限る水路（妙金剛寺川）を背にした敷地である。道路添いには別の家が1軒あって、路地を奥に進むと、道路に平行な棟の主屋が建ち、その奥の水路との間に隠居屋・土蔵が建つ。A形式に含めることができる。

主屋はツシ二階建、一部本二階建の切妻造、桟瓦葺である。南に土間があり、北に2列6室の部屋を設ける。規模の大きな農家の平面形式である。改修をして使い続けられているが、部材の状況や聞き取りから江戸時代末期に建てられたとみられる。

道路沿いの敷地が別の家となっているのは、ある時期に敷地が分割されたのであろうか。



写真231 片山家外観



写真232 片山家内部

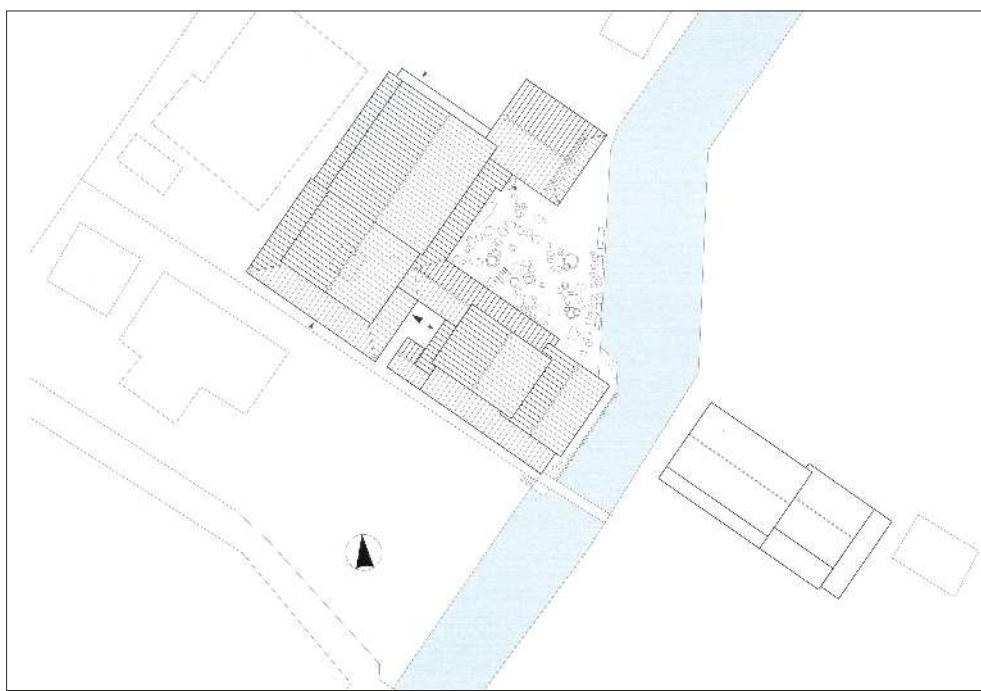


図91 片山家配置図

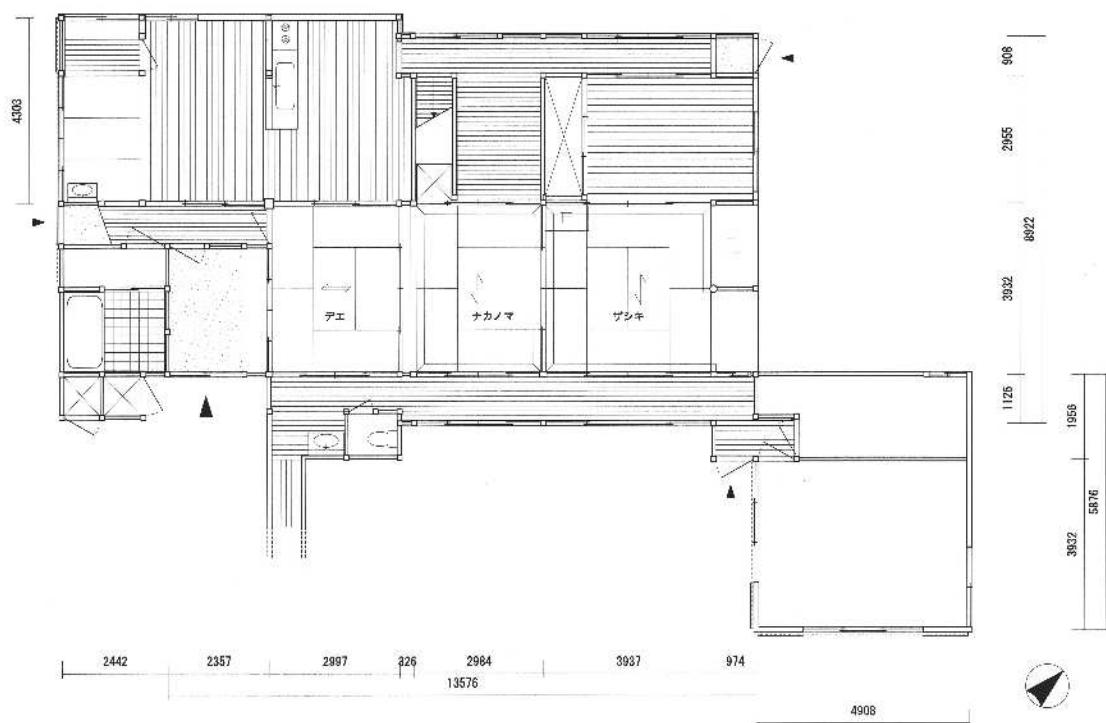


図92 片山家平面図

備前家

名古地区の妙楽寺の裏手にある(図93～95 写真233・234)。道路に直交する棟を持つ主屋が建ち、それに平行して庭が奥へ延びる。すなわちB形式の民家である。主屋は入母屋造、茅葺で、正面側に桟瓦葺の落棟を増築している。妻が道路に向うことになるが、玄関は平側にあって土間と整形四間取りの部屋を持つ。典型的な茅葺民家といえる。明治時代中期に建設したと伝える。近世の茅葺民家の形式は変化することなく明治に入っても継承されていたことを示す。

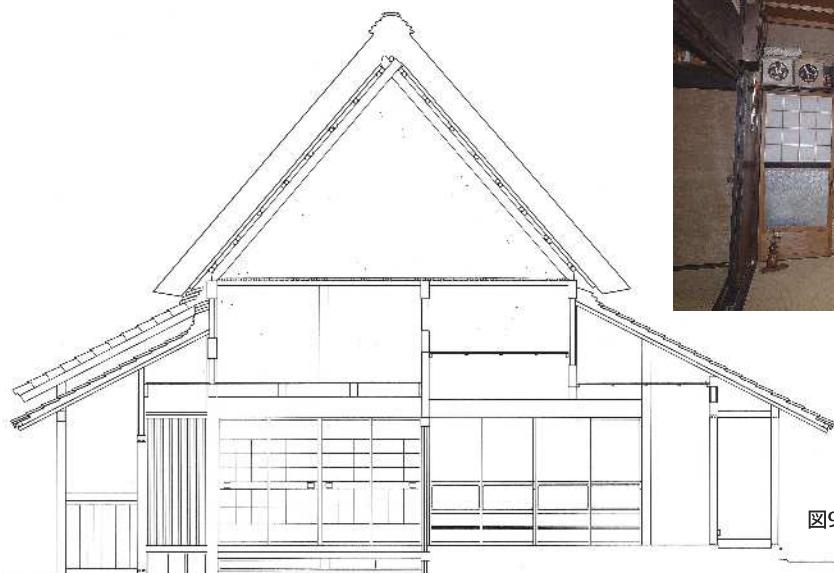


写真233 備前家内部



写真234 備前家外観

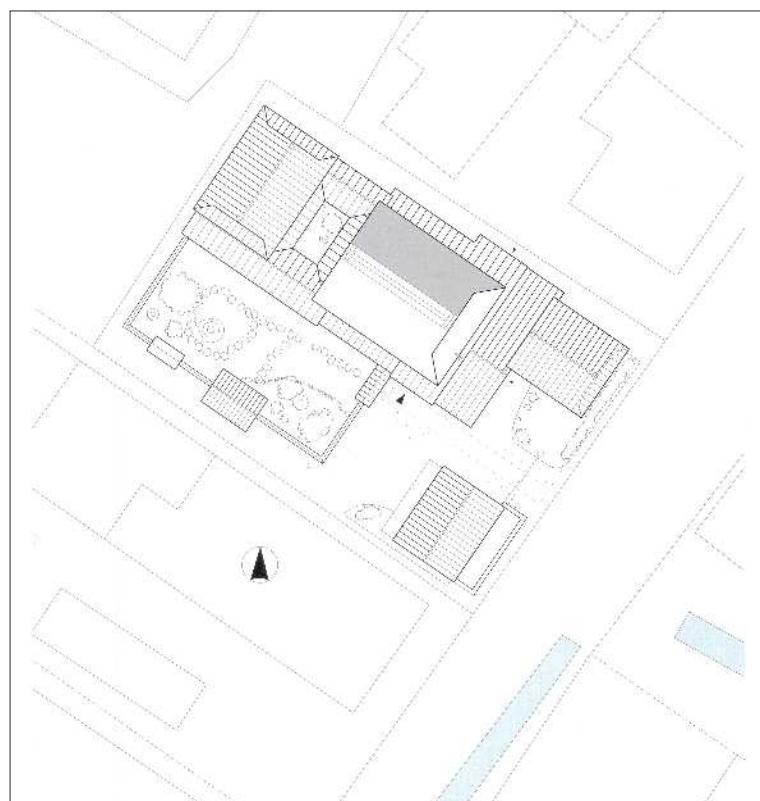


図94 備前家配置図

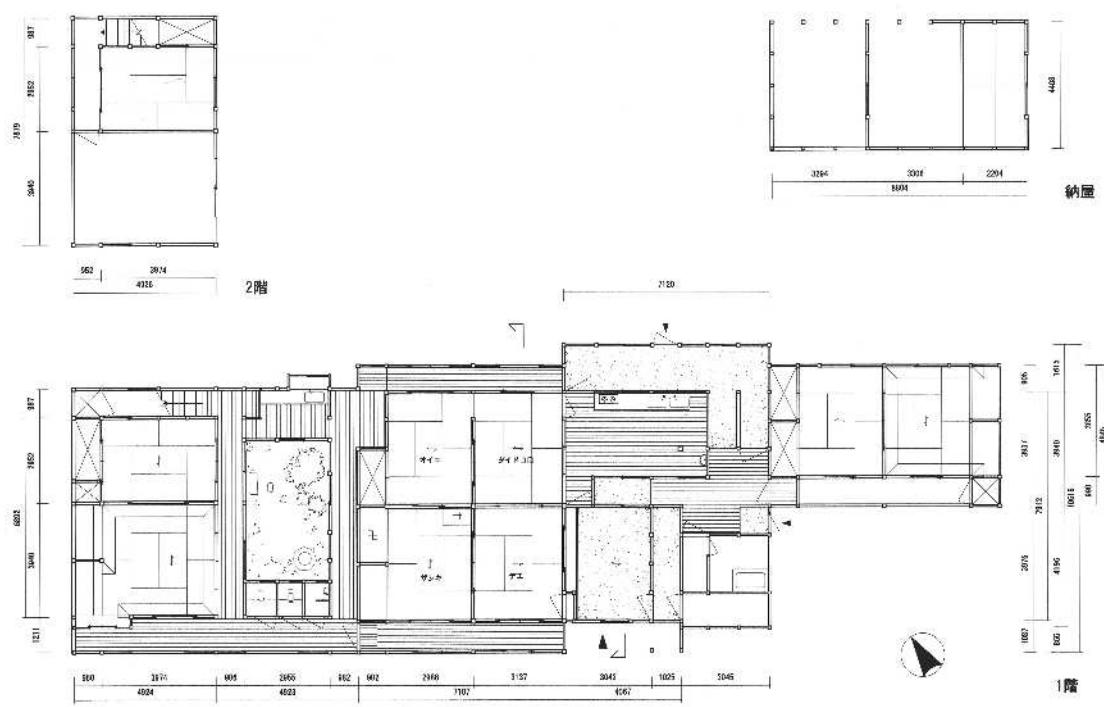


図95 備前家平面図

岡八商店

名古地区にある醤油醸造・販売を営む家である（図 96～98 写真 235～238）。店舗は道に平行な棟を持ち、庭を介して離座敷棟が平行に建つ。これらの北・東に醸造用の蔵や文庫蔵が建つ。一般の民家とは全く異なった構成である。店舗とそれに接する浜蔵は幕末の建設とみられるが、離れ座敷やその他の蔵は近代に入って建てられており、特に文庫蔵は明治 22 年（1889）の墨書きがあって建設年代が明確である。船板を打った文庫蔵の外壁は独特的の景観である。

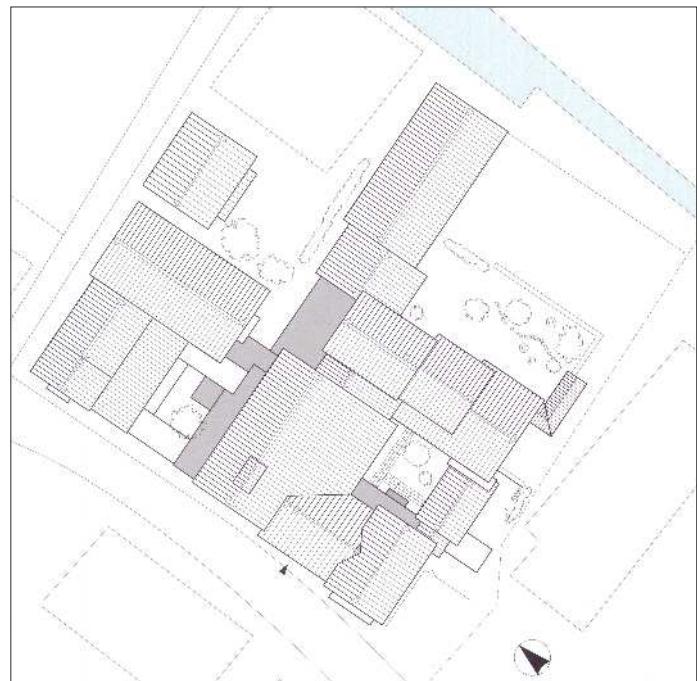


図96 岡八商店配置図



写真235 岡八商店外観

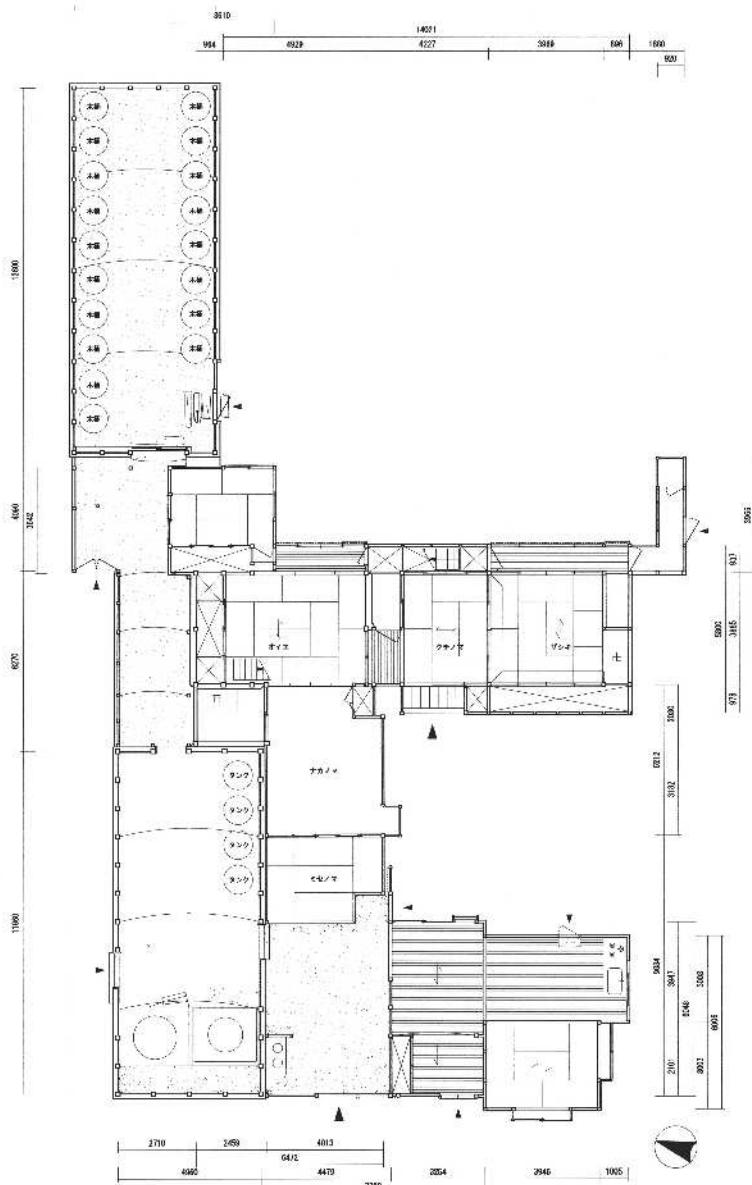


図97 岡八商店平面図

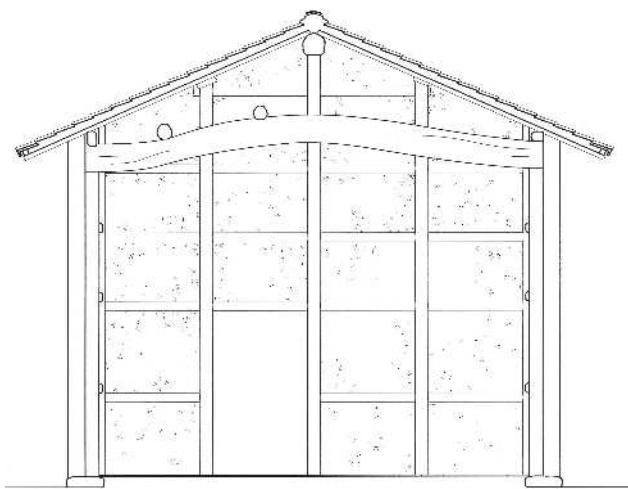


図98 岡八商店浜蔵断面図



写真236 岡八商店土蔵の船板



写真237 岡八商店蔵内部



写真238 岡八商店離座敷

山路家麻織物工場

南川地区に所在する（図99・100 写真239）。片流のトタン葺の建物である。外壁もトタン張りで、上部はガラス窓が並ぶ。内部は土間で、柱に梁を架けて束を立てただけの極めて簡易な構造でできている。小屋組に機械設備の一部が組み込まれている。川原崎家の工場と同様の建物で、小規模工場での麻織物生産の実態を示す建物である。

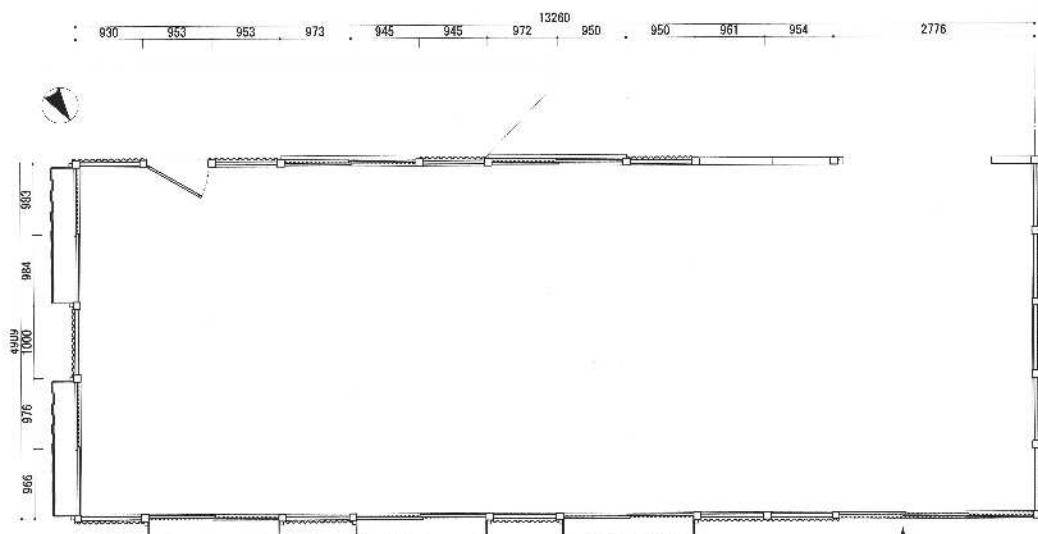


図99 山路家麻織物工場平面図

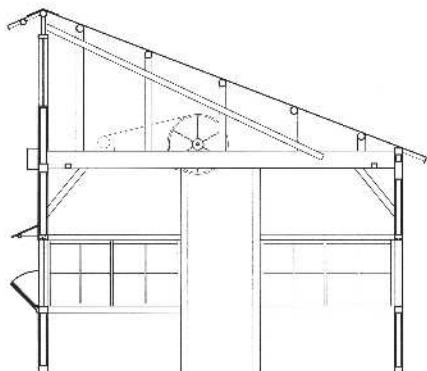


図100 山路家麻織物工場断面図



写真239 山路家麻織物工場

補記

図面の作成は、京都大学大学院工学研究科建築学専攻建築史学講座所属の学生が担当した。民家に関する資料整理の表や図面は、同講座小西貴子の修士論文『農村集落における民家の継承に関する研究』（平成26年2月）で作製したものを使い、著者の許可を得て一部修正の上、使用した。